16年の君が、200年の俺と出会った世界

小来栖　千秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
１６年の君が、２００年の俺と出会った世界

【Ｎコード】
Ｎ２８２８Ｖ

【作者名】
小来栖　千秋

【あらすじ】
「俺の辛さは、君には分からないさ」

西暦二二〇八年、世界は重大な問題に直面していた。全世界でその勢力を広げている大森林とその世界を蹂躙している動物たち。人類の住処は限られていき、人々はより一カ所に集い生活するようになった。世界の大都市化である。
その世界で暮らしている女の子、工藤幹。彼女は一つの事件との遭遇により、世界の真実を知っていく。「知りたい」と強く願った彼

女は自らその真実を追い、一人の少年と知り合っていく。
自分が暮らしている世界の真実を知りたい少女とたった一人で世界を救うために戦う少年の、「生きること」を追いもとめる命の物語。

序章　人間が目指す場所

序章　人間が目指す場所

二〇〇四年　七月二一日。

人間、あるいは生命体は誰にでも共通する運命がある。

生まれ持った力や才能、生まれ育った環境、それらによって誕生後の人生は大きく左右されるものだろう。生まれてくる子供は親を選べない、とは良く言ったものだと思う。しかし、それに抗(あらが)うのが人間なのだとも思う。努力という言葉を否定はできない。それも一つの才能だと思うからだ。

幼くしてこの世を去った命にも、長らくこの世を満喫(まんきつ)した命にも、同じ最期が訪れる。　それこそが誰もが持つ運命。

それは『死(し)』。

儚(はかな)いものだ。

この星の頂点に君臨すると言ってもいい人間ですら、死だけは免(まぬが)れられない。それこそ努力ではどうにもできない、ということなのだろうか。

しかし、やはり人間というものは抗(あらが)う生き物なのだ。

自らの成功のためか、自らの夢のためか。あるいは家族のためか、愛する人のためか、友のためか。その努力が誰のためであれ、人間はさらに上を目指すもの、だと私は認識している。

ゆえに、私もその誰かのために努力をしよう。

私は、この日人間の最も辛い運命に抗(あらが)うことを記す。

（ロナルド・ホース博士　手記より）

第一章　永遠人（前書き）

第一章　永遠人

第一章　永遠人

1

「え……！？」

あまりにも突然のことだった。

眼前に映る光景に、身動きができない。人通りが多い街道で、さっきまで前を歩いていた五〇代くらいの男性が突然跡形もなく消えていた。瞬（まばた）き、まさしくその一瞬で消えたのだ。残像なんて残らない。そんな人間がいた、という事実まで消えているみたいに周囲の人は誰も気付かない。いや、関心を示していないだけだ。忙しい日々を過ごす人々には、その光景は視界に入っていなかった。突然消えた男性、全く気付かない通行人。対極の光景はなぜか、一人の少女にだけ視えていた。

そんな違和感だらけの光景に驚いている女の子、工藤幹。

半袖の白いブラウスと灰色のプリーツスカートの服装で、ブラウスの上にサマーセーターを着ている。これは近くの高校の制服である。平均的な女子高生の身長で、セミロングの髪は若干茶色だが、化粧もほとんどしておらず、端整（たんせい）な顔をしている綺麗な女の子だった。

彼女は週初めということもあり、普段より遅い時間に家を出てしまい、真面目な性格のため遅刻をしないように急いで登校しているところだった。

いつもと変わらないはずの日常で、消えた男性の奥に黒い装束を着た少年がいた。もちろん、さっきまでその少年はいなかった。消えた男性と同じように、急に現れたみたいだ。

少年の身長はそこまで大きくない。日本人の平均身長よりも小さいくらいだろうか。顔立ちも東洋人のもの。ともすれば、日本人かもしれない。しかし、はっきりと断定することはできない。それだけ少年は無表情だった。大きな特徴として、黒い装束とは対象的に髪は銀色。あまりに綺麗な銀の色で違和感があった。また、右目にはナイフか何かで切り付けられたような傷痕がある。そして、その瞳には驚くほどに色がない。まるで他人の干渉を必然的に避けているみたいで、とてつもなく恐い雰囲気を纏(まと)っている。その瞳に、睨(にら)まれたら身動きができない、それほどまでに冷酷な眼だ。事実、工藤は金縛りにあったかのように微動だにできなかった。

そんな身体に夏の蒸し暑い風がそよぐ。通勤時間のために、街道には急いでいる人が多い。普段となんら変わらない日常を送っている人々は、彼女に冷ややかな目を向けながらその横を通り過ぎていく。

「……だ……れ？」

小さく声を絞り出す。

鋭い恐怖感が全身を包む。あの少年が何かしたのだろうか。工藤には分からないが、全身を襲う恐怖感は拭(ぬぐ)えない。恐いなんて軟(やわ)なものじゃない。殺される、という絶望。ただ、それだけしか感じなかった。

「……恐がるのは、当たり前だろう」

少年はひどく冷淡に告げる。その声は直接脳に響いてくる感じで気味が悪い。さらに、冷たいその声が余計に恐怖を煽(あお)る。数秒間二人は向き合うが、その間に会話はない。全くの他人だから、という理由ではない。ただ関わる必要がないからだ。

少年はその色のない冷たい眼で、この場を離れろ、と訴えてくる。彼の胸を抉(えぐ)るような視線は、ただただ痛い。工藤自身も、早くこの恐怖感から解放されたい、と思っている。しかし直接的な恐怖は足を地面に縫い付け、全く動いてくれない。

「しかし、これは……君には関係ないこと……。杞憂(きゆう)の必要性はな

い」
視線を外した少年がゆっくりと歩き始める。
その瞬間、工藤の身体がビクッと震える。本当に殺される、と強く感じ動こうとしない足で無理矢理後ずさりする。だが、少年は消えた男性がいた場所で立ち止まる。殺意のようなものを放っているが、それは工藤に向けられたものではないみたいだ。
となると、目的はあの男性だったのだろうか。少年は男性が消えた場所で、跪(ひざまず)いて何かを呟いている。頭の中が真っ白になっている工藤には、何を言っているのはか聞き取れない。ただ、少年の表情が一瞬曇った気がした。
「今、見たことは口外するな。万一――誰かに話したら、君の命はない」
数秒間そうした後、少年は立ちあがりながら最終的に告げる。冷酷な声に変化はない。明らかに敵意のある眼で、工藤を睨(にら)む。
直接睨まれた彼女は思い切って来た道を走って戻る。これ以上、あの少年といたら過呼吸で死んでしまいそうだった。それほどまでに圧倒的な威圧感があった。
慌ただしい朝の街道を、道行く人の奇異な目を気にせず走る。どれくらい走っただろう。足が止まったのはそれから数分が経った後だった。体中から冷や汗が溢れ出る。少年の姿はもうないというのに、身体は固く強張ったまま。それでも、解放感から地面に座り込む。数分間じっとしていると、呼吸が落ち着いてきた。いまだに震える身体を抑えながら工藤は通う高校に着いたのは、それから一時間後のことだった。

第一章　永遠人　？

工藤が学校に着いた頃には、すでに二限目が始まっていた。
遅刻したことを怒られるだろうと思いながら、工藤はゆっくりと教室のドアを開ける。
「つまり、この計算式ではさっき言ったこの公式を当てまめれば簡単に解ける、というわけだ。おっと！？　コラァ、工藤っ！　断りもなしに遅刻とはいい度胸だな」
授業を淡々と進めていた先生の声に反応してクラスメートの目が一斉に工藤に集まる。みんな、突然入ってきた工藤に驚いている。
「す、すいません。ちょっと出掛ける時にゴタゴタして……」
「言い訳はいい。授業が終わったら先生のところまで来なさい」
「は、はい……」
大柄で体育会系の数学教師は、それだけを言うと授業を再開する。クラス中の視線が集まる中、工藤は恥ずかしそうに自分の席に座る。急いで鞄からパソコンを取りだして立ち上げていると、隣に座っていた友達の女の子が話しかけてきた。
「幹、何かあったの？　珍しいよね、遅刻なんて」
彼女の名前は、高田舞。
工藤と同じ制服だがサマーセーターを着ていない彼女の肩には、黄色がかった茶色の髪が毛先をアイロンでゆるく巻かれている。化粧も濃くはないがはっきりとしている顔で、クラスでも人気のある割と活発な女の子だ。
彼女は高校に進学して、工藤の初めて出来た友達である。比較的引っ込み思案な工藤がなかなかクラスに馴染めずにいた時、彼女が手を差し伸べてくれたのだ。
「ちょっとね」
そんな昔のことを頭の隅で感慨深く思いながら、工藤は言葉を濁(にご)す。

「え〜、なになに？　なにがあったのよ？」
「そんなたいしたことじゃないよ。って先生がにらんでるよ舞」
あの少年は、見たことは誰にも言うな、と言っていた。恐怖が残っている彼女はあとが恐いので話すことはしない。高田はまだ不満そうにしていたが、先生に怒られたくもないので引き下がる。
「ちぇっ――。また後で聞くからね！」
「はいはい……」
あとで聞くという高田の言葉に苦笑を交えながら、工藤は返す。そして、しつこく聞いてきた高田から視線を戻して数学教師の話に集中する。
今の時代の授業はパソコンを中心にして行われている。黒板やノートといった媒体はすでに使われていない。教材はそれぞれ生徒のパソコンに送られたものを使用し、教室の全面にホログラフで表示した教師用の教材で授業を進めていくのだ。自ら字を書くということはあまりしなくなったが、それでもテストはプリントを使うあたり、まだ時代の流れは紙からデータに移行しきれていないのではないかとも思う。
夏休み前の授業は退屈で仕方がない。地獄の期末試験も終えて、テストの点数に一喜一憂する日々も終わりを告げようとしていた。教壇に立つ教師も、あまりやる気があるようには見受けられない。夏休みが始まるまでの数日間は、授業といってもテスト範囲以降のやり残した部分をやるだけで急ぐ必要がなく、のんびりと授業を進めていこうという考えだろう。授業体系が今のままでいいのかとも思うが、宿題等もあまり出ないので、それはそれでうれしくも思う。
意味のない残る数十分の授業を受けた後、体育会系教師にさんざん怒られた工藤は机でぐったりとしていた。その頭の中では、今朝会った少年のことが尾を引いている。
（あの男の子はなんだったんだろ――）
少年の顔は東洋人のものだった。年も同じくらいだろう。ただ、纏（まと）っている雰囲気は間違いなく一六歳のものではない。それに学生

には見えなかった。彼は何をしているのだろうか。着ていた服装もおかしかった。今時、浴衣みたいな装束を着て街を歩く人なんてそうそういないだろう。何かの宗教の人かとも思うが、それにしては梅雨も明けて、これかれさらに暑くなるというのに長袖の装束など着ているだろうか。

（それに、あの男の人……。いきなり消えちゃうし、ほんとなんだったんだろ）

目の前で男性が消えた衝撃は今も頭の中に残っている。目の前を歩いていた人が突然消えていなくなるなんて体験はもちろん今までしたことはない。ホラー映画でもそんな映像はないだろう。何せ目を離しているスキにというものではなく、前を向いて歩いていたらなくなったのだ。科学が日進月歩進歩しているとはいえ、そんな技術があることを工藤は聞いたこともない。

そして一番気になっているのが、突如消えた男性と突如現れた少年との接点だ。目の前で消えた男性は、工藤にとっては見ず知らずの赤の他人。それに工藤にはあの少年とも繋がりがあるようには見えなかった。それでも、少年はまるで知り合いのように近づいて行った。何かあるのだろう。しかし何かは分からない。その空虚感が腹ただしい。一度関わってしまったがために、どうしても気になってしまうのだ。

そんな考え事をしていると、

「幹、どうしたの？　ボーっとして」

突然、高田が話しかけてきた。

「……！？」

今朝のことに没頭していた工藤は驚く。その反応を見て高田は笑うが、驚いた工藤は少し頬を膨らませて言う。

「何よ、舞？」

「もう恐いよ、幹」

「突然驚かすからでしょっ」

「そんなこと言っても。だいたい私は声を掛けただけで、驚かすつ

もりはないし」
そう言って、高田は隣の席に座る。
サバサバした性格の彼女は、誰とでも分け隔てなく接する。たとえ馬が合わない人とでも、無理矢理仲良くなろうとするのだ。それが彼女が人気のある理由の一つでもある。そこは、あの少年とは対照的だ。彼は工藤と関わるどころか、注意かどうか分からないが拒絶のような反応を示していた。まるっきり対極の二人が出会うとどうなるのかなぁ、と工藤は何となく思ってしまった。
「ねぇ、幹。帰りにモール酔ってかない？」
ゴソゴソと鞄の中を漁(あさ)りながら、彼女は放課後にショッピングモールに行かないかと誘う。今日は部活もないし、これといった用事もないので軽く頷く。
「でも、どうしたの？　突然モールに行きたいなんて」
高田は鞄から取り出した鏡で、自分の髪を整えている。
容姿をいつも気にしている彼女のことなので悪びれた様子もないが、せめて話している時くらいはやめてほしい、と工藤は毎度思うのだ。
「うーん、欲しいバッグがあるんだよねぇ。ちょっと高いけど、思い切って買おうかなって思って」
「あ、そっか。誕生日近いんだったね」
ふと教室の窓から外の景色を眺める。
茹(う)だるような夏の日差しの中、グラウンドで遊んでいる生徒が何人かいた。照りつける太陽と少年たちの騒ぎ声は、これから始まる夏の日を象徴していた。

第一章　永遠人　？

2

西暦二二〇八年。日本国首都東京。世界的な大都市の東京には、現在三〇〇〇万人もの人が生活している。進化を続けた科学とともに人類は一か所に集まるようになったのだ。これには深い理由（わけ）がある。

二〇世紀の戦後に始まった高度経済成長は人類の進化を速めた。国民の生活レベルは一気に上がりっていった。しかし、それに満足をしないのが人間という生き物だったのだ。完璧という理想を求める科学者たちは、その成長につられて『人類のさらなる進化』を名目に新型特効薬（ワクチン）による人体実験を実施した。

それが、『永遠の命』計画。ロシアの科学者を中心にした研究グループは、染色体末端を伸長させる効果のある酵素から作られた未発表の――自律性があり完璧な複製能力を持つ――特効薬（ワクチン）『ＰＣＤＶ』――Ｐｒｏｍｏｔｅ　Ｃｅｌｌ　Ｄｉｖｉｓｉｏｎ　Ｖａｃｃｉｎｅを細胞の核に注入。そうすることによって、ＤＮＡを完璧に複製して永遠の細胞分裂を可能にし『永久（とわ）の命（いのち）』を完成させる、という国際法違反の実験を行った。この壮大な実験はロシア企業のもと極秘裏に進められ、開始当初は上手くいっていた。モルモットの細胞に『ＰＣＤＶ』を注入、そのＤＮＡ量の変化を調査し、モルモットを培養機に入れ成長を促し、その細胞分裂回数を計測し、永遠の細胞分裂を実現しているかのデータを徹底的に取り上げた。数ヶ月間のモルモット実験を経過した後、人体実験に移行。しかし人体の細胞に注入した時点で、強力な拒絶反応が発生した。人体のＤＮＡを複製しなければならないところを、人体の細胞を破壊する、という暴走を起こしたのだ。結果、暴走した『ＰＣＤＶ』を止めるこ

とはできず、対応の際の不手際により研究所の人間にまで感染者は広がり、実験を行っていた研究所の人間は全滅。暴走をした『ＰＣＤＶ』はモルモットたちに感染をしていき、凶暴化したモルモットたちによって研究施設は全壊、さらに特効薬（ワクチン）は大気中に散布されてしまった。散布された特効薬（ワクチン）は本来の性能（ちから）を変質してしまい、人間が感染してしまった場合、その生命力を糧にして増殖をする凶悪なウイルス『ＰＣＤＶ』――Ｐｒｏｍｏｔｅ　Ｃｅｌｌ　Ｄｉｖｉｓｉｏｎ　Ｖｉｒｕｓへと変貌してしまった。

ウイルスの生命力はかなり高い反面、空気感染や血液感染など感染のパターンは多数あるが、感染力それほど強くない。そのため人類への感染爆発がすぐに起こるということはなく感染者の数は少ないのだが、当時の医療技術では治療法がなかった。結局、感染者は増えていく一方で、世界の人口はこの数百年で一五億人近くも減ってしまった。また、ウイルスは感染した植物、動物に対しては強い影響を与え、その発育を極端に促している。植物の異常な増殖は、人類の住処を減らすことになる。人類の衰退と植物の繁栄は、地球の生態系を著しく変えた。その結果、現在の東京のように人々は一か所に集うようになったのだ。また動物に対してはその生態の巨大化を促し、人間を襲うようになっていった。そのため東京という大都市に限らず、大森林と接する都市には、巨大な塀と鉄網柵が都市全体をぐるっと囲っている。これは凶暴化した動物から人間を守ることと、増殖と発育を繰り返す植物から人類の住処を守るために建てられたものだ。さらに空中には感染した鳥や虫の侵入を防ぐために、動物たちが嫌がる周波数の電波が常に流されている。それほどのことをしなければ、この地球上で人間は安心して暮らすこともできないような世界になっていったのだ。

東京という世界有数の大都市はいつでも騒々しい。

東京の人口はこの一〇〇年間でそれほど変動していないのだが、関東平野には六〇〇〇万人以上の人が暮らしている。その中の約七割の人は生活圏を東京まで伸ばしているのだ。自然と街を行く人の数は多くなる。

同様に、東京の街には多くの自動車が道路を行きかっている。この街では渋滞は日常茶飯事でしかない。ただ発達した科学の影響で騒音がしないのはマシだろう。現代の自動車はガソリンを燃料としていた時代からシフトしている。もはや底をつきそうな石油よりも無限にある自然エネルギーに移行しているのだ。自動車の車体には、低コストで製作できる軽量のソーラーパネルが無数に取り付けられている。そこで得た太陽光のエネルギーで走らしているのだ。このように発達したソーラーシステムは街のいたるところで活用されている。

東京湾などの湾内や大きな河川には大規模な水力発電所が設けられている。地球温暖化や石油消費量問題により、このように自然の力を利用した発電所は数多く存在している。

そんな二酸化炭素をほとんど排出しなくなった街を工藤と高田の二人は歩いていた。周囲の建物も外壁にソーラーパネルを取り付けていて、そこで集めたエネルギーを蛍光灯やエアコンなどの電気機器に使っているのだ。

地下鉄駅前のショッピングモールに二人は足を運ぶ。

一二階層で、約五〇〇ものショップが入っているこのショッピングモールはこの地区最大のものだろう。それでも、このモールが大きく見えないのは、近くに乱立している大型雑居ビルのせいだろうか。東京都心に近くなくても、四〇階建ての建物は珍しくもない。その建物の一フロアを貫通するようにモノレールの線路が引かれ、建物内部の一フロアまるまるが駅になっているビルもあるほどだ。それでも耐震構造に問題がないのは、改めて地震大国日本の技術ということになるだろうか。

ショッピングモールは、工藤たちみたいにショッピングや遊びに

きた学生で混雑していた。
目当てのバッグがあるお店にいく途中、高田は小さな雑貨屋に入る。店内の小物を眺めているだけで、かなりの時間を費やす。本来の目的を忘れて他の物に熱中するのは彼女らしいが、ついてきた工藤にとっては煩わしいとも思ってしまうこともある。早くお目当ての物を買ってほしいかぎりだ。
内心でそう思っていても、気が強くない彼女は口にはしない。それどころか、自分までもが可愛らしい雑貨に夢中になり始める。ちょうどバイトの給料も入ったころで、お金には余裕がある。少しの間、二人は雑貨を物色していた。
何か買おうかなぁ、と思っている所に高田が話しかけてくる。
「幹―、そろそろ行こうか？」
ちょうど気に入った小物を見つけたところだった工藤は、不満に思いながらも仕方なく彼女に付いていく。
「うん。――っ！？」
すると、急に悪寒を覚えた。
身体がぶるっと震えて、空調が効いてる店内とはいえ、それよりもさらに寒さを感じる。
（な、なにこれ！？）
恐怖を感じて辺りを見回す。それでも何もない。ただショピングを楽しんでいる人がいるだけだ。だが、工藤は間違いなく誰かの存在を感じていた。
「幹、どうしたの？」
不思議に思った高田が尋ねてくるが、工藤は「何でもない」と小さく答えた。
何だったのだろうか。ふいに今朝会った少年のことが脳によぎる。しかし、あの痛いくらいの恐怖感を再び感じてきたので、頭の中から少年のことを払拭する。
「行こ、舞」
「う、うん」

心配に思っている高田だが、工藤に大丈夫と言われた以上過度に気を配るのも失礼かと思う。それでも、仲が良いからこそ必要以上に心配してしまうのだ。そんな高田の様子を知っていながらも、彼女には強がりを見せる。自己主張をしないのではなく、自分の弱みを一番の親友に見せたくないのだ。

自分のことを何でも話せる相手である反面、自分のマイナス面は秘密にしたがるのだ。

その後も目的のお店まで、様々なお店を見て回る。

高田の買い物に付き合うだけではなく、自分も何か買おうかなと良いものはないかと探すが、これといって今欲しいものがないため宙ぶらりんな気持ちのままでいろいろなお店を出ては入ってを繰り返していた。

「幹は何も買わないの？」

「んー、お金も入ったし、何か買おうかなって思わなくもないけど、今日はやめとこうかな来月は旅行行くんだし、出費多くなりそうだから」

工藤と高田はもう一人の友達と夏休みに旅行に行こうという計画を立てているのだ。

「そっか、そういやそうだね。幹はそういうとこ偉いよねー。私なんて欲しいものは即決で買っちゃうもんなあ」

「偉いって言えるのかな？　単純にケチなだけでしょ」

「それでも偉いって私は思うよー。目的もない貯金とかはどうなんだろって思うけど」

こういうところは彼女なりのしっかりとした考えやポリシーがあるのだろう。本当にサバサバした性格の子である。

「舞は欲しがりすぎなんじゃない？」

「あぁ～、そうかもっ。物欲っていうの？強いのかも」

少し皮肉を込めた言葉にも笑いながら返してくるあたり、意識があるのかないのか全く分からない。それでもお金に困っているのを見たこともないところ、裕福な家なのだろうか。高田自身もバイト

はしていたはずだけれど、あまりバイトに行っているということを聞かない。
三階にある目的のお店に着いた彼女はさっそくバッグを探し始めた。
誕生日が近いということで親から、好きなものを買いなさい、と数万円をもらったらしい。なんとも味気ないプレゼントだが、現実的には、いらないものをもらうより現金をもらったほうがうれしいのかもしれない、となんとなく思った。
「あっ、これなんかどうかな？」
「―うん。いいと思うよ。舞に似合ってる」
数多くあるバッグを物色している高田の隣で、工藤は頭から離れてくれないさっき感じた悪寒のことを考えていた。
ちょうど雑貨屋から出たところで強く感じた。何か、悪い予感がしてしまうのだ。別に霊感が強いわけでもないが、昔から勘には少し自信があった。隣で楽しくショッピングをしている高田には悪いと思いながらも、工藤はあんまり楽しく感じられずにいた。
数分後、気に入ったバッグを買えたのだろうか。少し顔を綻ばせながら買い物袋を手に提げた彼女は、軽い足取りで工藤に近づいてきた。
「良いもの買えた？」
「うん。ちょっと高かったけど」
うれしそうな高田と工藤は、その後も少しブラブラとしてからショッピングモールをあとにする。ショッピングモールを出る頃には時刻も七時頃になっていた。

第一章　永遠人　？

3

西の空が鈍く黄昏に染まった東京の街は、騒がしさを増す。行きかう人々は放課後帰りの学生から、ＯＬやサラリーマンなどの社会人へと少しずつ変わっていく。また日没間近の、この時間帯は繁華街のネオンが点灯し始め、昼のように明るくなる。周囲の高層ビルにも明かりがつき始め、東京の街は一転して夜の風景を彩り始める。

東京の道路はいたるところがジャンクションのように入り組んでいる。周囲には三〇階建てや四〇階建ての高層ビルが立ち並んでいるため、道路も自然と立体的なつくりになる。二人が歩いている歩道は、その車道の下にあって太陽光はなかなか入ってこない。そのため、歩道には街灯が多く設置されている。また、この街灯は犯罪抑止力と沈静効果の高い、青い電飾を利用されていた。

さきほどのショッピングモールは、工藤たちが普段利用している地下鉄駅の近くにある。そこから駅までの道のりは徒歩で五分くらいのものだが、多くの人がゆっくりと歩いていた。

薄く点灯している街灯が照らす大きな歩道は、地下鉄の駅へと向かう社会人やフリーターで埋め尽くされている。混雑した人混みをかき分けるようにして工藤たちは駅へと歩いていく。二人とも学校へは地下鉄を利用して登校している。普段は帰宅ラッシュをさけるため、もう少し早い時間の便に乗って帰るのだが、高田の誘いを断れなかったために、普段と何も変わらないはずの今日はずいぶんと遅くなるだろう。

二人が利用している地下鉄の駅は公共機関ではあるが、内部構造は非常に複雑になっている。地下六階層の造りと大きく、さらに各階層で一〇平方キロメートルと非常に大きな地下街とつながってい

る。地上の建物こそ簡素なものだが最新技術を用いて造った、超巨大な地下施設は建物の強度も高い。
「なんか今日は人が多くない？」
「うん――そうだね」
工藤も思っていたが、高田も駅までの道には多くの人が歩いていることを不思議に思っていた。中には歩道で立ち止っている人もいる。
「何かあったのかな？」
「さあ？でも、なんかみんな携帯見てるね」
工藤の言うとおり、多くの人が空中にディスプレイを表示していた。何かニュースでも見ているのだろうか。
彼女たちは疑問に思いながらも、とりあえず駅へと向かう。これ以上帰りが遅くなると家族が心配するだろう。
地下鉄駅の前まで来ると、人の多さは増していった。事故でも起こったのかと思ったが、地下鉄の電車は運行の全てを、自律性を持ち無人運行を可能にしたＡＩに任せているため、配線が切れない限り、ダイヤの乱れは絶対に起こらない。人身事故の可能性もなくはないが、線路には入れないように敷居が設けられているため、飛び込むなどのことは出来ないようになっている。そのため電車が止まる、ということはまず起こらないのだ。
さらに硬質感が漂う駅内には、工藤たちのように帰宅しようとしている人で溢れていた。自家用車よりも安い地下鉄を利用している人の方が多いのだろうが、それだけが理由ではないくらいに人の数が多い。
外よりも騒がしい駅内は、心なしか異様な雰囲気に包まれている気がした。時刻が遅いこともあって、大勢の人がいるのは当たり前だろう。しかし、みんなその場から動こうとしない。それどころか、電光掲示板にクギ付けになっている人ばかりだ。ホームにも向かわずに何をしているのだろう、と訝(いぶか)しみながらも改札口へと歩く。立ち止まる周囲の人々を横目にしながら、何気ない会話をしつつ地下

鉄の改札を抜けようとしたところで、不意に慌てた駅員に止められた。ずいぶんと切羽詰まった感じで急かしている。
駅員の話では、どうやら地下鉄のホームが非常事態になっているようだ。そのせいで、困っている人々が電光掲示板をながめていたのか。だが、警報はでていない。そのこともあって、同じように止められた周囲の人々と同様に、怪訝（けげん）に思っていると地下鉄のホームから大きな爆発音が響いた。
「な、なに？」
あまりに突然のことで二人とも驚く。同様に、立ち往生していた多くの人が一斉に騒ぎ始める。その動きは瞬く間に全駅内に広がり、大きな混乱を生む。
爆発音に続いて、大きな衝撃が地下鉄駅を揺らす。天井からぶら下がった広告や蛍光灯が衝撃に煽られて激しく揺れた。
再びショッピングモールで感じた悪寒が襲ってくる。しかも、先程と比べモノにならないくらい強い。工藤は立っていられなくなり蹲（うずくま）る。
「はあはあ…、なに――この感じ…」
「幹っ？」
工藤の様子を見て、慌てて高田が駆け寄よる。
その瞬間、再び地下鉄駅が大きく揺れた。駈け出した高田までも体勢を崩して倒れる。
地震のような強い揺れは地上にまで届く。火災報知機が鳴り響く中、逃げ惑う人々は我先にと地上への階段に群がる。しかしあまりに多くの人が駅の中にいたため、階段も進めずに立ち往生が起こっている。スプリンクラーが起動して急激に湿度が上がった駅内で、三度目の大きな爆発が起こる。
「何なの、この爆発？」
急な爆発に、工藤のもとに駆け寄ろうとしていた高田も危険を感じてうつ伏せになる。それでも工藤のそばへ行こうとするが、天井から落ちてきた瓦礫に阻（はば）まれてしまう。二人の間は完全に遮断され

てしまった。
「幹！幹っ、大丈夫？」
必死に声をかける高田だが、工藤の返事は聞こえてこない。なんとかして瓦礫の向こうへ行けないかとすき間を探してみるが、どこにも通れそうなところはなかった。
「そんな――」
（ど、どうしよう……）
高田が現状に戸惑っていると、その近くでは同じように多くの人が右往左往していた。
爆発の影響で天井が破壊され、落ちてきた瓦礫のせいで地下鉄駅は大きく分断されていた。そのため多くの人が混乱していた。
地上へと続くエスカレーターは途中で引きちぎられ、上部部分はいまにも崩れ落ちそうになっている。階段にはいまだに多くの人が群がっていて、もはや通れそうにもない。ホームへ繋がる改札口は落ちてきた天井のせいで抜けられず、そのホームも天井が崩れたことで吹き抜けになっている。自動販売機やらコインロッカーやらの残骸が散らばっている駅では、爆発の影響で断線したのか蛍光灯は完全に消えて、駅内は非常ランプだけが虚(むな)しく僅かな範囲を照らしている。

第一章　永遠人　？

爆発音のなかから銃撃音までも聞こえてくる。吹き抜けになったホームからは複数の男たちの怒号が飛び交う。どうやら下のホームでは何人かの男が銃撃戦を繰り広げているみたいだ。

そんな惨劇が繰り広げられている地下鉄駅内に『特別警戒宣言（コードレッド）』が駅内放送で流される。

喧騒（けんそう）が激しい駅内に、女性のオペレーターの声が響きわたる。その声を聞いて高田は眉をひそめる。

（コードレッド？）

『特別警戒宣言』。

市街にテロリストなどの破壊工作を目論む者が侵入した際や集団犯人による事件が発生したがた際に、発令される防衛体制の合図である。市街の一部を隔壁で封じ込め侵入者を逮捕、という基本的な侵入者対策なのだが、開発途中の、この防衛システムには問題点がある。

（駅に閉じ込められる？）

防衛システムの全てをコンピューターに任せているため、封鎖区域に民間人が残っていても、隔壁は発動時間とともに自動で下りるのだ。実際に大勢の人が取り残されたこともある。この点では、まだまだ改良が必要なのは政府も認めている。それでも被害も少なくさせるためにと、犠牲者が出ていることを知りながらも現時点のままつかっているのだ。

突然の防衛システムの発令とともに地下鉄駅の出口には分厚い隔壁が下される。ちょうど出口に群がっていた人々は絶望とする。帰宅時間と重なっていたため、駅には多くの人が取り残された。ほとんどが社会人だが、中には小学生や中学生の姿も見えた。みんな普段の日常が突然塗り替えられたことに困惑している。

『特別警戒宣言』の発令とともに、地下鉄駅から地上への出口は隔

壁が下りて閉ざされた。階段に群がっていた人々は突然降りた隔壁に唖然(あぜん)とし、さらに混乱は広がる。
（うそでしょ…？　出口は―――）
慌てて周囲を見渡すが、駅の改札口は崩れた天井で二つに寸断され行き来はできない。ここではない、他の出口を探すにしても駅内が寸断されてしまっては通ることすらできないのだ。高田の側は完全に閉じ込められたと言える。
そのことに気付いたのか、一人のサラリーマンが恐怖に駆られて崩れた天井から地上へと出ようと瓦礫の山を登りはじめた。
「おいっ、危ないよあんた！」
それを見ていた別の男がサラリーマンを必死に止めようとするが、それでもサラリーマンは無理矢理にでもよじ登ろうとする。
「あんただって聞いただろ、あの音！　銃の発砲音だぞ！　これはテロなんだよ！！」
サラリーマンの男は完全に取り乱しているようで、無茶苦茶に腕を振り回して、止めようとしている男の手を振り払おうとする。
そんな男たちの様子を見て、あるいは男の『テロ』発言に触発されたのか、隔壁が下りた駅の出口に群がっていた人の多くが、サラリーマンと同じように瓦礫の山を登り始めた。
それは緊張の糸が切れたように一斉にみんなが登りはじめたので、あまり恐い画でもあった。我先にと安全なところへ出ようとする人の群れは止まろうとせず、サラリーマンを止めようとしていた男までも飲み込んでいく。こんな時に不謹慎だが、それはまるで大きくなったアリの群れが一斉に餌に食いつくシーンにも見えた。
「ちょ、ちょっと……」
あまりにも衝撃の連続で思考が回らなかったが、多くの人が動き出したことでなんとか意識が現実に戻ってきた。
「どうやって……地上に……」
隔壁が下りた地下鉄駅の出入口は論外だ。中から隔壁を上げる操作はできない仕組みになっていると聞いたことがある。多くの人が

瓦礫を登り、崩れた天井から出るということも危険でしかない。瓦礫がさらに崩れる危険性もあるし、何より途中で倒れて、人の下敷きになる可能性がある。

周りには数えきれない多くの人がいる。

この地下鉄駅は周囲に会社や学校が多くあり、利用者数が多いことでかなり大きな造りにはなっているが、いつまた爆発が起こり、駅全体が崩れるか分からない。すぐにでも地上に出るほうがいいだろう。もちろん安全な経路で。

「そ、そういえば、この駅は地下街とつながっているんだろ…。地下街に抜けられれば、地上に出られるんじゃないか？」

多くの人が混乱し慌てている中で、一人の青年が思い出したように言う。

青年の言う通り、この駅は隣接する巨大な地下街と地下トンネルで繋がっている。駅から地上へ出るよりも、地下トンネルを通って地下街から地上へと出るほうが数倍安全だろう。

「そうよっ！地下街へ行ければ、助かるわよ！」

同調するように言ったＯＬの人が、地下トンネルを目指して走り出す。

それを見て、瓦礫の山を登ろうとしていなかった人たちの多くが、続いて走り出す。

地下トンネルは駅の改札を抜けなくても通れる構造にはなっている。しかし先ほどの爆発の影響で倒れた自動販売機や看板などが乱雑にちらばっていて、まともに歩くこともできないほどだ。また爆発が起これば、さらにひどいことになるだろう。駅構内は断線したため蛍光灯はついておらず、視界はあまり良くない。この中を走るのはあまりに危険だろう。

それでも恐怖に駆られている人間は、その危険性に気付かない。その場で救援が来るのを待つよりも、自ら動いて安全な場所に移りたいということなのだろう。

（ど…どうしよう…）

意識は戻ってきても、正しい判断ができるほど思考は回復しない。この場にとどまるべきか、再び天井が崩れる危険をはらみながらも、安全であろう地下街へと行くために地下トンネルを目指すか。先ほどと同じ言葉が頭を埋め尽くす。

何よりも、こんな事態の正しい判断が高田にはわからないため、次に取るべき行動が頭に思い浮かんでこない。他の人が取る行動に釣られて動くことしかできなかった。

「あなたも、地下トンネルへ逃げたほうがいいわよ！」

ちょうど近くにいたおばさんに手を引っ張られる形で、高田もその場から移動する。

崩れた瓦礫の向こうにいるはずの工藤の心配をするが、瓦礫を越えることも高田にはできそうにない。

「幹―っ！」

手を引っ張られながらも、大きな声で工藤の名を呼ぶ。

その声は響く銃撃音、人々が叫びあう喧騒（けんそう）にかき消され、届いているのかは分からない。

4

一方の工藤も襲ってくる悪寒に耐えながら、なんとか状況を確認しようとしているところだった。

瓦礫で寸断された駅内で工藤がいる方は、地上への出口がすぐ近くにない場所だった。こちらも高田の場合と同じように工藤と一緒に多くの人が取り残されている。しかも、駅のホームへは抜けられず、地上への出口もすぐそばにないため、人の混乱はひどかった。

「はあはあ……。舞――？」

悪寒はさきほどよりマシになっていたが、動悸（どうき）は治まりきらず肩で息をしている状態だった。それでも立ち上がれるほどには回復し、やっと駅の状態を確認する。

「な……に……これ……」

地下鉄駅の惨劇を目の当たりにして、驚く。

工藤の目の前には、崩れた天井の瓦礫が山のように積まれている。その向こう側から、多くの人の騒ぎたてる声が聞こえてくる。近くに高田がいないことに心配したが、この瓦礫の向こう側に高田がいるのだろうと気付く。さらに背後には、駅のホームへと続く改札があったはずだが――地下のホームでの爆発の影響なのか――ぽっかりと空いた穴から下のホームへ落ちていったみたいで、跡形も無くなくなっていた。

最初に爆発が起こったよりもひどい状況の駅構内は、依然としてホームから銃の発砲音が聞こえてくる。それに続いて、微かに罵声も聞こえてくる。

（男の人の声……？）

ふらふらな頭でも、その声が男のものだと気付く。

工藤と同じように、周囲にいた多くの人が聞こえてきた罵声に気付いたようで、お互いに顔を見合わせる。
「だ、だれかホームにいるみたいだな――」
改札があった所に出来た穴の中を、何人かの若者が覗こうとしているが、
「危ないから、やめた方がいいぞ！」
と、座ったままその場から動こうとしない男が止める。
「な、なんだよ。びっくりさせんなよな」
「救助が来るまでじっと待っているべきだ」
「じっと待ってるべき？　あんただって気付いてるだろっ！　崩れた瓦礫のこっち側には出口なんてないんだよ！　ホームを通って反対の改札に行けば、地上に出られるかもしんないんだぞ！」
そう。
複数の路線への乗り換えがあり利用者数が多いこの地下鉄駅には、改札がいくつか設けられている。この場所の改札の出口には瓦礫の山のせいで行けないとしても、他の改札口からなら地上へ出られるかもしれない、というのだ。しかし、
「ホームから、銃撃音聞こえてきただろ！　それに、爆発も下のホームから起こったんだぞ！　ホームに降りるのは危険すぎる！　仮にホームを抜けられて別の改札口についても、コードレッドが出てるんだ！　隔壁が下りて出口は封鎖されてるに決まってる！」
若者の言葉にも、冷静に反論している男の言う通りだろう。
『特別警戒宣言（コードレッド）』は発令された地域の隔壁を全て自動で下す。地下鉄駅の反対の改札口の出口もこちらと変わらず隔壁が下りているだろう。それに、反対側の改札口も爆発の影響がないとは言い切れない。こちらと同じ状況では、行くだけ損ということにもなりかねない。
この場に留まることが安全とは言えないが、爆発が起こったホームに降りるというのは一番危険なことに変わりはないのだ。
二人の言い合いを周囲の人が見守っているなか、工藤は先ほどか

ら感じていた悪寒の影響で、瓦礫の山の近くの柱に背を預けてじっとしていた。工藤もこの場から動くべきなのか、じっとしているべきなのか高田同様に正確な判断などできず、じっとしていることしか出来ないのだ。

「電波も届いてない……か。これも防衛システムの一つなのか？」

何人かが携帯の電波をチェックするが、地下と言う以前に防衛システムの影響で電波が遮断されている状況だった。これでは外と連絡を取ることもできない。駅の管理室にいる地下鉄駅員たちは緊急用の電話などで外と連絡を取り合っているのかもしれないが、その連絡がこちらまで回ってこない。

あまりにも恒常的な生活を送ってきている人たちには、上手い対処ができない。機転が利かない、と言うべきか。駅員たちには緊急時のマニュアルがあるだろうが、その駅員たちが戸惑っていてはマニュアルも意味もないものだ。

現に改札の受付にいた駅員は、この場に取り残された人々を安全なところに誘導することはできなくても、落ち着かせるなどの行動を取ることが義務付けられているだろうが、駅長室と連絡を取ろうとしてばかりで現状に目を向けようとはしていない。

「どうするんだよ、結局！　ここにずっといてもいつ救助がくるか分からないんだぞ？」

さきほどから言い争いをしている若者の集団の一人が、その場にいたみんなに問いかける。しかし、誰も口を開こうとはしない。

「別の改札口に行きたいならホームに降りればいい。無事に辿り着けるかは分からないがな。私は救助が来るまでここに残る」

じっと座っている男の威圧に圧（お）されたのか、多くの人は彼に同調する。

「そうかよ――。じゃあ俺たちだけ助かってもいいんだな！」

捨て台詞を吐くようにして、若者たちは改札口に出来た穴から飛び降りようとする。

その時、

「その男の言う通り、止めたほうがいいと私は思うがね」

不意に声が聞こえてきた。

「―っ？」

声が聞こえてきたほうを向くと、黒い装束を着た大柄の男が立っていた。しかし顔は見えない。黒い装束を着ていて、顔までも隠しているからだ。

注意をして若者たちが無謀なことをするのを止めたのかとも思ったが、その右手には映画などで見るような大型のライフルが握られていた。

「流れ弾に当たって死にたくはないだろ？　ここにいれば、とりあえずは安全だろう」

言葉の内容から見ると、この男は下で銃撃戦を行っているように聞こえる奴らの仲間ということなのだろう。しかし「ここにいれば、安全だろう」と言う。

「どういう――ことだ？」

「なに、私たちは報復や見せしめの大量虐殺のために動いているんじゃないんでね。ある男を追っているだけさ。その男がここにいるため、ちょっと逃げられないように細工をさせてもらった。つまりはその男以外には興味がない、ということだ」

「男……？」

「そうだ――。ちょうどさきほどまで下のホームにいてね。この星に関わる問題なのだ。君たちには迷惑で危険な話だろうが、なるべく逃がしたくない男でね。救助隊か警察の特殊部隊が来るまでの辛抱だから、ここで待っていてくれないか？」

さらに男は待っていろ、と言う。口調は丁寧に聞こえるが、しかし内には「邪魔をするな」という強いプレッシャーも感じられる。

そのため『この星に関わる』と男が言ったことに疑問を感じたが、追求するということは憚(はばか)られた。
「私たちの邪魔をするっていうならば、どうなっても知らんぞ」
別の改札口に向かおうと駅のホームへ降りようとしていた若者たちは、そのプレッシャーを感じて足がすくんだのか、その場にへたり込んでいた。
「そう、そうしていればいいのだ」
男は踵を返して、この場から立ち去ろうとする。これで安心できるのかと思ったが、その代わりに男の手下と思われる防護スーツに身を纏った数人の男が現れた。
「外と連絡を取られたり、邪魔をされては困るのでな。見張りをつけさせてもらう。交渉用の人質とまではいかないが、私たちの任務の遂行のためだ。理解してもらおう」
男の話を聞いている間、この男の威圧感はいつか感じたことがあるものだと工藤は思っていた。悪寒を感じた時と似たような感覚が全身を包む。どこで感じたのかを思い出そうとしていると、ホームの方でさらに爆発が起こった。
「ま、また……」
立て続けに起こる爆発は工藤含めた多くの人の神経をすり減らしていく。今までの生活でこのような体験をしたことある人はまずいないだろう。二一世紀以後、日本あるいは東京という都市は戦争、紛争などとは無縁な都市だったのだ。それが急に戦時下のようなテロの現場に身を置くことになるとは誰も思いもしなかった。
「まだ捕まらないのか？」
「は、はい。何分(なにぶん)、このような建物内ですと逃げ場は限られますが、立て篭(こ)もられると長期戦になる可能性もありますので」
消えたと思った大柄の男はまだ近くにいて、部下と話をしていた。
「相手は満足な武器も持っていないだろうに。特別警戒宣言(コードレッド)が発令されてから、警察の特殊部隊が来るまでは何分くらいだ？」
「おおよそ十五分くらいと思われます」

「―案外到着は遅いのだな」
「隔壁のためです。隔壁は自動で降ろされ、解除は効かないそうなので、扉をこじ開けるのに時間がかかるのだと思われます」
「なるほどな――。では、それまでに奴を始末しろ」
「はっ！」
男は命令だけをすると、自身も下のホームへと降りていく。命令された部下は無線か何かで下にいる仲間と連絡を取り合っているのだろう。
黒装束の大柄の男がいなくなっても、その場の雰囲気はより緊迫したものになった。テロリスト集団と思われる男たちの目的は何となくでしかわからなかったが、「危害を加えない」とははっきりと言っていなかったので、安全とは言えないし安心することも出来ずにいた。
さらに男の部下が残っていて武器をちらつかせているため、誰も声を発しようとはしない。何か喋れば撃たれるかもしれない、という不安があるからだ。先ほどまで威勢よくしていた若者たちも黙り込んで床に座っている。
「……」
誰も言葉を発することはせず、ただただ聞こえてくる発砲の音に耐えながらじっとしていた。時折テロリストであろう二人の無線からノイズまみれの声が聞こえてくるが、日本語ではないため理解することはできない。どうすれば助かるのかも分からないまま、彼らが目的を達成するまで待つしかないのだろうか、と誰もが途方に暮れる。
（舞は無事なのかな――）
瓦礫の向こう側にいるであろう舞の心配をするが、そこに高田がいるかどうかを確認することは出来ない。何か不審な動きをすれば撃たれる可能性もあるし、何よりも先ほどまでよく聞こえていた向こう側の喧騒（けんそう）も少し小さくなっているように感じられた。
「……舞――」

それでも思いが届くことを願って、小さくつぶやく。

第一章　永遠人　？

痛いほどの沈黙を工藤が感じている間、地下街へ向かうため地下トンネルを目指していた高田は息を切らしながらも、必死に走っていた。

地下トンネルまではそれほど遠くはないが、いつ来るかも分からない爆発の恐怖におびえ、視界が悪くあたりには瓦礫がごろごろと落ちているのを避けていると、普段はあまり気にしなくても、これほど遠く感じるものだと気付く。

「はあはあ……」

すでにどれほど走ったのかは分からない。

感覚的には一分にも十分にも感じられるほど、時間の感覚がおかしくなっていた。

それでもさきほどまで聞こえていた爆発の音や銃の発砲音は聞こえなくなっている。ということは最低限は安全なのだろうと多くの人が走るのを止め、呼吸を整えていた。

電気が消えた駅の看板を必死に探して見ると『地下鉄駅・地下街連絡トンネル』と書かれ、そちらの方向へ矢印が書かれた看板を見つけた。この看板があるということはおそらく近くまで来ているのだろう。さきほどまで肌を刺すように感じていた緊張感や切迫感はいくらか和らいでいる。

もちろんこれで安全だとはっきり言えるわけではないが、とりあえず走る必要はなくなっただろうと誰もが足を止めているのだ。

（幹は無事なのかな――）

工藤の安否を確認する暇もなく見知らぬおばさんに手を引かれ、ここまで走ってきた高田には分からない。あの場に留まっていても工藤の声を聞けたかどうかは分からないが、自分だけ安全な場所に来てしまったという罪悪感を感じずにはいられなかった。

「ここまで来れば大丈夫でしょう」

「あっ、ありがとうございます、おばさん」
膝に手を当て、呼吸を整えていたおばさんにお礼を言う。
「いえいえ。――災難よね、急にこんなことに巻き込まれるなんて」
「え、えぇ。そうですね……」
災難、という言葉で片付けられるほどの問題ではないと思いながらも相槌を打つ。
なぜ、テロが起こっているのか。何が目的なのか。声明などは出ているのだろうか。など様々な疑問が浮かんでくるが、今は自身の安全を確保するだけで手いっぱいで、思考を働かせるなどということは出来ない。
「とりあえずは急いで地下街に行きましょうね」
軽く休憩したあと、再びおばさんに手を引かれ、歩きだした周囲の人の流れに沿っていく。
どれくらいの人が地下トンネルを目指しているのかは分からない。先ほどまでいた改札口に未だ残り、瓦礫の山を登っている人もいるのだろうか。人がさらに多くの人の群れに呑み込まれていく、という光景を初めて目の当たりにしたのだ。それはあまりにも衝撃的すぎる光景で、気分が悪くなるような画だった。
「はあ……はあ……」
「大丈夫っ？　顔が蒼白になってるわよ！？」
フラッシュバックしたのか、軽く吐き気をもよおす。
「だ、大丈夫です…」
なんとか声を絞りだすが、クラクラした頭はすぐには治らない。おばさんに肩を支えてもらい、ゆっくりとした足取りで歩く。「休憩したほうがいいんじゃない？」と心配されるが、確実に安全な場所に行くまではのんびりとしているわけにはいかない、と危機感が勝ったのだ。
すでに地下トンネルを抜けて地下街に到達した人もいるかもしれない。そう思うと自分も早く、と気持ちが焦り、たとえ休憩としてでも再び留まることには抵抗を見せる。そして再三心配してくるお

ばさんに、同じく「大丈夫です」を繰り返しながら歩く。
電気が落ち、非常口の方向を告げる看板だけが虚しく光を発している中で、そちらとは違う方向へ向かって歩くことはさらに強い恐怖感を煽ってくる。『特別警戒宣言(コードレッド)』が発令されない災害などであれば、隔壁が降りることもなく非常口はそのまま使えただろう。しかし今は使う事が出来ない。目の前にあるはずの出口は堅い壁に閉ざされている。この状況では、遠回りでも地下街に行くことが何よりも安全だと誰もが思っていた。
そんな期待感を裏切るのが、現在のコンピューターに管理を任せている世界だ。
地下トンネルを間近にして、高田が歩く前方から人の騒ぎ声が大きくしたのが聞こえてくる。
「どうしたのかしら……？」
隣にいるおばさんが不審がるが、反響して聞こえてくる声は正確に聴きとることは出来ない。
何かあったのかと疑問に思うが、周囲にいる人も含めて誰もがぽかんとしていた。
するとそこに、
「無理だ！　トンネルから地下街へ行く扉も閉まっている！」
とこちらへ走ってくる男が叫んでいる。
「―！？　そ、そんな……」
聞こえてきた内容に驚愕(きょうがく)する。
「本当だ！　あっちにも隔壁が降りてたんだ！！」
しかし事実らしく、男は緊迫した様子でそのことを後から来る人にも伝えに行く。
地下街に行けば安心だと誰もが思っていた。これで安全になると誰もが疑わず信じていた。

いや、信じようとしていたのだ。

そう信じ込む――思い込むことで、この場から解放されることを誰もが望んでいたのだ。

だからこそ、誰も地下街への扉まで隔壁で閉ざされていると考えることをしなかった。地上への出入り口だけを塞いでいるものだと思い込んだのだ。

指定された区域全ての隔壁が自動で降ろされる、と知っていながらも。

隔壁が降りていることを知らされた人々のパニックはさきほどと同じくらい大きくなる。隔壁が降りていることを知らせてくれた男についで、先を行っていた人々が戻ってきているのだ。戻らずにその場に留まっている方がまだ安全なのではないかと思うが、再びパニックに陥った人にそのような冷静な判断はなかなか起きない。これで無事に外に出られると思っていたのだから尚更だ。

（ど、どうしよう……）

三度目の同じ言葉が、再び頭の中で響く。

しかし、打開策はない。このまま閉じ込められていることしか出来なかった。

5

「エレベーターの柱の左右から追い詰めるぞ」
「そちらは二人で追いこめっ！」
複数の男の指示し合う声が飛び交う。それに続いて、牽制射撃を行っていた脇から二人の男が飛び出す。
気付いた相手が応戦してくる。しかし、
「気にせず走れっ！　相手が撃っているのは貫通弾ではない！！」
後ろから聞こえてくる仲間の声に反応するように、飛び出した男の足はさらに前へと進む。それを見た相手が舌打ちをした姿が見えるが、容赦なく発砲する。そして、そのまま突撃し回り込んで柱の影から相手を追いだそうとするが、回り込もうとしたところに防護スーツのつなぎ目を狙われて撃たれる。
「くそ！」
「相手が使っているのはなんだ？　貫通弾ではないのなら麻痺でもさせる効果のあるものか？」
「わからんが、やられたやつは誰ひとり流血してないんだ！」
どのような弾を使用しているのかも分からず、ただ撃たれた男たちは苦痛に顔を歪(ゆが)め倒れていくばかりだった。
「まだ捕まらないのか？」
その様子をホームの端から遠目に見ていた黒装束の大柄な男は、隣にいる側近の部下に再び同じことを聞く。
「申し訳ありません――。相手は駅のホームのエレベーターの影に隠れ、留まっているのですが……」
「そうか。ならば、別の改札口よりホームへと降りて挟み込め。ここで取り逃がすわけにはいかないのだぞ」

「はっ！」
命令された部下は、後近くにいた数人に回り込むように指示を出す。その様子を見ていた黒装束の大柄な男はじっと目的の人物がいる場所を見据えていた。
地下鉄駅で膠着状態になってから、すでに二〇十分近く経っている。これ以上のんびりと相手を追い詰めるわけにはいかなかった。駅員が非常用の電話線で外と連絡を取り合っていることには気付いている。そのうち軍か警察の特殊部隊でも送り込まれてくるだろう。
「引き上げる時間はあるだろうが、隠蔽工作の時間はほとんどないな」
「そればかりか、警察の特殊部隊と戦わなければならないかもしれませんよ？」
「最小限の人数しか連れてきていない。ここでこちらの顔をばらしてまで国際的に対峙するわけにはいかないさ。そんなこと上が許さないだろう」
男は側近の部下と話をしている。
その会話はホーム上にいる工藤たちには届かないが、工藤には崩れた床の穴から男の様子は見えていた。
もちろん男もそのことは気付いているだろう。それでも身を晒しておけるのは、工藤たちに対抗する意思も力も武器もないことを理解しているからだ。武器は壊れた蛍光灯やパイプなど使えそうなものもあるが、銃に敵うとは言い難いモノであることには変わりない。
「まあ、最悪の場合には使わざるを得ないだろうが」
隠している男の顔をはっきり見ることはできないが、横顔は不敵に笑っているようにも見えた。
「目的遂行のためだ。私にとっても上にとっても奴は目の上のたんこぶなのだ。準備をしておけ」
「我々にもそれなりの被害が出る恐れがありますが…？」
「それすらも目的遂行のためだ。テロ対策のために降りている隔壁がこちらに優位に働いてくれているのだ。爆発で出来た駅の天井の

穴から抜け出す恐れもあるから、取り残された一般人の見張りと言いながらあそこに人数を割いて配置したのだぞ。これで取り逃がすようだと私の立場も危ぶまれる」
「了解です！　こちらで準備を進めておきます」
「あぁ、頼む。予定の位置に追い込むことはできそうにないが、なるべくこちらに引きつけておくようにしろ」
「はっ！」
先ほどと同じように快活な声で命令を受ける。
命令を受けた男が黒装束の大柄な男から離れ、背負っていた軍事用のバッグからノズルのついた円筒の容器を複数取りだしはじめた。
「さて。あと少しでお前の最期を見ることができるのかな……」

6

殺伐（さつばつ）とした雰囲気は先ほどより増している。

それはこのテロ事件（と言えるだろう）を起こしたと思われる首謀者が現れたからであるが、そのことが取り残された工藤たちにとてつもない恐怖感を与えてくる。それまで――ここにいる多くの人もそうだろうが、工藤は本物の銃というものを生で見たことがなかった。ましてや、あの男が持っていた銃身が一メートルにもなろうかというライフルなどドラマや映画の中の代物という認識が強い。

誰もが固く口を閉ざし、救助が来るのをじっと待っている。さきほどのテロリストたちのやり取りでは十五分ほどで対テロ用の特別部隊が到着するだろうと言っていた。『特別警戒宣言（コードレッド）』が発令されてから――隔壁が降りてからすでに二〇分は経っている。もう救助隊が来てもいい頃だろうと工藤は必死に願っていた。

しかし無情にも時間は過ぎていくばかりで、どれだけ時間が経過しても助けが来るような気配はなかった。それどころか何か嫌な――鼻に付くような匂いが辺りに充満していっているような気すらした。

気付けば身体は汗と舞いあがっていた粉塵のせいでベタベタで、夏休み間近の夏本番ということを忘れていた。一度気付くと空調が効かなくなった駅の中は異様に暑く感じる。拭いても拭いても汗は止まらず、頭までもぼうっとしてくる。日光など届かない地下なのに、熱中症かと疑うくらい思考が働かなくなっていた。

「はあはあ……」

ふらふらする頭を必死に支えながら、前を見据える。

未だに複数の男が見張りという名目で近くにいる。後ろには大き

く崩れた天井の瓦礫が山のように積まれていて、向こうへ抜けることなど到底不可能で他に地上へと出られそうな出口は近くにない。唯一可能性がある他の改札口の出口も一度ホームを降りなければならず、それはあまりにも危険が伴い、テロ事件の首謀者には「邪魔をするなら撃つ」という内容のことまで言われている。

この状態では生き残ることはできないかもしれない、と活路を見出すことを投げ出したくなる。それは圧倒的な恐怖感あるいは絶望感から来るものだ。それに打ち勝つことが出来ない。このような体験をしたことないのだから、それは仕方ないだろう。誰かが助けにきてくれるまで待つことしかできないのも頷ける。相手は恐らくプロの集団だろうし、屈強な大の大人でも、ろくな武器もなしに立ち向かうことはしないだろう。そう自分に言い聞かせることで、考えることを拒否しようとしていた。

意識が朦朧(もうろう)としている工藤を心配する人はいなかった。

正確には心配できる人などいなかった。この場にいる多くの人が工藤と同じような状態になっていたのだ。虚(うつ)ろな目で周囲を見渡せば、ほとんどの人が頭を下に向けている。誰も意識がはっきりとしている人はいないようだった。

「……？」

疑問が頭まで浮かびかかるが、はっきりとはしない。

何を不思議に思っているのかも、何を考えたいのかも、どんな答えを求めているのかも分からず、ただ項垂(うなだ)れている多くの人を見やる。

その時、

近くでガリガリ、という何かを削(けず)る音が聞こえた。

削る音とまではっきりと聞き取れたのは、工藤がそこに誰よりも

近くにいたからだろう。音は瓦礫の山の向こう側から聞こえてきたのだ。
「……！？」
先ほどまでずっと向こう側の騒ぎは聞こえなくなっていたので、あっちの人は地上へ逃げられたのだろうと思っていたが助けを呼んできてくれたのだろうか、と沈んでいた工藤の気持ちも明るくなる。
それにつられて、思考回路も一気に回復したみたいだ。
救助なのかを早く確認してみんなに伝えたい、という逸(はや)る気持ちを抑えて、見張りに立っている男たちに気付かれないように瓦礫のそばまで行かなければならない。工藤が寄りかかっている柱からではこちらの声も向こうの声も鮮明には届かないだろう。正確に確認するためにも瓦礫のそばまで行く必要があった。
（どうしよう――。何か相手の注意を引くものは……）
じりじりと移動することは可能だろうが、それでも怪しまれる可能性はある。
他の人に男たちの注意を引いておいてもらうということも考えたが、それにしても近くまで行って声を掛けなければならない。心配して声を掛ける風を装い近づこうと動き出すが、見張りの男の視線が気になってなかなか動けない。
その間も瓦礫を削ったりどかしたりして穴を開けようとする動きが聞こえる。重機を使っていないのはこちらの状況を把握しているからか、それとも軽装備で来たからなのか、それは分からないが、確実に救助隊あるいは特別部隊だろう。こちらまで来てくれれば助かると、安堵の気持ちが広がる。
どうにかして向こう側にいるだろう人と連絡を取りたいと思うが、いい案がなかなか思い浮かばない。他の人がもっと近くに座っていればと思うが、そればかりはどうしようもない。電波が届いていれば携帯を使い高田と連絡を取り合う手段もあったが、圏外なので携帯は使いモノにならない。
思考回路は回復しても、逸る気持ちが工藤の余裕を失くしていく。

考えること全てが上手くいかないような気がして、行動に移すことを躊躇する。しかしテロリストたちが瓦礫の向こう側のことに気付かないとは限らない。考えている時間はあまりなかった。

第一章　永遠人　？

それでもいろいろアイデアをひねろうとしていると、
「どうかしたのかい、お嬢ちゃん？」
「……！？」
不意に声が掛けられた。
見ると、先ほど穴からホームへ降りようとしていた若者たちを止めた男の人である。
「いや、ちょっと――」
どうやら工藤を心配していたというわけではなさそうだ。
「君がきょろきょろしてるのを見てね、何かあったんじゃないかって思って」
男の人は工藤の救助が来ていることに気付いてからの行動を不審に思ったのだろう。冷静に工藤を見ていたことといい、先ほど若者たちの行動をしっかりとした正論で止めたことといい、ただ者ではないのかもしれない。五〇は超えているだろう容姿や体つき、着ている服はジーパンにワイシャツという、どこから見ても普通の社会人にしか見えないのだが。
「えと、救助隊の人がすぐそこまで来てるみたいで――」
「―！？　本当かい？」
工藤の言葉に、男の人は目を一杯に広げて驚く。
「ええ。さっきから瓦礫の向こうでガリガリっていう音が聞こえるんです」
「なるほど――。どうにかして向こうにいる人に助けを求めないと」
「はい――。それでなんとかして近づこうと思ってるんですけど、男たちにばれそうで……」
工藤の視線の先には、見張り役ということでテロリスト集団の男が三人いる。三人とも防護スーツやヘルメットで全身を覆っているため視界は悪いのではないかと思うが、赤外線スコープなどのレベ

ルをはるかに超える索敵機器を持っているだろう。
「そうだな…。私がなんとかスキを作ろう。その間にお嬢ちゃんは瓦礫の向こうにいる人とコンタクトを取ってみてくれないか？」
「は、はい」
男の人は簡単にそう言うと少し頷く。
「それじゃあ私の行動の後に移動するんだよ」
それにつられて、ばれない自信などは到底ないが、工藤も頷き返す。
この人は本気でこの場から助けを求めるために行動しようとしているんだ、と考えるとじっと待っているだけというのが憚(はばか)られた。
工藤のもとを離れた男の人はすぐに行動に出る。
「あ、あの～」
「なんだ？」
いきなり男の人がテロリストに声を掛けたので、周囲に座っていた人みんなが驚く。
「トイレに行きたいのですが……」
「トイレだと？　我慢できんのか？」
「は、はい…」
男の人の不審な行動はみんなの恐怖感を煽っているみたいだ。テロリストに自分から話しかけたことは彼らの邪魔になるかもしれない。それはつまり殺されるかもしれない、ということだ。
「ちっ。仕方ないな――。行って来ればいい」
少し不服そうにテロリストは男の人に指図する。
「そ、それが――、ここの駅はこちら側にはトイレはなくて改札口の向こうにしかないんです。どうにかして向こう側に行くことは出来ないでしょうか？」
男の人は工藤のほうを振り返りながら、テロリストに向けて言う。その時工藤と目が合う。その視線を感じて、工藤はゆっくりと移動を始める。
「ちっ。この穴を越えることは我々にも出来ない。そこらで済ませ

ればいいだろ」
「そ、そこらへん――ですか…？」
「あぁ、そうだ」
テロリストたちは男の人へ指示している。その様子を遠目に見ながら、工藤はじりじりと移動する。予定通り男の人がテロリストたちの注意を引いてくれているので、工藤の動きには気付いていない。
恐る恐る小さな声で瓦礫の向こう側に話しかける。
「もしもし……」
「―っ！？」
すると向こう側で息を飲んだというような驚く声がかすかに聞こえてくる。次いで、向こう側で話し合っている声が聞こえてきた。
「もしもし、大丈夫か！？」
「はい、大丈夫です」
「そちらの状況は？」
「私を含めて十数人取り残されています。あと見張りのテロリストが複数います」
「状況は把握した。今こちらで瓦礫の撤去を行っている。早急に君たちを救助するために爆発でどかすことを考えているが、そばから全員を離すことは可能か？」
「ええと……」
救助隊と思われる人の言葉に口籠(くちごも)る。テロリストに気付かれないように、取り残された人を瓦礫のそばから離れさせる上手い方法が思い付かないのだ。それでも、このチャンスを逃すことは出来ない。そう工藤は覚悟する。
「やってみます……」
「頼むぞ。こちらの準備はすぐにできる。五分後に爆発させる。それまでに瓦礫の半径五メートル以上は離れてくれ」
上手い方法は見つからないが、口で伝えるしかないだろうと思い、手近な人から救助隊がそこまで来ていることを教え、瓦礫のそばから離れるように伝える。さらに口々に隣の人へ伝えてもらうが、工

藤たちが取り残されている場所はそれほど広くはない。普段は利用者が多く乗り換え線も複数ある駅とはいえ、瓦礫で寸断されている上に改札口の辺りが地盤ごと下に抜けているのだ。半径五メートルも離れることは難しかった。

（五分……）

取り残された人全員が瓦礫から離れるにはあまりに少ない時間だ。それでもこれが助かる最大のチャンスだと思い、爆発の影響を受けないようにと駅の柱などに身を隠す。

「おい、お前ら何をしている？」

しかし、その行動に気付いたテロリストの一人が声を荒げる。

（気付かれた……！？）

工藤一人ではなく十数人の人が動けば、テロリストもさすがに怪しんできた。ここで不審な動きを見せたことで死ぬわけにはいかない。なんとかして五分経つまで時間を稼がなければと工藤は思うが、突きつけられた銃口が視界に入り身動きができない。

「なぜ全員揃って移動をしている？」

さらにテロリストの一人は近付いてくる。工藤を含め誰もがここで殺されるのかと半ば諦めた表情をする。それでも諦めない人がいた。

「おらぁあああっ！！」

先ほどテロリストたちの注意を引こうと話しかけに行った男の人が、信じられないくらい若い声を上げながら、背後からテロリストを折れた蛍光灯のパイプで殴打した。

「ぐ……！？」

モロに頭に受けたテロリストは目をくらませたように前に倒れる。

「はぁはぁ……。ど、どうだ――こんちくしょう！」

「あ、あんた……」

男の人の行動に最初は息巻いていた若者集団も驚く。しかし、その行動は他のテロリストたちに火をつけてしまった。

「て、てめえ！！　殺されても文句は言えねえよなあっ！！」

怒り狂ったテロリストたちが仲間を殴った男の人に向けて、銃を構える。容赦なく撃ち殺そうとしている。男の人も二人目に向かおうという気力もないみたいで、自身に向けられた銃口を見て茫然としている。

「避けろっ！！」

若者集団の一人が大声を掛けるが、それでも男の人は動けない。先ほどの工藤と同様に突きつけられた銃口に身動きが出来ないのだろう。このままでは抵抗も出来ずに撃ち殺されると思った若者集団の一人が男の人を助けようと立ち上がり、駆け出そうとするが、

「みんな、伏せるんだっ！！」

瓦礫の向こう側からスピーカーを通して、大音量の声が届く。次の瞬間には、爆発音が再び地下鉄駅に響きわたった。爆発が起こる直前に立ちあがった若者が茫然としている男の人に飛びかかって床に伏せさせる。

「な、なんだこれは！？」

起こった爆発が地下鉄駅を再度大きく揺らす。そして爆発によって高く積み上げられた瓦礫が大きく崩れていく。そして崩れた先には警察の特殊部隊が待ち構えていた。

「なっ！？」

「テロリストおよび要救助者を発見！　各自、自らの任務を行え！！」

大きな声を上げた隊長と思われる人の号令により、特殊部隊が動き出す。

突然起こった爆発に驚いたテロリストたちは、崩れた瓦礫の山の向こうから現れた警察の特殊部隊に一斉に鎮圧されていく。

「ルシオ隊長――っ！　こちらに警察の部隊が到着しました！　これ以上は耐えきれません！！」

下のホームにいるだろう隊長に対してテロリストが大声で伝える。そのテロリストもすぐに特殊部隊の人に鎮圧されていった。

「みなさん、大丈夫ですか？」

救助隊の人が取り残されていた人たちに声を掛ける。
取り残されていた人たちの目の前では、警察の特殊部隊がテロリストたちを圧倒的な人数差で瞬く間に鎮圧していっている。その光景に声を出すことも出来ず、工藤は茫然としていた。
「……す、すげえ」
同じように感嘆の声を先ほどの若者集団の一人が漏らす。ただじっとしているだけしか出来なかったのが嘘のようだ。
警察の特殊部隊は救助隊と鎮圧隊に分かれて行動している。地下鉄駅の天井に届くまで積もっていた瓦礫の山を壊して、こちら側にきた後の行動の迅速さはさすがだと工藤は思った。もちろんプロである彼らの行動はテロリストのそれは大きく違うが、工藤たち取り残されていた人を助ける早さが尋常ではなかった。
「怪我をしている者、お年寄り、女性、子供を優先して運べ！　鎮圧部隊は下のホームにいるやつらも逃すなよ！！」
部隊長と思われるテロリストたちとはまた違う防護スーツに身を包んだ人が大きく叫ぶ。その一言を聞いて、これで安心だと誰もが思った。工藤も救助隊の人に助けられながら、瓦礫の山を砕いた道を通り抜けようとしていた。しかし、そこに不気味な声が届く。

7

「さてさて……、まずい状況だが。だが、やっと追い詰めたぞ『悠人』。この三〇年間、どれほどこの時を待ち侘(わ)びたことか。その柱の影から出てくるんだ」

届いた声は下のホームから聞こえてくるものだった。先ほどまで下の会話は聞こえなかったが、突然聞こえたのはテロリストもスピーカーを使っているからだろうか。そして、その聞こえてくるその声は先ほどの大柄の男のものだった。

「さすがのお前も物量作戦には、手も足も出ないか。正直、ガッカリだが……私が生きている間に、貴様の死に様を見ることが出来るとはうれしいかぎりだ」

どうやら目的の人物を追い詰めたらしい。

声の調子にも余裕な感じが窺(うかが)える。もう逃げられることはないだろうという気持ちからくるものか、やっと目的を達成できるという感慨からくるものか。

それに反して、

「――お前には無理だな。生憎と、俺はやすやすと死ねる存在じゃない。こんな島国まで俺を追いかけて御苦労だったが、無駄足だよ」

答えた声は、意外にも幼く感情の抑揚が聞こえてこない。先に聞こえていた声は、間違いなく成人男性のものだろう。爆発音とともに聞こえていた怒号の声と同じだ。だが後の声は冷たさは似ているが、声質が大人とは言い難い。工藤たちと同い年の少年の声ではないだろうか。

「そうでもないさ。今、この建物内部にガスを充満させた。さてさて、銃弾ごときではしないのだろうが、全身が吹っ飛ぶガス爆発

ではどうだろうね」
「……お前は、自分の部下も殺すつもりか？」
「任務のための犠牲だよ。全ては、お前を殺すための計画だ。こいつらが死ぬこともね」
二人の会話だけでは様子は窺えないが、少年（のような声の主）は複数の男に囲まれているみたいだ。それでも、臆することなく敢然としているのだろう。声からは恐怖が感じ取れない。
「最低な人間だな」
「……最低は合っているな。私も自覚しているつもりだ。ただ、この世界では割り切ることが必要だ。何事においてもな。任務成功のための、尊い犠牲といったところか」
うっすらと男は笑う。声からして余裕の表情だろう。何処か、この局面を楽しんでいる節がある。
「優秀な部下が犠牲になるのはもったいないところだが、憐れむ感情は持ち合わせていないのだ。――それは、お前も同じだろう？」
「お前のような……下等な人間と同類にはしてほしくないな」
「下等…か。それは、合っているとは言い難い。この現状を見ろ。お前は、この私に追い詰められているのだ。この私の、どこが下等なのだ？」
「俺を、追い詰めるために複数の人間を使ったところだ。お前が、俺と同じ存在ならば一人でもできるはず。現に、俺は単独で動いているのだからな」
二人は、動くこともせず話し合う。
男のほうは、追い込んでいるからか射殺命令もすぐには出さない。完璧な余裕が、そこにはあった。最後の別れとばかりに会話を楽しんでいる。
「なるほど……。その点では、確かに私はお前よりは下等だろう」
救助隊に助けられた工藤たちは瓦礫の山を砕いた道から、地下街のほうへ急いで移動する。男の言葉が正しいなら、この地下鉄駅はガス爆発であとかたもなくなるだろう。先ほど臭った嫌な臭いもガ

スに違いない。こんなところで爆発にまきこまれるのは勘弁だ。各階層にある、地下街へと続く長い地下トンネルとへ向かう。パニック状態の人々も、工藤たちの後を追うようにして走り出す。こんなところで死にたくないと、もがく人は波をつくりながら地下トンネルにさしかかる。

爆発が起こる前にわたりきろう、と急ぐ工藤の背中から男の声が駅内に響く。

「しかし……私もお前も『人間（ヒト）』ではないのだ」

聞こえてきた一言とともに、地下鉄駅内に充満していたガスに火がつく。その瞬間、ほんの一瞬だけ、世界からすべての音が消える。直後周りの風景が歪み、とてつもない衝撃をともなった爆発が起こる。

今までと比べモノにならない爆発の、その衝撃は非常に大きい。直接爆発が起こった地下鉄駅は全壊。天井はすべて崩れ落ち、轟音とともに地上の建物までもが地下へと飲み込まれる。地下鉄駅が崩壊した余波を受けて、地下トンネルまで崩れ始める。慌てた人々は、押し合い圧し合い駆け出す。しかし、あまりにも人の数が多くて全く進めない。さらに、落ちてきた天井が行く手を塞いでしまう。先頭を走っていた集団が止まってしまったことで、将棋倒しが起こる。その集団めがけて、一際大きな瓦礫が落ちてきた。

集団の後ろの方を走っていた工藤は、前方から大きな悲鳴を聞いた。「何だろう」と思っていると前を走っていた人が引き返してくる。それも、数え切れないほどの人々が。人の波は逆流し、後ろの集団までも飲み込む。途中、人々の波にもまれたおばあさんが、何かを叫びながら倒れていく。同様に、二人の周囲には押し倒された人でいっぱいになった。これでは戻ることさえできない。前方には巨大な瓦礫、後方には押し倒された人々。大きくも小さくもない地下トンネルは、数十人の人間で埋め尽くされた。

撒きあがった粉塵は、爆風に煽られ夜の街を包み込む。視界の悪い街に、多くの救命ヘリが飛び交う。しかし、その音さえも壊れて

いく地下街の音に掻き消される。
地下に取り残された人々の悲鳴が、地上へと響き、いつもと変わらないはずの日常は完全に惨劇と化していた。
騒ぐ人々の中、爆風に吹き飛ばされた工藤は意識が朦朧(もうろう)としながらも、最後に男の声が聞こえた。
「さよならだ……『永遠人(とわびと)』よ」

第二章　惹きつける言葉の力

第二章　惹きつける言葉の力

1

空を覆う厚い雲が、静かに時を刻む雨を降らせている。街中にあふれるいろんな音も匂いも、ポツポツと降る雨がかき消しているみたいだ。都会特有の重い空気も騒がしい人だかりも降りしきる雨のなかでは、もっと強く感じてしまう。

行きかう人々はかさばる傘を掲げながら、足早に歩いていく。その様子をぼうっと教室の窓から眺めると、なぜかこんなにも空しくなる。遠く見える東京の高層ビルも電波塔も全部がどこか違和感にまみれていた。

「はあ……」

「なぁーにを、大きなため息をついてる、工藤？」

机を指で軽くたたかれ、驚いた工藤はびくっとして前を向く。

授業をしていた先生だけでなく、クラスメイトみんなも工藤のほうをじっと見ていた。不意に恥ずかしくなり、「す、すいません……」と静かに言う。

「夏休み前だからといって、ぼうっとしてるんじゃないぞ」

軽く注意して、先生は再び黒板の前に立つ。

けれど、工藤には授業の内容など全くと言っていいほど頭に入ってこなかった。

昨日あったことはニュースなどで全員知っているだろう。地下鉄駅のテロ事件は、すでに学校中の噂にもなっている。同時刻に学校の生徒も駅周辺にはたくさんいたみたいで、その様子を携帯のカメ

ラなどで撮影もしていたようだ。犯人は誰だとか、どこの国の陰謀なのかなど今日はその話でどこもかしこももちきりだろう。
授業と授業の合間の休憩では、生徒は昨日の駅のテロ事件の話しかしていないようで、聞こえてくる雑音は全部工藤にとっては苦いものでしかない。
「あっちこっち重たい話ばっかだね」
工藤が、高田と教室に二人でいると、向こうから男子がやってきた。
「上田くん……」
「こんな雨の日だからって、みんな釣られてわざわざ重い空気作んなくてもいいのに」
「……そう……だね」
彼は、上田知樹（ともき）。
完璧に染めてある明るい茶色の髪と男子にしては大きな丸い目が人懐っこい印象を与えてくる、クラスの男子でクラスのムードメーカ的存在の男子だ。彼も工藤や高田と同じ夏服だが、シャツはだらんとしていて、ズボンもゆるゆる。それでも不良とかというイメージは出てこないのは清潔感がある顔や髪形のせいだろうか。
上田は工藤と同じ部活に入っているのだ。部活で親しくなったことで、彼は工藤が話せられる数少ない男子でもある。
「どうかした？」
「……えっ？　ううん、なにもないよ」
工藤と高田が昨日のテロ事件の現場にいたことを知る人はいない。二人とも家族などの近しい人にしか話していないのだ。
テロ対策特殊部隊に救助された工藤と高田はそれぞれの怪我の度合いはかなり違うが、二人とも入院するほどの怪我ではなく学校に来ているのだ。しかし、二人とも制服の下は包帯が巻かれている。あれだけの経験をしたので、学校を休むということも出来ただろう。だが、学校を休むことで二人がテロ事件の現場にいたのではないかとみんなから詰め寄られることを恐れて、登校したのだ。けれど、

今日は学校に来なければよかったと工藤も高田も後悔していた。
「そう？　少し顔色悪いみたいだけど」
「大丈夫だよ。ちょっと昨日遊びまわっちゃって疲れてるだけだから」
「……そっか。なら安心した。遊ぶのもいいけど、しっかり休むのも大事だぞ」
「うん。ありがとっ」
上田はそれだけ言うと、教室を出ていこうとする。隣では高田がにやにやとした顔で工藤のことを見ているが、工藤自身は気付いていなかった。
「あっ、明後日は部活あるからな！」
教室の扉を開けて振り向きざまにそう言って、上田は教室から出ていった。
「――健気だねぇ」
「えっ？なに？」
高田の口から不意に出た言葉を、工藤は聞き取れなった。彼女の目は上田が開けっ放しにした教室の扉に向けられている。
「ううん、なんでもないよ」
はぐらかした高田は、固まった背筋を伸ばすように手を思いっきり上げて椅子から立ち上がる。
「トイレ行こうよ」

第二章　惹きつける言葉の力　？

テロ事件の結末や真相を工藤も高田も知らない。彼女たちはたまたまその現場に居合わせただけなのだから。

先に救助されていた高田はすぐに病院に行き治療を受けていたそうだが、地下鉄駅に取り残され、駅が半壊するほどの爆発に巻き込まれた工藤は総合病院まで搬送されてから治療を受けている。工藤と高田が事件後に顔を合わせたのは学校に着いてからである。

その時は短時間に色々なことがあって、何かを深く考える余裕も時間もなく、生きていたということだけを強く実感していただけだった。けれど、その後のニュースなどで多くの死傷者がいたこと、死傷者の中に日本の警察や軍が採用しているものとは違う防護スーツを着用している男の遺体が発見されたことを知った。そのニュースを知ってからか、工藤は意識が飛ぶ前に聞こえていた男たちの会話について考えてしまう。会話の内容はぼんやりとしか覚えておらず会話の真相は分からないが、いやに頭に残る単語があったのだ。会話の真相が分からないからこそ、工藤はそのことを誰にも言えずにいた。もちろん警察に言ったほうがいいのだろうが、なぜか工藤にはそうしたいという気持ちが湧きあがってこなかった。

あれだけの爆発で自分が生き残れたことは、それこそ奇跡なのだろうと思ったが、事件を引き起こしたテロリスト自体が死んでしまっていることは疑問として残っていた。

「ん―、それもそうだね――」

「でしょっ？　張本人の人たちが死んでるのってなんかおかしくない？」

「そうかも知んないけどさ――。とりあえず自分が生き残れて良かったじゃない。巻き込まれて亡くなった人には本当に申し訳ないけどさ……」

高田は工藤ほどこのことに関心がないみたいだった。あれだけの

体験をしても、「死ななかったから」で収まるのだろう。それは、非現実的な体験をしたことへの逃避かもしれない。工藤もこれ以上掘り下げるのも良くないかと思うが、胸のもやもやした感情がなくならないのだ。

その後の授業も、外の雨のように憂鬱なまま過ぎていった。やはり授業のことなど頭に入らず、考えてしまうのは男たちの会話のことだった。周りの学生は夏休みが近いということで浮かれて、授業に身が入らないという感じだが工藤の雰囲気は明らかに違っていた。高田や上田たちはそんな工藤を心配するが、「大丈夫」と工藤は言うだけだった。

「大丈夫だって言うんだからそうなんでしょ」

「けど――。高田だって、幹の様子がおかしいのはわかるだろ？」

「まあ。けど自分から言わないってことはほっといてってことじゃない？」

放課後。

高田は帰ろうとしていたら、上田に引きとめられて工藤について話をしていた。高田自身も工藤の心配はしているけど、同じように経験したあの事件からできるだけ目を背けたくてあまり乗り気じゃなかった。

「そんなに心配なら、直接聞いてみなよ。部活のあとだっていつだって、聞く時間くらいあるでしょ」

「それは…そうだけど――」

彼が躊躇する理由がいくらかわかる。

いくら心配しても大丈夫の一点張りで、何回も聞くことも工藤の迷惑になるだろうと思っているのだろう。

教室の窓から見えるグラウンドには、野球部の熱い声が行き交っていた。その遠くに見える夕日が静かに暖かい光を送ってきていて、目を細めたくなる。騒がしい声があちらこちらから聞こえてきて、これが日常なんだと気付かされる。

「……おまえら、昨日なんかあっただろ？」

「えっ？」
不意に上田が核心をついたことを言ってきて、高田は焦って聞き返す。
「―ちょっとおまえも、なんかいつもと違う気がする」
「なによ、それっ」
笑って流すが、上田があまり信用してないことはすぐわかる。
（ほんっと顔に出やすいやつ。それは私…なのか）
急に核心をついてきた上田と同じように高田も顔に不安そうな様子があった。それはみんなが昨日のことを話してばかりいるからで、質問攻めにあうことを恐れているのとその場にいたのに何が起こっていたのか詳しく知らないからだ。
高田も上田から離れてすぐに帰りたいくらいだった。彼が工藤を心配しているのは痛いほどに分かるが、今の高田にとってそれは迷惑とも取れる態度だ。彼女も工藤と同じ体験をして心身ともに疲れているのだから、一人になってゆっくりしたいと思っていた。
「―やっぱり、おれの気のせいかな」
「そうでしょ。私は何も変わってないわよ。だいたい幹が心配なんでしょ。追いかけりゃよかったじゃない」
「でも――。迷惑かもしんないし」
「…はあ、あんたねえ――」
「し、仕方ないだろっ！」
上田のその一言を聞いて、高田は大きなため息をついた。彼のあからさまな態度は微笑ましく思えなくもないが、そのせいで周りの空気をうまくくみ取れないところが多々あるのだ。工藤の迷惑になることは嫌なのは分かるが、それで自分に迷惑がふりかかるのは高田だってごめんこうむることだ。
「まあ、幹の様子はおかしいなって私も思うよ。でも今日はもう帰っちゃったし、ここでいくら心配してたって仕方ないでしょ」
「たしかに――そうだけど…」
「だからさ、また明日でも明後日にでも聞いてみたら？　部活ある

んでしょ？」
「んー、そうだな」
いくらか投げやりな高田の提案に上田も頷く。
工藤のいないところで心配ばかりしていても仕方ないと思っているのだろうか。彼に限ってそんなことはないだろうと思うが。それとは違い、何か工藤のためにしようと思っているのだろうか。
「もういい？　私も今日はちょっと疲れたから帰るよ」
「あぁ、うん」
これ以上はしんどいと思ったのか、高田は無理矢理といった感じで話を切り上げ帰ろうとする。
「あっ、そうだ！　高田も工藤の心配してるんだよな？」
その背中に上田がさらに尋ねる。
「そんなの当たり前でしょ」
「じゃあ、高田に頼みがあるんだ」

第二章　惹きつける言葉の力　？

2

授業が終わった後、工藤は家まで帰ろうとしていた。

放課後は部活をしたり高田や友達たちと買い物したりして帰ることが多いのだが、今日はとてもそんな気分になれなかった。胸のざわつきを抑えることもなかなかままならず、考えないようにしていても自然とそれを考えてしまっていた。

（……舞も忘れたいのかな――）

この杞憂（きゆう）を話せられるのは高田しかいないのだが、彼女も早く何も変わらない日常に戻りたがっているように見えた。その行動は仕方ないことだとも思う。工藤自身も、できることなら考えたくはないのだ。それでも考えてしまうのは、あの声が聞こえていたからだろうか。

その足取りは自然と重くなってしまう。掲げた傘がこんなにも重いものだと今初めて知ったみたいに、腕にかかる負担は強い。

雨は依然として静かに降り続けていた。

雨が降っているせいか、道行く人はいつもより少ない気がする。幾重にも重っている頭上の道路から自動車が行き交う音が雨の音にまぎれて、かすかに聞こえる。太陽光エネルギーで走る自動車はこんなにも音を生まないのだ。まるでそこに走っていることを極力おおっぴらげにしないかのように。その存在を知られたくないかのように。

「はあ……」

自然とついてしまうため息は考え事の閉塞感からくるもの、それは工藤の重い気持ちそのものだ。

なぜこんなにも考え込んでしまうのか、工藤も分からなかった。

テロなんて言葉はテレビのむこう側で起こっている毎日の生活に刺激が欲しい空想の産物でしかなく、話の格好のネタくらいにしか考えたことなどない。だから体験したことに助長されて考えてしまうのか。そうだとはっきり言えもしなかった。

答えは見つからないことは分かっていても、通り過ぎていく人をちらっと見てしまう。その人たちが工藤と同じ体験をしているとは限らないのに、淡い期待は消えてくれない。

「あ……」

ふと、傘の端から目を上げるともう駅の前に着いていた。

その時になって、やっと工藤は気付く。いつも高田や友達と帰るように、昨日と同じ駅に来ていたのだ。

地下へと続く階段は屋根部分がなくなり、その下の様子を露わにしていた。また近くでは地盤ごと地下へと抜けていて、直径二〇メートルほどの大きな穴が出来ている。間断なく降り続ける雨が、大きな穴へも降り注いでいた。

駅があった場所には至る所に立ち入り禁止の空間投影の電子テープが張り巡らされていて、損壊がひどい場所には大きな布が被されてあった。駅の半壊は地上部分へも被害を及ぼしていて、立体道路の一部分も壊れているらしく、作業ロボットが車の誘導を行っているのがちらっと見える。

周囲には工藤と同じように立ち尽くしている人もいれば、マスコミ関連だろうか写真を撮ったりカメラを回している人もいた。雨の中では電波が届きにくいこともあるのか、空中無人カメラがぷかぷかと不安定に空中姿勢を保ち続けながら大きな穴を撮影していた。

駅へと続く階段の近くでは作業している—駅員だろうか、瓦礫撤去会社のスタッフだろうか—大勢の人が慌ただしく動いていた。遠くのほうには救急車が待機しているのも見えた、ということはまだ生き埋めになっている人がいるのだろうか。

いろいろなことが頭の中を巡ってしまうことは工藤もなんとなく分かっていた。深く考え事をし、知らず知らずに来てしまったのだ

ろうか。それとも望んで、足がここに向かったのか。茫然(ぼうぜん)としている工藤には分からなかった。
（ひどい有様……。私もこの下にいたんだ――――）
半壊した駅には、工藤のような一般人はあまりいない。近くに住んでいる人たちが野次馬となっているくらいで、ここを利用していた人たちは隣の駅から地下鉄に乗っているのだろう。そんな当たり前のことにすら、彼女は気付かなかった。
それでも好奇心からか、工藤はかつての駅の周りを歩いて回る。地下鉄駅が一番の損壊らしく、大きな穴以外に地上での損壊はあまり目立たない。駅へと続く階段が寸断したことが地上での他の被害だろうか。それでもやはり、テロ行為が行われたと思えるのは直径二０メートルほどの大きな穴が開いているから。その穴の下、地下鉄駅や地下街には大きな被害が出ているのにだ。
一日たっても野次馬がいるんだなあ、となんとなく考えてしまった。不謹慎だとも思うが、その人たちがどこか羨ましくも思う。近所で騒ぎが起こったから見に行ってみようという考えはいつの時代でもあるのもなんだろうな、と当たり前のように考えながら、野次馬たちの横を歩いて、地下鉄駅の裏通りへと足を進める。
裏通りはよく行く喫茶店や雑貨店が集まっていて、学生たちのちょっとしたたまり場になっていた場所だ。しかし、そこもテロの影響かいつもの賑(にぎ)わいはなかった。普段は雨が降っていても放課後帰りの学生が多く集まって他愛のない話で時間をもてあましている場所なのに、今日ばかりは、どんよりとした空気が鼻につく。
そんな裏通りに人影があった。
「あなたは――」
「口外するな、という忠告は守っているみたいだな。しかし、このことに関わらない方が良い」
「このこと……？」
目の前にいる人物には心当たりがある。
というか昨日会った少年だ。巻き込まれたテロ事件のことですっ

かりこの少年と昨日の朝に会っていたことを忘れていた。
少年はまた同じ黒い装束を着ている。何の服装なのだろうかとも思うが、もちろん工藤には分からない。その黒と対照的に銀色に明るい髪がまぶしく思えるくらいだ。しかし、大きな傷跡のある眼は冷徹なまでに鋭い。
冷酷な眼は依然としてそのままだが、言葉は私を気遣ってくれているかのようだ。しかし、無表情な顔からは確実にそうだとは読み取れない。
「このことってなに？　もしかして昨日の爆破テロのこと？」
何か真相を知っていそうな口ぶりの彼を、工藤は問い詰める。だが、少年は取り合わず昨日の爆発で出来た穴の方へ向かう。
彼女も少年の後を追う。気になっていたもやもやが分かるかもしれない。そう思うと、少年のことを恐がっている場合ではなかったのだ。
「ついてくるな。君には関係ないことだと言ったはずだぞ」
「教えて、お願いっ！　昨日の事件は何だったの？　あなたなら何か知ってるんじゃないの？」
冷たくあしらわれるが、彼女はめげずに問い続ける。
「知っていたとして教える義理はない」
振り返ってきつく言う。
しつこい工藤に多少いらついているのだろう。無表情な顔にも少し変化が見えた。
「お願いっ！」
それでも彼女は引き下がらない。
この不安を吐露できる相手はいない。同じ体験をした高田も早く忘れたいと、今日一日をいつもと変わらない日常で過ごしていた。その彼女に相談できるはずもない。工藤は答えなんて用意してくれる誰かが欲しかったわけじゃなく、話を聴いてくれる誰かが欲しかったのかもしれない。
「……」

それでも無言を貫く少年。
その背中に彼女はさらに問いかける。この機会を逃したら、もう全てを知ることができないのではないだろうかと危機感を持って。
「『永遠人(とわびと)』ってなんなの？」
工藤の言葉に、前を歩く少年の足が止まる。
核心を突く単語だったのだろうか。詳しいことは当然分からないが、工藤にはその単語が妙に頭に残っていたのだ。
「……口外したら――」
「えっ！？」
「―君の命はない。そう言ったことを覚えているか？」
不意に少年は初めてあった時、最後に言った言葉を再度言ってくる。
それは忠告なのだろう。関わり合いになるな、という。思えば、爆破テロと扱われた事件に巻き込まれた時点で工藤の人生はいつもと変わらない日常からかけ離れたものになっていたのかもしれない。そうしかけていることも自分だとは気付かず、彼女はさらに一歩真相へと進む。
「首を突っ込まないほうがいい。君が知るべきことじゃない」
少年は、そうクギをさしてまた歩き始める。
「待って！　ってことは、あなたは――」
しかし、工藤の声は彼には届かない。
歩を速めた彼は、そのまま爆発で出来た穴へと飛び込んで行ったのだ。
「おいっ、きみ！」
工藤だけじゃなく、周囲にいた作業員やマスコミの人、野次馬たちみんなが驚く。しかし穴を覗きこんだときには彼の姿は見えなくなっていた。
「なんなのよ、もうっ」
一人落胆する工藤だが、少年は工藤に対して注意をしてきた。それは彼がテロ事件に関して何か知っているということ。さらには「

永遠人(とわびと)」という言葉にも反応したのだから、彼はあの事件の現場にいたのかもしれない。さらに少年と再び会ったことで、テロ事件の首謀者だったあの大柄の男も少年と同じ黒い装束を着ていたことに気付く。二人には何か関連があるのだろうと確信を持つ。

少しは真相に近づいたと確信した彼女は、ちょっとだけ心を明るくする。あの少年を追い続ければ、この胸のもやもやがなくなるかもしれない。

依然として降る雨は緩やかに体温を奪っていき、その雨音は嫌気を増していく。ぽつ、ぽつと音を上げる雨の勢いは止むこともなく、足りなくなったものを埋めるように穴へと降り注いでいた。

第二章　惹きつける言葉の力　？

3

昨日の憂鬱な雨はすっかりと止み、夏休みを前にして、夏本番というような熱気がある日だった。夏休み前なので今日も学校はある。茹だるような暑さの中、身体を動かしながら工藤は高田や友達と一緒に登校をしていた。

今日もいつも使う駅とは違う駅から学校へ向かっている。歩いている景色はいつもと違い、それだけで新鮮に思える。立体道路の一番下を――陽光もなかなか届かないところを――いつも歩いて学校に向かっているのだ。この駅は、地上に出るとすぐそばにそれなりの広さの公園があって驚いたほどだ。しかし照りつける太陽の光を思いっきり浴びることになった。夏の暑さにやられてしまいそうで早く冷房の利いた教室に行きたくなる。けれどいつもの駅ではないから、少し学校まで遠いのだ。

「今日もあっついね～。歩いただけで汗かいちゃうよ」

「湿気がないだけましじゃない？　昨日なんて身体べたべたでほんと気持ち悪かったんだから」

「まあ、そうかもしれないけどさー。こう暑いと学校行くのもめんどくさいっていうか、家から出たくなくなるよねっ」

学校へと向かっている工藤の隣では、高田ともう一人の友達がぐだぐだと会話しながら歩いていた。

「あー、はいはい」

これだけ暑いのによく盛んに会話していられるなあ、と素直に感動してしまう。今日も今日とて天気予報ではこの時期の観測史上最高気温などと謳っていた。毎度観測史上最高が出ているのであれば、一体どれだけこの星は温暖化しているのだろうか。

「幹だって、こういう日は休みたくなるよねー？」
「えっ？　ご、ごめん、聞いてなかった」
不意に話を振られて、当惑する。
「それはあんたが休みたいだけでしょ」
「まあ、そうなんだけど。ってか幹、昨日から考え事多くない？」
高田から、心配そうな感じで聞かれた。
それは間違ってないだろう。工藤自身も最近はよく考え事をしていることがある。考え事というよりも、ここ最近起こったことについてだ。なるべく表に出さないように努めていても、どうやらなかなか叶わないらしい。
「うん――、ちょっとね」
上手くはぐらかすこともできない。親友である彼女たちになら話しても構わないかとも思うが、「口外したら――」という言葉が頭に浮かんでしまう。
「ふうん―、まあ、いいけど。何かあったら相談しなさいよ！」
「うん、わかってる」
こういうことには深く突っ込んでくることはしない。友達として最高の人柄だろう。普段は活発でさばさばしている高田だが、工藤にとって誰よりも頼りになる親友であることには変わりなかった。だからこそ、打ち明けたい気持ちも募る。そうすることで現状の何が変わるわけでもないだろう。けれど、心の負担はそれだけで思った以上に軽くなるものだから。
またすぐ他愛もない話で盛り上がるのだろう。
それはそれで構わないと思う。どこまでいっても、どんな体験をしても彼女たちは高校生でしかない。工藤は頭の中で割り切って、笑顔を見せた。
「それで何の話？」
「え？　だから、こう暑かったら学校も休みたくなるよねって」
高田の「そうだよね？」という同意を求める声には賛同しかねるが、たしかにこれだけ暑いと家を出たくなくなるのは分からなくも

ない。それでも学校に行かなければならないのだけど。
「ていうか舞は、冬は冬でこんなに寒かったら家出たくなくなる、とか言い出すんでしょ？」
「あっ、それはそうかもっ！」
「はあ…、あんたってほんとのんきだよね」
あきれ顔の友達。こういうときの高田はなんだかんだ言ってテンションが高い。つまり元気なのだ。それは夏休みが近いからだろうか。夏休み前の期末テストが終わっているからだろうか。どちらにせよ高田同様、多くの学生は浮かれ気分なのは間違いなかった。そしてテロ事件のことを度外視すれば、それは工藤自身もあまり変わりはないのだ。
「いいじゃん。もう憂鬱なことなんて当分ないんだしさ！　どうせだから今日放課後、遊ぼうよっ」
「一昨日も買い物行ったんじゃないの？」
「それはそれ、今日は今日だよ」
笑いながら、そう誘ってくる。
ほんとに元気なんだなあ、と素直に思う。あれだけの体験も彼女の中ではもうなかったことなのだろうか。
「ねえ、幹もいいでしょ？」
そう思ったが、遊ぶことによって気をまぎらわしたいのかとも工藤には見て取れた。だから「うん、いいよ」と頷く。それに、また彼女たちに心配がられないようにと工藤なりの考えだ。

第二章　惹きつける言葉の力　？

学校のグラウンドの遠くを見れば、陽炎（かげろう）が見えそうなくらい熱気は高まっている。本当に地球の温暖化はひどい状況なのだろうか。世界中で大森林が広がっているので、その分二酸化炭素は減り、地球温暖化の歯止めは止まりつつあるのではないかと工藤は思ってしまう。

夏休み前の授業は退屈なものでしかない。

依然として一学期のやり残しや夏休みの宿題の範囲まで授業を進めておこう、という判断なのだろうなという内容でしかなかった。眠気と戦いながらホログラフで映された授業内容をパソコンに打つことが毎日の日課で、理解することは当分追い付かない。テスト前の一週間は毎晩机に向かっていたほどだ。中学から高校に進学しただけで、ここまで内容が難しくなるものなのだろうか。社会――特に歴史――があまり得意ではない工藤は世界史で苦戦していた。

「つまり、このネルファからマルクス・アウレリウスまでのローマ帝国の皇帝を五賢帝（ごけんてい）と言い、この五賢帝の時代がローマ帝国始まって以来の平和な時代だったと言われている。それをパックス・ロマーナと言う。ここまでいいな？」

壇上では教師が何やら昔のお話をしているが、工藤の耳には届いても脳までには届いてこない。頭で反芻（はんすう）する前に、パソコンに打ち込んでいるだけだ。授業はこの繰り返しなので、テスト前には四苦八苦するわけだが、どうしようもないことだった。

隣の席の高田は登校の時のテンションはどこにいったのか、うとうとと居眠りをしていた。また上手いように教師にばれないように眠るもので、見習いたいものではないが、そのスキルは見事だと思ってしまう。これでも成績は良い方なので、要領の良い勉強をしているのだろうなあ、と工藤は少し感心する。

「よーし、じゃあ次行くぞ―」

教師の快活な声が響いて、今日も変わらない毎日だなあ、としみじみと感じた。
その後の授業も相変わらずな内容で、そのどれもが魅力的とは言い難い。勉強が本分だというのは分かるが、もっと興味をそそるようなやり方はできないのだろうか。興味がないからこそ、高田のように眠ってしまう学生もいるのだから。そんな内容改善をここで思っても仕方ないので口にはしないが、そういう生徒の休憩時間の活発さは目に余るものもあった。そんな休憩時間中に聞こえてくる会話は明るいものばかり。一日経てば、話のネタも変わるものなのだろうか。昨日は学校中で聞こえたいたような事件の話も、今日はそれほど聞こえてこない。学生たちは、それぞれ違う会話を楽しんでいる。
それでいい、と工藤は思う。
昨日がおかしいだけだったのだから。この日本でテロ行為なんて、何年どころか何十年も起こっていないはずだ。それだけ起こったときの衝撃は大きかったと思うが、連日ニュースで取り上げられても、地下鉄駅で爆発が起こったということと、死傷者がどれほどいたかということを一貫して言うだけ。あとは国際ジャーナリストがどこの国のグループの仕業だとか、また違うグループの関与があるかも、だとかそれぞれ憶測の話を繰り返すだけだ。
それほど危機感を持っていない——実際に体験していない——学生はすぐに無頓着になる。どんな事件や事故が起こっても、その影響は一過性のものでしかないのだろう。自分が経験するまでは。
「で、どこに遊びに行く？」
下駄箱で靴に履き替えた高田が、そう尋ねてきた。
「はあ？　舞が遊びに行こって誘ってきたんじゃない。どこか行きたいとこあったんじゃないの？」
またしてもあきれ顔の友人が言うが、高田は「ううん、ないよー」と相変わらずのんきな返事だった。
「はあ……」

「まあまあ、いいじゃん。で、どこ行く？　ショッピング？　カラオケ？」
少しいらいらしてきただろう友達を抑えて、工藤が二人に聞く。
放課後、工藤は高田そして一緒に登校した友達とで遊びに行こうとしていた。今日も部活はなく授業が終わったらそのまま帰るだけだったので、今日は元気に遊ぼうと思ったのだ。
「んー、とりあえず喫茶店いこうよ」
結局高田の提案で三人は、ショッピングモール内にある喫茶店へ行くことにした。

第二章　惹きつける言葉の力　？

駅のすぐ近くにあるショッピングモールには、いつも多くの人がいる。工藤たちの学校の生徒も放課後に多く寄る人もいて、あちこちで同じ制服が見えた。

このショッピングモールは先日高田が誕生日プレゼントを買うということで工藤と高田が放課後に立ち寄ったのと同じところだ。

「どっかいいとこないかな～っと」

「もう、適当にそのへんでいいんじゃない？」

「え～。高かったらやじゃん」

一昨日高い買い物をしたからだろうか。なるべく出費は抑えたいのかもしれない。それでも遊びに行こう、と誘うのだから、どれほどテンションが高くなっていることか。夏休みになってからでも遊ぶことはたくさん出来ると思うのだけれども

（もしかしたら、気遣ってくれてるのかな）

と、工藤は思う。

あのように見えて、友達の悩みや不安には敏感な高田だ。単純に遊びたいだけかもしれないが、工藤はうれしく思った。

三人はとりあえずということで、ショッピングモール内にあるフードコート近くの喫茶店に入る。

全国にあるチェーン店の喫茶店だが、それほど店内は大きくない。カウンター席がいくつかと四人掛けテーブル席が六つほどあり、入口から奥にキッチンがあるだけだ。洋風をイメージしているのか、内装は西洋製のものが多かった。高田は「コーヒーは東南アジアやブラジルが有名なんだから、そっち系で統一したらいいのに」などと言っているが、

「紅茶も扱ってるんだから、いいんじゃない？」

「それでもコーヒーの方がメニューも多いし、安いし、絶対コーヒーメインじゃん。なんか気に食わないよね」

無茶苦茶な意見だと思うが、「そ、そうだね」と曖昧なあいづちを打つ。その工藤の隣で、友達がまたため息をついていた。
その後、各々メニューを頼んで、テストの出来はどうだったかや夏休みの遊ぶ予定など、それまでの憂鬱を吹き飛ばすように話しこんだ。
それぞれみんな部活に入っていたりバイトをしているため、なかなか集まって遊ぶことは難しいかもしれないが、高校生になって初めての夏休みなのだ。それまでの夏休みよりもなぜか興奮は大きくなっていた。今まであまり遠出というものをしたことないからだ。
「お盆あたりでどうかな？」
「私はいいよ。おばあちゃん家行くの今年はずれそうだし」
「幹はー？」
「ん―…。なんとかなると思う。まだ予定はちょっとはっきりと決まってないけど」
「あぁ、部活の合宿だっけ？」
「―うん。でも三泊だし、お盆は強制とかじゃないから、大丈夫っ」
「そっか。じゃあとりあえずお盆あたりで決定！　またホテルに予約の電話してみるよ。それで正確な日にち決まったら連絡するね」
「うん」
工藤たちは夏休みを利用して、旅行の計画を立てていた。
高校生にもなったことだし、これまでは東京都心しか行ったことがないので、思い切って関東から出てみようと前々から話しあっていたのだ。
「大阪か――。楽しみ！」
「そうだね。でもいきなり大阪って遠くないかな？」
「いいじゃんいいじゃん。親だって許可出してくれたんだし、そうやって遊んだり息抜きするためにバイトしてるんだしさ。ずっと東京に暮らしてるんだから、一度くらい東京ってか関東から出てみたいって思うでしょ？」
「まあ、そう思うけど。それなら関東のどっかでも良かったんじゃ

…」
「えぇー、大阪なんてめったに行けないから、行こうって決めたじゃん！」
東京を含む関東と大阪の間には、日本で一番広い大森林『中部・東海大森林』が広がっている。関東と関西を分断する大きな森林帯だ。そのため陸路で行くことは不可能になっていて、交通手段は自ずと飛行機だけになる。かつての日本には新幹線というものが走っていて、飛行機よりもリーズナブルな価格で行くことが出来たらしいが、そのようなものはもはやどこにも走っていない。森林の脅威から守られている都市部でのみ、電車は走っているだけだ。
「わかったわよ、もう。大きな声出さないで」
友達がまたもあきれ顔で答える。
「しおりちゃんは大阪行くのやっぱ嫌なの？」
「ん～そうでもないけど、関東のほうが安心感あるっていうか」
「それもそうかもね。この前だって飛行機に鳥がぶつかったっていうのもニュースでやってたし」
飛行機に鳥がぶつかるという事件は、二〇世紀までのそれと比べものにならないほどの危険性がある。鳥がぶつかるといってもその多くは『ＰＣＤＶ』に感染し、体長二メートルほどに巨大化した鳥とのものである。
「大丈夫だって！　飛行機が飛ぶエアラインの中は安全なんでしょ？　ニュースになってるのはほんとに稀なことじゃん」
「そう……だよね……」
高田の言葉にも友達はあまり顔を明るくしない。やはり嫌なのだろうかと工藤は疑問に思うが、大阪に旅行に行くというのはもう二カ月前から話し合っていたことだ。いまさら変更というのも、特に高田は嫌なのだろう。
「やっぱ大阪に行ったらさ、本場のたこ焼き食べなきゃね！」
少し悪くなった場の雰囲気を変えようと思ってなのか、それとも単純な本音なのか。高田が急に話題を変えた。

「たこ焼きって、学校近くの商店街にもあるじゃない？　大阪が本店の」
「そんなんじゃダメだって！　大阪に行って本場のを食べるからいいんじゃない」
観光客精神丸出しのような高田の言い分だった。
「そんなもんかなあ」
工藤にはその感覚は分からないが、彼女には大事なことなのだろう。
大阪に行ったら何処に行くや何を食べるだなどのことを、やたらと熱い高田が引っ張って、それからも深く話し込んだ。
気がつけば二時間ほどは話し込んでいた。
「もうそろそろ出る？」
「そうね。出来れば買い物もしたいし」
「やっぱり買い物はするのね」
「当り前でしょーっ！　今日のメインはあくまでも買い物よ。旅行の話は二の次二の次」
大きな声でそうまくしたてた高田は、我先にと先を歩き始めた。
「ほんっと元気だよね。朝は暑くて学校休みたい、とか言ってたのに」
「そうだね――」
喫茶店を後にした工藤たちは、それからショッピングモール内のお店を見て回る。メインは買い物と言っていた高田は何か欲しいものでもあるのかと思いきや、ほとんどのお店で商品を見ているだけだった。
「結局買わないの？」
「んー、衝動買いしたかったんだけど、これといって良いものがないのよねー」
「衝動買いって…。一昨日だって誕生日だからってプレゼント自分でも買ってたんでしょ？」
「そうだけどさー。なんかこう、うっ憤をはらしたいってかさ」

「うっ憤？　何か嫌なことでもあったの？」
「えっ？　ううん、なんとなくね」
不意に出た言葉は高田の本心なのだろうか、と工藤は思う。しかし直後の彼女は平然と答えているあたり、そうでもないのかもしれない。
今日遊びに誘ったことも、調子の悪い工藤を心配していることともあるかもしれないが、彼女自身が気晴らししたい気もあったのだろう。
結局何も買わなかった工藤たちだが、お店を見て回っただけでもそれなりに気晴らしにはなった。
（こうして遊ぶのってなんか久しぶりかも）
「何か言ったー？」
「ううん、なんでもないよ」
笑顔で答えられるのも、みんな高田としおりのおかげだ。学校ではあれほど表情が暗かった工藤だが、今は素直に笑えるくらいに元気が戻っていた。
「元気な幹が一番だよっ」
「―うん、ありがと！」
高田やしおりが気を使ってくれていることはすごく分かる。工藤自身も自分が少し考え過ぎていることも分かっている。それでも二人は深くまでは突っ込んでこないし、工藤から話してくれるのを待っているのだろう。近づきすぎず遠くなりすぎずに、工藤を心配しているのだ。だからこうして遊びに誘って気分転換をさせても、工藤の悩みのことまでは聞いてこない。工藤にとって、本当に頼りになる友達なのだ。
「晩ご飯でも食べて帰る？」
「どうしよっか。まだ終電までは時間あるしね」
もう少し遊んでいても帰ることは問題なかったため、三人はどこかでご飯でも食べてまた一喋りでもしようかと話し合う。
ショッピングモールのあるフロアの窓から外を眺めても、まだ陽

が落ちていないのか、そこまで暗い感じではなかった。

第二章　惹きつける言葉の力　？

4

都心部でなくても四〇階層を越える大きなビルが立ち並ぶ街は、地上にいる人にすれば圧迫感が大きい。ビルだけでなく立体道路なども幾重に重なっている場所もあり、地上から空が見えにくいという場所もざらにある。

「目標はさらに東に進路を向けて飛んでいる。開けた場所に墜落させたいが、どこか適した場所はあるか？」

その高層ビルの少し上を大きな影が飛んでいっている。

その影を追いながら、黒い装束をはおった人影が追いかける。そうしながら無線を使い遠くにいるオペレーターに情報を求める。

「このまま飛べば高層ビル群を越えて、住宅街に出る。その前にあるショッピングモールの駐車場が一番近い広地だ」

「駐車場――。車にぶつかるかもしれないぞ！？」

「かまわん、賠償はこちらが持つ。人が多い商店街などに行かれるよりはマシだ」

「かまわんって――」

ショッピングモールにも人はかなりいると思うが、躊躇していては住宅街まで行かれてしまうので、すぐに行動に出る。

「仕方ない、か」

ビルの屋上から屋上へと間二〇メートルはある距離を信じられない跳躍力で飛んで移動するが、先を飛ぶ黒い影にはなかなか追いつかない。

「ちっ――。相手の方が速すぎる！　防衛ロボか何かいないのか？」

「今、近くの自衛隊基地からヘリが向かっている。到着までおよそ二分だ」

（二分……。遅すぎる）
それだけの時間があれば、すぐにショッピングモールも越えてしまうだろう。それまでにはなんとかして追い付かなければならない。
「それじゃ間に合わない。こちらで対処するから射撃銃の発砲許可をくれ」
「すでに発砲許可はおりてるぜ。そこから撃って届くのかい？」
「なんとかするさ。もたもたしていれば、あっという間に市街地に抜けられてしまう」
飛んで新たなビルの屋上に着地すると、すぐ屋上の端まで移動し背中に背負った銃を準備する。遠距離射撃用に転用されたアサルトライフルだ。銃口をビルの屋上からはみ出すようにし、アサルトライフルを構える。光学照準器を覗き照準を標的へと合わせるが、すでに距離がかなり離れている。かつての軍用モデルであるため、最新のモノよりは射撃距離が劣る。銃弾の装填がオートマチック方式であるのが救いだろうか。それでも、
「頼むから一発であたってくれよ……」
祈るようにしながら、引き鉄を引く。
乾いた音が空に響くが、すぐに都会の音にまぎれていく。撃たれた弾は一直線に影へと迫り、性格にその一部を捉える。
「当たったか？」
発砲音を聞いて、すぐに無線からオペレーターの声が聞こえてくる。
「あぁ。これで飛ぶことはできないだろう。すぐに駐車場に落ちるように誘導する」
「任せたぞ。その場に警察を回しておく」
「了解」

第二章　惹きつける言葉の力　？

工藤たちがレストランでご飯を食べ、ショッピングモールを出るころには八時になろうとしていた。ショッピングモールではまだ買い物を楽しんだり遊んだりしている人も多くいたが、明日も学校がある工藤たちは遅くなる前に帰ろうとしていた。

いつも利用している駅とは違う駅へと向かうために、駅へとつながる立体通路のある正面出口ではなく屋外駐車場を通らなければならない出口から出る。駐車場の中に設けられた歩道を歩いて、別の地下鉄駅へと向かうのだ。

「こっちから帰るの初めてじゃない？」

鞄を大きく振りながら、足取り軽やかに歩く高田がそう言う。

「そういえばそうかもね。いつもあの駅から帰ってたし」

友達が言葉を返しているのを隣を歩きながら聞いている工藤は、車を停めていたのだろう買い物客が空を見て何か話していることに気付く。

「ねえ。あの人たち何話してるんだろ？」

「え？」

工藤が言ったことに気付いて二人もいぶかしむ。

「空見てるね」

「ビルの窓を清掃してるとか、そんなのじゃないの？」

そんなことで空を見ながら話すことはないだろうと思いつつも、工藤は高層ビルが見えるほうの空を見上げる。少し離れたところに建つ高層ビル群を見上げるが、特に変わった様子などはない。

「何か見える？」

「う～ん、特には……」

陽が落ちたため強い光を放っているビルが建ち並んでいるくらいで、他には何も見えない。そう思っていたが、空の暗さよりもさらに黒い影がこちらに向かって飛んできている。

「あ、あれは……」
「え、何？」
何かを発見した工藤に二人が尋ねるが、それを駐車場で同じように空を見ていた人が声を上げて示す。
「あ、あれはなんだ！？」
叫んだときには、すでに肉眼ではっきりと見えるくらい黒い影は大きくなっていた。
突然現れた黒い影に近くを歩いていた買い物客たちが驚く。それはショッピングモールから出たばかりの工藤たちも同じだった。
こちらに近づいてくる黒い影はどんどんそのシルエットを大きくしていく。何かしらの故障した機械かとも思ったが、地上へと一直線に向かってくる影は、煙を噴き上げているわけでもない。
となると考えられるのは、
「あれは、カラスだよ！！」
隣にいる高田も気付いたようで、大きな声を上げる。
高田の言う通りだった。通常のカラスよりもはるかに大きいカラスだ。考えるまでもなく、ウイルス『ＰＣＤＶ』に感染したカラスだ。
「まずいよ！　こっちに来てる！！」
工藤が見つけたときには遠くに見えたカラスも、その速度をおとすことなく工藤たちのほうへ落下してきている。
「モールの中に逃げよう！！」
工藤の後に続いて、高田と友達もショッピングモールへと引き返す。周囲にいた他の人々もちりぢりにその場を離れていく。
カラスは勢いを衰えることなく、そのまま地面へと突っ込んできた。
大きな衝突に合わせて少し地盤が揺れる。ショッピングモールの中になんとか間に合った工藤たちは無事だったが、別の場所へ逃げようとしていた人は地面が揺れたことで倒れていた。
地面に降り立ったカラスを改めて見ると、その大きさはあまりに

も異常だった。さきほど喫茶店でも話していたが、『ＰＣＤＶ』に感染した動物はその身体をあり得ないくらいに肥大させている。しかしその姿をテレビで見ることはあっても、生で見ることは初めてだった。

「あ、あれがカラス……！？」

通常のカラスは人の身体よりも大きいということはない。しかし、工藤たちが見ているカラスは二メートルに迫ろうかというくらい高い位置に頭があった。両翼を広げるとさらに大きく見えるだろう。カラスの足は人の顔二つ分くらいある。あの足に掴まれたら、骨が折れてしまうかもしれない。

「す、すごくでかいね……」

「う、うん」

高田も友達もそれぞれ驚きの言葉を口にする。工藤と同じく二人ともウイルスに感染した動物を直接見るのは初めてなのだ。

ショッピングモールの中にいるから少しは安心であるが、それでも恐怖は少なからず感じた。

カラスはどこか怪我でもしたのか、再び飛ぼうと翼を羽ばたかせようとしているが、その動きは緩慢だった。

「ど、どうしていきなり街中に出てきたんだろ……」

「たしかに――。どこかで発症したのかな？」

工藤は当然の疑問を口にする。

大森林に近い地域では都市を囲んでいる鉄塀を越えて、侵入することが稀にあるらしい。しかし、ここは東京都心に近い街だ。大森林から鉄塀を越えてきたとして、ここに来るまでに警察か自衛隊が対処しているだろう。

もう一つの理由として高田が言うように、空気中に蔓延しているウイルスに街中で感染し発症するというものだ。都市で『ＰＣＤＶ』に動物が感染したという二ユースはこちらのほうが圧倒的に多い。しかし、空から降下してきたこのカラスはとてもそうだとは思えなかった。

「で、でも空から落ちてきたんだよ？　街で発症したなら飛ぶ前に気付くでしょ」
　そうだ。街中で『ＰＣＤＶ』に感染し動物が発見されたら、その場で暴れることを防ぐために対感染動物対処用のロボットが出動しているはずだ。そうして、その場から動物が動けないように対処するということを感染した動物のことがニュースになるたびに聞いている。
「そういえば、駆除するための？ロボットもいないよね……。やっぱ塀を越えてきたんじゃないのかな」
「それで、ここまで飛んできたって？　それは無理でしょ。一番森が近いところでも、ここから何十キロもあるのよ」
　友達が言うことを否定する高田だが、工藤もそれは違うだろうと思っていた。そうだとしたら東京の街を守る機能があまりにも弱いことになるだろう。東京はこのような国の状態になっても依然として首都には変わりないのだ。たとえ感染した動物一匹に対してでも、首都の防衛が疎かになるということはないだろう。
「それよりさ、倒れた人たち助けないと……」
　カラスが地面に衝突した時に、逃げ遅れた人が地面に倒れているままだった。まだ立ち上がることも出来ず、すぐ近くにいるカラスを見上げるようにして固まっている。
「助けるってもどうやって――」
「わかんないけど、このままじゃ怪我するかもしれないじゃん！」
　深く考えることもせず、工藤はショピングモールの出口から出て駐車場へと走り出す。注意をこちらに引きつけるだけでも倒れた人たちが逃げる時間くらいは稼げるかもしれない、と安易に考えていたが、近づいてきている工藤に気付いたカラスは、翼を大きく広げて威嚇してきた。
「……！？」
　あまりの恐さに怖気づくが、駐車場に残っていた買い物客が立ち上がって車に乗ろうとしているところを視界の端に見ると、ここで

引き返すことはできなかった。
「あぶないよ、幹！！」
背中に高田と友達の声が聞こえてくるが、工藤はさらに一歩と歩を進める。
工藤が近づこうとするとカラスは大きく飛び跳ねてさらに威嚇してくる。これ以上近づくな、という警告だろう。それでも助けるためとさらに近付く。
一段と大きく声を上げたカラスが、近づいてくる工藤に飛びかかろうとしてきた。
「！？」
カラスが襲ってくる瞬間、工藤は目をつむってしまう。
「幹っ！！」
遠くで高田が名前を叫んでいるのが聞こえくる。
「……？」
しかし、いくら時間が経っても身体が痛みを感じることもカラスが迫る気配も感じない。恐る恐る目を開けると、どこから現れたのか目の前に一人の少年が立っていた。
少年の手には大きなライフルが握られていて、そのライフルでカラスの身体を押さえつけていた。
「全く……。無茶をするな」
「あ、あなたは……」
工藤の前に立った少年は黒い装束を着た銀色の髪がよく映えている——工藤と何度か会っている、あの少年だった。
「どいていろ。こいつはセルウイルスに感染したカラスだ。君にも移る可能性がある」
突如現れた少年に驚くが、その威圧感に圧されてその場から離れる。さきほど倒れていた買い物客もいきなり出てきた少年には驚いたようだが、急いで車に乗って逃げようとしていた。
「間に合ったのかい？」
少年の服から声が聞こえてきてびっくりするが、機械のようなも

のが帯から見えている。
（無線……？）
「あぁ。一般人が数人いたが、怪我人はいない。警察はまだか？」
「もうそろそろそちらに到着だ」
「わかった。鎮痛剤は対象に打ちこんでおく。後処理は警察に任せるぞ」
「オーケー、それで大丈夫だ。任務ごくろうさん」
「お互いにな――」
少年は無線でのやり取りを終えると、ライフルで押さえつけていたカラスに腰の帯に挟んでいた拳銃を片手に持つとおもむろに撃つ。
工藤が何かを言う前に、カラスに対して発砲した少年はさらに飛べないようにカラスの翼を背中に背負った鞄から取りだした紐で結んでいく。
「ちょ……。あ、あなたは何を……」
「言っただろ。このカラスは感染している。このまま放っておくと人にセルウイルスが移るかもしれないし、人を襲うかもしれない。だから捕まえる」
工藤には目も向けずにカラスの翼を縛った少年は、警察が到着しているのを見ると警官と何か話をしはじめた。
その様子をただ見ていた工藤の元に高田と友達が駆け寄ってくる。
「大丈夫だった、幹？」
「う、うん……」
心配してくる高田に小さく返す工藤だが、その視線は後から現れた少年に向けられている。
「誰なの、あの男？」
「さ、さぁ？」
「幹も知らないんだ。でも助けてくれたんだよね？」
「うん。よくわからないけど、そうだと思う……」
意図的に助けてくれたのかは分からないが、少年が来てくれなかったら工藤はどうなっていたか分からない。そう考えると助けてく

れた、ということになるのだろうか。
「あの――」
工藤がそんなことを考えていると、果敢にも警官と話し合っていた少年に高田が声をかける。
「なんだ？」
「この子、私たちの友達なんです。危ないところを助けてくれてありがとうございます」
「……君たちの友達『だけ』を助けたつもりじゃないけどな。帰るのは気をつけろ、ここのところ都心部でもよく出る」
「はぁ、はい……」
高圧的に話してくる少年に、軽く会釈をして工藤たちはその場を後にする。というよりは警官に駐車場を立ち入り禁止にするからすぐに帰りなさい、と言われたのだが。
ショッピングモールにはすぐに大勢の警官が到着し、騒がしい雰囲気になり始めていた。その様子を遠目に見ながら、再び駅へと向かいだす。
「なに、あの態度！　ちょっとむかついたんだけど！」
「まぁまぁ。何してる子かは分かんないけど、幹助けてくれたから良かったじゃん」
「それはそうかもしれないけどさ――」
「ってか、舞よく話しかけられたね。あんなピリピリした空気の男の子に」
「え、そう？」
度胸があるのか天然なのかよく分からない行動だが、あの少年に堂々と話しかけた高田のことを工藤は素直にすごいと思えた。工藤自身はあの威圧感に何度も怖気づいていたのだから、それはなおさらだろう。
（そういえば、あの男の子何してる人なんだろう）
高田にも聞かれたが、工藤もあの少年が何をしている人なのかは分からない。昨日駅で会った時も不思議に思うことはあったが、は

ぐらかされたままだ。
今駐車場に戻れば少年はまだいるだろう。そうしたらまた聞くことはできる。そう考えると工藤の身体が自然に動いていた。
「どこ行くの、幹！？」
突然ショッピングモールに戻るほうへ走りだした工藤に高田が声をかける。
「ちょっと忘れ物っ！　先帰っててていいよ！」
「ちょ、忘れ物って――。幹っ！」
さらに声をかけるが工藤は止まろうともせず、そのまま来た道を引き返していった。

第三章　二〇〇〇年という時間

第三章　二〇〇〇年という時間

1

急いでショッピングモールの駐車場に戻った工藤は、帰ろうとしているのか、その場を警官に任せて駅のほうへ歩き出そうとしている少年を見つけた。
「ま、待って！」
工藤の声に少年は振り返る。
「君か……。何の用だ？」
少年は帰ろうとしているのか、工藤の呼びとめに少しうんざりしたような顔を見せる。少年の手にはさきほどまで持っていたアサルトライフルがない。市街地を抜けて帰るために、警察にでも預けたのだろうかと思いながら、少年におずおずと言う。
「あの……さっき助けてくれたことはありがとう」
「わざわざ、それを言うために戻ってきたのか？」
「え、えと……教えてほしいことがあるの」
躊躇しているような工藤の態度に、少年は強く返してくる。
「なんだ？」
「その……『永遠人』のことなんだけど――」
その単語を口にした瞬間、少年の眼つきがさらに鋭くなる。
昨日地下鉄駅で会ったときも同じように鋭い眼をしていたことを思い出した。
「どうして、そこまで首を突っ込みたがる？　これは君には関係ないことで、君の問題でもない。杞憂を感じることは個人の勝手だが、

生活に支障を及ぼすほどのものでもないだろう？　今まで通り、平穏を噛みしめていればいいだろう？」
少年の問いに言葉を詰まらせる。
それは工藤自身、不思議に思っていたことだ。なぜ、ここまで彼のことが気にかかるのか、『永遠人』というフレーズが頭に残っているのか、そのどちらも明確な答えなんて、今はまだ（・・）ない。
「そ、それは――」
「ちゃんとした理由がないのなら、俺も教える義理はない」
冷たい眼が、工藤をまっすぐと射抜く。嘘偽りのない答えを求めるように。
強烈な視線は彼女の行動力を奪ってしまう。圧倒的な存在感、それは初めて少年を見たあの朝の通学路でも感じたものだった。
「あるのか？　一歩踏み込めば、真相を知ることになる。けれど、それはとても強い危険性を伴っている。その覚悟を明確にする理由はあるのか？」
視線をそらすことができない。
太い柱に縛られたようにその場から動くことも、もがくこともできなかった。それでも、おずおずと口を開く。
「り、理由なんて、わからないの。ただ……知りたいって気持ちだけじゃだめ……なの？」
必死に絞りだした言葉は、率直な疑問だった。
軸となる理由なんてないかもしれない。ただ何が起こっているのか、その真相を。自分の知らない世界のことを知りたいだけ。それが理由になるのかどうかは、工藤には分からない。それでも、これが今の彼女の気持ちだった。
「…はぁ――。知りたいだけ、か。そのリスクも知らないで、よく言えるな」
工藤の返事を聞き、少年は嘆息する。
「ご、ごめん」
「謝れ、とは言ってない。それに嘘偽りがないのなら、教えるだけ

教えよう。ただし、後戻りはできないぞ。その覚悟はあるのか？」
「……うん」
少年の最後の勧告にも、工藤は力強くとは言えないかもしれないが頷く。
「ついてこい」
踵を返した少年の後を追う。
工藤の率直な気持ちが、少年の気分を変えたのだろうか。その深い部分までは分からないが、彼は工藤に教えようと言った。あれほど「関わり合いになるな」と言っていたことが嘘のようだ。

第三章　二〇〇〇年という時間　？

「それでＨＭってなんなの？」
「ん？　あぁ、そうだったな。ＨＭは大量生産されなかったロボットのかわりに人工知そのまま歩きだした少年は、ひとまず地下鉄に乗り、新宿駅へ向かうとだけ工藤に伝えた。
「えっ、東京出るの？」
「ここでは話すことができない」
　急にそう言いだした少年に対して工藤は困惑する。
　数分歩いて、工藤が今日学校へ向かうために利用した地下鉄駅に着く。すでに八時を回っているため、帰宅ラッシュが起こっていて、駅にはそれなりに多くの人がいた。
「君は世界に『ＨＭ』という存在がいることを知っているか？」
「ＨＭ？」
「そう。立体映像（ホログラフ）から成る人間のことだ。立体画像と言った方がいいかもしれないが」
「立体映像の人間？」
　工藤はそんな者の存在は聞いたことがない。立体映像自体は理解できるが、それから成る人間ということはどういう意味なのだろうか。
「そうだ。日本に限らず世界には人工知能あるいは人工知能を持った存在が散在している。それは変わりようのない事実だ。ロボット工学は二一世紀の段階でその後の進化が顕著に見られていた。いずれ人にとって代わる労働力になることは確実視されていたことは知っているな？」
「う、うん。学校の授業で、習ったくらいだけど」
「ロボットの進化はそれほど速かった。当時の日本はモノづくりの技術においては世界でもトップレベルだった。いずれ中国にその技術力も抜かれることになるが、それでも最先端技術が開発されてい

たことに変わりはない。そこで日本の企業とフランスの企業の合同研究から生まれたのが、『ＨＭ』だ」

日本のロボット生産力・ロボット開発力は世界の先進国、それこそアメリカにも負けないものであった。そういう日本であったからこそ人工知能という面でも、その技術力は活かされた。当初のロボット――もっと言えば、機械――はコマンド入力されたことを確実にこなすことを使命としており、一体のロボットの多機能化は先送りにされていた。生産工場などで見られる、生産品の完成までの過程をそれぞれ別の機能を持ったロボットあるいは機械に任せることで人件費を抑えようとしていることが、一番の例だろうか。

そこからロボットは娯楽面でも発達していき、人受けが良いロボットが開発されていくようになる。そのロボットに試験的に人工知能が組み込まれていったのだ。販売当初は話題を集め、ヒットを繰り返した娯楽用ロボットだが、高額なロボットは一般人にはなかなか手が出せないものでもあった。

「ロボットは今の時代でも高価なものに変わりはない。なぜだかわかるか？」

「う、ううん。全然分からない・・・」

「ロボットの生産コスト自体が依然としてそれなりにかかることも理由にはあるが、一番の要因は人工知能を搭載されたロボットが安価で出回るとその分危険性があるからだ。人工知能の知能度は人間のそれと変わらないものになってきている。無人バスや無人タクシーなんかの類じゃないぞ。あれは二一世紀のロボットと変わらない、一つのことに特化しているものだ。もっと、もっと遥かに優れている」

世界の人口は確実に減ってきている。それは事実であり、世界的に労働力不足の問題は起こっている。日本に限らず、世界中で大森林の発生とそれに伴う生活区域の縮小化は見られ、全世界的に大都市化が進んでいる。人口が三〇〇〇万人を超える東京のような都市がいくつも出来ているのが現状だ。それで人の生活は何とか保たれ

ている状態だ。
「労働の問題があることは何となく分かるけど、それがロボットの高い理由とどうつながるの？」
「単純に労働力の低下が叫ばれているのなら、ロボットを増やせば効率は良くなる。これは君も分かるだろう？」
「うん」
労働力あるいは労働人口が減ってきているのならば、その分をロボット、機械で補えばいい。以前からロボットたちは様々な場所で働いていたのだ。足りない分をロボットの絶対数を増やし、ロボットたちに作業を任せればいい。人と違い、ロボットは疲れを感じないのはもちろん、機械的なミスがない限り人よりも精巧な作業をこなすことができる。能率もはるかによくなるだろう。
「さっき言った無人バスやタクシーは別として、人工知能を持ったロボットが様々な工場で働くとして、彼らロボットが異議をなさないか、その根拠はない。人工知能搭載だと、人は必要ないからもっと生産コストが下がるが、彼らが反旗を翻すことも考えられる、ということだ」
「その可能性があるっていうの？　ロボットが人の命令を聞かないってことだよね、それって」
「たしかに、あくまでも可能性だ。そのまま人に従うかもしれないし、人の支配から逃れようとするかもしれない。どうなるかは、実際に起こってからしか分からないものだが、二一世紀の前半には、その可能性を危惧（きぐ）してロボットを題材にした映画が作られていたほどだ。つまり人類はロボットあるいは人工知能開発当初から、自分達の立場が危うくなることを理解していた。そのためロボットは重要で貴重な力でありながら、大量生産をしてこなかった」
少年は「そのツケが、今の世界の大都市化に繋がるのだが」と言って、さらに話を進めていく。正直、工藤には今まで考えたこともなかったようなことばかりで、すぐに理解が追い付く話でもなかった。このロボットの話が、爆破テロや『永遠人』のこととどう関係

があるのか、と疑問に思う。少年は「ここでは話せない」と言っていたが、それはなぜなのだろう。
地下鉄は一寸の狂いもなく、時間通りに運行している。これも彼の言う機械だから成せるものなのだろう。信じられない話だが、昔の電車は駅の停車位置を大きく越して止まることが多々あったらしい。電車の運行の全てを機械任せの現代では、そんなことは起こり得ない。
能を搭載された立体映像の人間だ」
「……ロボットの代わりに――？」
「そう。日本の企業が開発してきた人工知能はロボット生産が衰退とまではいかなくても停滞すると、他に使う道がなかった。そこでフランスの立体映像を研究していた企業が話を持ちかけて、開発されたらしい」
それまでとは違い、歯切れの悪い少年の言葉に工藤は気付く。
「『らしい』っていうのは？」
「俺も、これ以上詳しいことを知らない。そもそも情報開示もされていない未開発のはずの代物なのに、それが現に日本にはいるんだ」
「そう…なんだ――」
工藤がＨＭのことを知らなくても無理はない。
『ＨＭ』は世界に向けた発表もまだされていない実用段階にはほど遠いと言われている研究、ということになる。少年がフランスの企業が絡んでいると調べ上げただけでもすごいことなのだろう。
「そのＨＭが日本にいると、何かまずいの？」
「人工知能を持っているＨＭも、あるグループに所属し、そのグループのために活動しているんだ」
「グループ？」
「―あぁ。もともとフランスの企業というのが、ある大企業の子会社でその企業は軍需産業企業ということになっている」
「軍……需……？」
「君には耳慣れない単語かもしれないな。国の軍隊を相手に商売し

ている企業のことだ」
　軍需産業企業は軍に対して、兵器から軍で使用される日常用品、食料など様々なものを売っている会社だ。それぞれの国が軍隊を保持している限り軍需産業は最低限でも安定し、軍需産業企業はなくてはならない。逆にいえば、国が軍を必要とする環境、状態を作ることがその企業が生き残っていくには必要になる。
「日本は現在戦争をしているわけではない。どころか世界情勢も同じような状態だ。それぞれの国で内紛や地域間の争いは二〇〇〇年代に入ってからもあったにせよ、かつてのような世界大戦は起こっていない」
「戦争が起こっていないことは良いことじゃないの？」
「君たちにとってはその方がいいだろうな。しかし軍需産業に関わる者たちにとっては違う。彼らは国が軍を持つ状態、環境を維持させることが必要になってくる」
「国を相手に商売ができないからってこと？」
「そうだ。国によっては軍需産業は国家企業が行っているところもあるが、国の企業にせよ民間にせよ商売相手がいないということは、企業を維持できないということだ。彼らにしたらそれは困る、ということなのだろう。だから彼らは世界を戦争が起きそうな状態にするために暗躍している」
　軍需産業企業にとっては、国が軍隊を保持していることが必要不可欠になる。そのためには世界が緊張状態にあることが大事なのだ。ここでは戦争が『起こる（・・・）』のではなく『起きそう（・・・・）』な状態ということがさらに大事になる。戦争が起き、終結するとそれまでの投資が無駄になることがあるためだ。
「軍需産業企業にとっては、二〇世紀代の冷戦のような――軍拡競争が激しい――世界情勢が一番の望ましい、と言えるだろう」
「その軍需産業のこととかはなんとなくわかったけど、ＨＭってのとどう関係が？」
　少年の話すことに工藤は理解が追い付かない。それでも必死に頭

を動かしながら、なんとか話に付いていこうとしていた。話をしている最中でも、彼女には一つの疑問が浮かんでくる。その疑問を口にはせず、工藤は少年の言葉に耳を傾ける。

「ＨＭはその軍需産業を行っている企業のために活動している。つまり、ＨＭは世界の情勢を国が軍隊を必要とするように秘密裏に動いている、ということだ」

「そのＨＭが日本にいることが、あなたが『ここでは話せない』って言ったこととつながるの？」

「そうだ。そのことについては、東京を出てから話す。君が知りたがっていることについてもだ」

第三章　二〇〇〇年という時間　？

2

気付いたら新宿駅に着いていた。
東京でも賑わいの大きい有数の地区である新宿は、この時間でも多くの人が行き交っていた。すでに帰宅ラッシュも終わっているだろうに、これだけの人がいるのはやはり東京という都市が大都市化している証拠なのだろうか。
「東京出て、どこに行くの？」
地下鉄から降りて新宿駅の構内を歩く。すれ違う人々の多くは、夏本番の暑さの前に早く帰ろうとしているのだろうか。それとも夏休み前の浮かれ気分から、この時間まで遊びつくしていたのだろうか。
「君は東京から出たことは？」
「ううん、ないよ。ずっと東京に暮らしてたし」
少年がなぜそんなことを聞くのかは分からないが大事なことなのだろうと思い、工藤は答える。
「そうか。それじゃもしかしたら見るのは初めてになるのかもしれないな。」
「見るの？」
「着けばわかるさ。これから行くのは旧神奈川県の相模湖の近くだ」
「相模湖？　って、あそこはたしか――」
「ちゃんと知ってはいるんだな」
日本に限らず世界には大森林が広がっている。その範囲は年々広がっており、人類が住める地域は恐ろしい勢いで狭まっているのが世界の現状だ。関東で東京に人口が集中しているのも、大森林の影響が強い。東京の近隣の県の多くも森の脅威に侵されていると聞い

たことがある。神奈川県も多くを森林に呑まれ、人が住める場所はおろか、入ることもできないほどだと言われている。
　ちなみに日本は現在も都道府県制を敷いているが、大森林に呑まれた都道府県はその機能を完全停止させている。よって現在の日本は東京を中心にした関東大都市、大阪を中心とした関西大都市、福岡の博多を中心とした九州大都市の三つの大都市を主にして、政令指令都市と言われる都市を中心にある規模発展した都市が散在しているくらいだ。もはや都道府県制は意味を成さないものになっていると言ってもいいほどで、それぞれの都市も県別に条例を決める議会を設けてはいるが、実権はそれぞれの中心都市が握っていると言える。二一世紀に一時期話題になった道州制のようなものと言えるだろう。
「そこで暮らしているのさ。俺はＨＭに狙われているからな」
「えっ、暮らしてる？　って狙われてる！？」
「あぁ」
　自然に言った少年の一言に驚く。
　人が住める場所はないとまで言われているかつての神奈川県に住んでいるということにも驚いたが、さきほど説明を聞いたＨＭに狙われているということのほうが衝撃が強かった。
「神奈川にも少しは人が住める場所があるってことさ。ＨＭについてはそこに着いてからもっと詳しく話す」
　彼は何気なく言うが、そんな話テレビでも学校の授業でも聞いたことがない。
「それは構わないけど、その神奈川までどうやって行くの？　電車は通ってないでしょ」
「だから近くまでは電車で行く。それからは――、まあ着いてからだな」
　あちこちはぐらかしてばかりの少年だが、着いたら全てを話すと言ってくれているので工藤はそれを信じる。彼は嘘をつくような人間にも、裏切るような人間にも見えないからだ。

少年のあとに続いて、東京から出る電車のホームまで向かう。
「さて――、これが最後の確認だ」
改札を通ってホームに行く前に、工藤の方へ振り返った少年が言う。
「本当に知りたんだな？」
工藤の顔をじっと見据える、その眼が鋭くなる。それに負けないように工藤も強い意志を持って応える。
「うん。まだはっきりとした理由がないのはあなたにとって本当に迷惑なんだと思うけど、本当のことを知りたいって気持ちだけは変わらないから」
「そうか――、わかった。あの断片的な話だけで、やっぱりいいって言ってきた人もいるんだがな」
彼女のしっかりとした返事を聞いて、少年はまた前を向く。
その間際に何かをつぶやいたように感じたが、工藤にはその全てを聞きとることができなかった。

第三章　二〇〇〇年という時間　？

少年のあとに続いて、工藤も改札を抜ける。
駅のホームにはかなり多くの人がいる。さすがに駅を通りかう人のほうが多かったが、平日のこの時間でもサラリーマンやＯＬよりも学生の数が多く感じるのはここが都会だからだろうか。
吹きさらしのホームには生温かいをはるからに越える温風が身体をなびく。今日は湿気が少ないので先日のように身体がべたべたすることはないが、風が吹いていてもひどく暑く感じてしまう。それでも隣にいる少年は意に介することなく平然としているのが、不謹慎にもすごいと思ってしまった。
そういえば彼は相変わらず黒い装束を着ているので、周囲から奇異の視線を向けられているのだが、少年は気付いていないと言わんばかりに気にしていない。しかし、隣にいる工藤は少なからず気恥ずかしさを覚えていた。この服にも何かしらの意味があるのだろうか。
「この電車だ」
などと考えていると、少年の言った電車が来ていることに気付いて慌てて乗り込む。
都心部から地方――現代では地方もかなり都会化されているのだが――へと進む下りの電車なので人の込み具合はひどかった。そのため座ることなどはできやしない。
「……立ってるしかないな――」
電車内の混み具合を見ながら、少年は「三〇ほどで着くだろうから」と言って我慢してくれと言う。
「ううん、私は立ってて大丈夫だよ」
少し笑顔を見せながら言う。その表情に少年は驚いたように目を丸くする。
混み合った電車の中で工藤と少年は言葉を交わすこともなく、電

車に揺られながらじっと立っている。扉際に立っている少年は電車の扉窓から見える風景を静かに眺めているようだ。

会話が止まったので、工藤はさきほど少年から聞いた内容をやっとじっくり考えることが出来た。

ロボット云々（うんぬん）の話にせよ軍需産業の話にせよ、それらはあまりにも工藤の知識の範囲外の話だ。普段生活していてそのような知識は必要なく、日常生活で知らなくて困ることもない問題だ。それを知っている少年は世界のとても多くのことを知っているような気がした。知りすぎている、とまで言えるだろう。容姿的には同い年くらいに見える少年だが、あまりに知識の量に違いがある。それは頭の良さや記憶力などの勉強の出来が違う、というだけに過ぎないのかもしれないが、それでも疑問だった。

相変わらず外の景色を見ているような少年の横顔は年齢相応に見える容姿とは違い、どこか説明できない力強さがあるようだ。

第三章　二〇〇〇年という時間　？

数十分電車に揺られて降りたのは高尾という駅だった。
少年が言うにはここが終点らしい。かつてはここから神奈川県以西にも線路があったらしいが、大森林の猛威により電車が通れない状況らしい。しかし、ここから相模湖まではまだかなり距離があると言っていた。
「どうやって行くの？　歩いて？」
「まさか――。これから暗くなるし、歩いていくのは危険すぎる。」
駅を出て、彼は高尾駅の北にある小さな丘に向かう。
「丘に何かあるの？」
少年の後を追いながら、工藤は軽く質問する。
「ちょっと用があるんだ」
この時点で初めて少年に会った時に感じた威圧感はいくらか薄らいでいる。それに工藤も気軽に話しかけることが出来ていた。その事実に工藤は気付かず、何気ない気持ちで尋ねているのだろう。
「森林沿いには大きな塀があるし、そこは警備隊が管理していて、そうそう外に出られるもんじゃないからな」
「えっ！？　塀の外に出るの？」
「あぁ。言ってなかったか？」
「う、うん。東京を出るってのは言ってたけど……」
「そうか――、悪かったな。かつての神奈川県の相模川沿いに塀があるんだよ。それを越えなきゃならない」
大都市の周りをぐるっと囲んでいる鉄塀を越えると聞いて、工藤は少し心配になる。鉄塀の外はＰＣＤＶの影響で異常に発達した大森林と凶暴性の増した動物の住処なのだ。塀を越えて、そこに行くというのは自殺行為でしかない。少年がそこに住んでいるというのが、嘘というわけではないのだろうが、それでも工藤は少なからず躊躇してしまう。

「だ、大丈夫なの…？」
「あぁ、心配する必要はないよ。俺と一緒にいる限りは――な」
自信があるように少年は応える。
その目に恐怖の色などはない。夕方、東京に侵入したカラスと対峙した時もそうだったが、彼には不思議な力でもあるのだろうか。
その後も少年の後を追うように歩いて、丘のてっぺんまで着いた。
そこには、都心部の建物よりも高層ではないがかなり大きな建物があった。しかし見るからに廃れ果てている。
かつて大森林の都市部への進攻のメカニズムを研究するために森林研究所なるものがここにはあったそうで、丘には様々な種類の木々が植えられていた。その施設はすでに別の場所に移転しており、現在は建物とかつて研究されていた木々だけが残されているのだ。
「ここに用があったの？」
平然と建物の門を開けて、敷地内へと入っていく少年の背中に尋ねる。
「あぁ。塀の門を開けてもらうことはできないからな。だから空から越えるんだ」
取り壊されず残っている建物の玄関前でそう言う少年の声に反応するように、一羽の鳥が建物の屋上から姿を現した。
「―！？」
それは大きな鳩（はと）だった。
屋上から少年の前まで降り立つとその大きさがさらにわかった。
本当に大きい。全長四メートルはゆうに超えているだろう。ショッピングモールの駐車場で見た『ＰＣＤＶ』に感染したカラスよりもはるかに大きく見える。翼を伸ばした大きさは小型ヘリにも匹敵するほどではないだろうか。それほどのスケールのある鳩だった。
「あれに乗って、塀を越える」
「えっ！？」
突然現れた鳩の大きさにも驚いたが、続いて言った少年の言葉にさらに驚く。

見れば鳩の身体には手綱や鞍、鐙までも装着されている。つまり人が乗るように調教されているのだ。しかし、あれだけの巨体を支えて飛べるのだろうかという疑問もある。

「生物学的なことや動物の身体の構造的なことは学者でもないからわからないが、飛べるんだから利用しない手はないだろう。心配するほどでもないさ。東京でも見ただろ？　感染して巨大化したカラスが平然と空を飛んでたの」

それはそうだが、だからといって安心できるというわけでもない。

人が乗った分の体重も支えることが出来るのかは分からないし、感染した動物はその種類、肉食草食に関わらず凶暴性が増すのだから、反抗するかもしれないのだ。

「それも大丈夫だ。こいつは伝書鳩の種族で、感染する前に趣味で飼っていた人に訓練されていたみたいで、人に対する慣れはある程度ある。それに俺が長い年月をかけて再度調教したからな。人を振り降ろすなんてことはしないさ」

「ほんとなの……？」

さすがに工藤もこればかりは信じきれない。つい先ほどカラスが街中で暴れていたこともあるが、鳥の背中に人が乗って空を飛ぶなんてことは見たことがないし、もちろん聞いたこともない。いくらなんでも無茶だと思えた。

それでも平然と鳩の背中に乗りだした少年の姿を見て、しぶしぶといった感じで後に続く。これで鳩から落とされて死ぬようなことがあったら、少年のことを呪い殺してやると心で思いながら観念したように足を掛ける。全てを知りたいと思い、少年についてきたのだ。ここまで来て断念したくない、という気持ちもあった。

「しっかり捕まっておけ。慣れていないと飛ぶ瞬間は恐いらしいからな」

前から聞こえてくる少年の声に従い、ためらう様子を見せながらも彼の腰に手を回す。

その直後、工藤の身体全体をふわっと宙に浮く感覚が包む。しか

し、それも一瞬だった。機械で飛ぶのとは違い、生き物なのだ。不規則な動きで空を飛び一気に上昇するため、身体が大きく左右上下に揺れる。
「ちょっ！？　お、落ちそう！」
すぐ横で羽ばたく翼が空気を切る音が聞こえてくる。上昇を続ける鳩から振り降ろされそうになるのを、少年の身体に先ほどよりも強く必死にしがみついて耐える。強風を身体に感じながら、じっとしがみついていると不意に風が緩くなる。
「目を開けて、下見てみろ。良い眺めだぞ」
前を向いているはずの少年に、目をぎゅっと瞑（つむ）っていることがばれていたみたいだ。
「そ、そんな――無理っ！」
生身の身体を吹きさらしで飛んでいるのだ。恐くて目など開けていられなかった。
工藤の必死な返事を聞いて、少年がすこし笑ったような声を上げた気がした。工藤自身はそれどころではなかったのではっきりとは聞こえなかったが、この時少年は楽しそうにしていたのだろうか。
「もったいないぞ。この景色を見ないなんて――」
「も、もう。そんな言わなくてもいいじゃん！」
少年にそう言われては、気になって仕方がない。
恐る恐ると目を開ける。すると、工藤の視界に飛び込んできたのは、
「綺麗……」
超高層ビルがはるか遠くに見える東京都心が夜の空に強く光り輝いている光景だった。いや、輝いているのは都心だけじゃない。振り返れば、大都市東京の全てが光り輝いている。あまりに眩しくて目を細めたくなる光だが、嫌な色の光じゃなかった。
「これが、人間が暮らしている――生きているっていう光だ」
少年の言葉を聞いて、目を細めたくなるような輝きに綺麗だとか、儚いだとか、何とも言えない感情が湧いてくる。

「ほんとに綺麗……」
人が生きていることの証が、この街が強烈な光を発しながら輝いていることなのは目で見てはっきりと分かった。それまで夜になると淡い青の電灯が光るのもビルや家の電気がつくことも、そういう風に捉えたことなどなかった。
しかし改めて前を向くと、それがすごく分かる。
そこに広がるのは対照的にどこまでも闇に覆われた光の届かない世界だ。

第三章　二〇〇〇年という時間　？

3

大森林の絵や写真は何度も見たことがある。巨木という単語が本当に相応しいなあ、と何の気もなしに思っていた。世界文化遺産の縄文杉などは樹齢数千年、樹高三〇メートルで巨木と言われていたらしい。しかし写真で見たものは樹高一〇〇メートルに達するものもあったのだから、巨木というレベルがかなり違うものになっている。

そのような木々が乱立しているのだから、大森林には外からの光など届かない。昼夜の差がない森林の中に悠人は暮らしていると言う。その家は神奈川県にある相模湖の湖畔近くに建てられていた。建てられている、というのは間違いかもしれない。二股に分かれた巨木の幹の下に、コンクリートのような材質で簡単に設(しつら)えているように見えた。

「簡単にってひどいな――。これでも結構頑丈なんだぞ」

とは少年の弁だが、平屋の建物は簡単に崩れそうに見えて仕方がない。これで凶暴な動物などが襲ってきても大丈夫なのだろうか。不安は高まるばかりだ。

建物の中は平屋だが四つの部屋が設けられていて、それぞれの部屋もそれなりの広さを持っている。核家族が十分に暮らせるほどの床面積だろう。工藤はリビングと思われる部屋に通されていた。部屋は一〇畳近くあるだろうが、テーブルやずいぶん大きな本棚が数個並べられていて解放感はあまりない。それは部屋の光のせいもあるだろうか。こんな森林の中まで電気は通っていないので、部屋にはやたらと古典的なロウソクを立てて使うランプがいくつもあり、それらが部屋を明るくしていた。

「ほんとに、ここにひとりで暮らしているんだね――」
部屋を見渡しても生活感が溢れている。置かれている多くの家具は材質が木なので、外に立っている巨木を使っているのだろうか、となんとなく疑問に思う。
「トバトもいるけどな」
ぽつりと呟いたことに、少年はそう言って返してくる。その手には二つのコップが握られている。
ちなみにトバトとは、さきほど少年と工藤が乗った鳩のことだ。ずいぶん変な名前だと思ったが、いつの間にかその呼び方以外には反応しなくなったのだそうだ。
「市販のだが、とりあえずどうぞ」
そう言ってお茶を渡す。「ありがとう」と深くは考えず受け取った工藤だが、コップを手にして気付く。
「あ、冷たい――。ここ電気は通ってないんじゃないの？」
「ん？　あぁ。生活するのに冷蔵庫なんかは必需品だろ。最低限の家電製品だけは自家発電で賄(まかな)っているんだよ」
そう言う少年だが、家に入る際も発電機や電線などは見当たらなかった。どこにそんなものを設置しているのだろうか。
「冷蔵庫あるんだ？」
「なかったら、どうやって食材を保存するんだよ」
軽口にも嫌な顔などせず返してくる少年は工藤と面と向かうようにテーブルに座る。さきほども感じたが、やはり最初に会ったことのような冷たさや威圧感がなくなっている。電車に乗るまでは少しは感じていた彼への恐さももうほとんどなくなっている。どうしてなのだろうか、と疑問に思うが、対面に座った少年は切り出してくる。
「さてと――、電車の中でもいろいろ話したが、まずは何から知りたい？」
それまでの柔らかい雰囲気も一変する。椅子に座った彼の顔は真剣そのものだ。その眼も再びするどくなっている。

何から聞こうかと工藤も迷う。知りたいこと、聞きたいことは電車で聞いた内容も含めるとたくさんあった。その全てに答えてくれるのかは分からないが、ゆっくりと口を開く。

第三章　二〇〇〇年という時間　？

「あなたの名前は？」
とりあえず未だ知らない少年の名前から聞く。
「そういえば、まだ名乗ってなかったな。俺は『悠人』、悠かに人って書く」
（やっぱり――）
少年の名前を聞いて、改めて確信になる。先日の地下鉄爆破事件の時に、テロリストたちが追っていた人物の名前だ。あの黒装束を着ていた大柄の男がその名前を何度か口にしたのを覚えていた。目の前の少年がそうだというはっきりとした確信はこれまでなかったが、着ている黒い装束から関係はあるのだろうと薄々感じていた。
「私の名前は――」
「幹だろう？」
悠人の名前を聞いて工藤は自分も今さらだと思いながらも名乗ろうとするが、彼が先に名前を当てた。
「え！？　な、なんで？」
「ショッピングモールで君の友達がそう呼んでいたからな」
自ら注いだお茶を飲みながら、悠人は軽く答える。
「そ、そっか――。私は工藤幹っていうの」
「苗字は工藤って言うのか。それは知らなかったな」
不意に名前を当てられて勢いを削がれた工藤は、なんとか取り繕って次の質問をする。
「あなたは――何者なの？」
「ずいぶんと抽象的な質問だな。何者なの……か」
工藤の質問に、悠人は少し躊躇するような感じを見せる。
「昨日、君は俺に対して『永遠人』ってなに、と尋ねたことを憶えているか？」
「憶えているよ。あなたは何も教えてくれなかったけど」

意地悪く言葉を返すが、悠人はそれについては「悪かった」と言うだけだった。
しかし、それも本気の気持ちがないと教えられないということなのだろう。ここに来るまでも何度か気持ちを確認させられたことからも、彼が知っていること――あるいは彼が行っていることはとても危険なことなのだろうとは安易に想像がついた。
「君は『永遠人』とはなんだと思う？」
「え？　全然分からないよ――」
あのテロリストは目の前の悠人に対して、『永遠人』と言っていたことは憶えているので、悠人がその『永遠人』ということなのだろうとは分かる。だが、その単語が何を意味するのかは分からない。
「そう。分からないだろう？　『永遠人』もＨＭと同じように世界には公表されていないものなんだ」
「公表されていない……？」
悠人の言葉に驚く。
ということは、彼は公表されていない存在――人間ということなのだろうか。
「二〇〇六年一〇月一六日、世界を震撼させる事件が起こった。なんだかわかるよな？」
「……うん」
その日に何が起こったのかを知らない人はいないだろう。
今の世界がこのような形になった全ての元凶がその日である。ロシアのパラナ地区にあった新薬開発の研究所が爆発事故により崩壊し、新しいワクチン生成のために研究されていたウイルスが空気中に大量散布された、という事件だ。
「そう。世界がこんな有り様になってしまった原因の事件だが、そこの研究所で行われていた実験の本質は違う」
「どういうこと？」
「そこの研究所で研究されていたのが『永遠人』なんだよ」

第三章　二〇〇〇年という時間　？

世間に公表された事件のことは情報操作がされていた、ということらしい。今まではそれが事実だと疑いもしなかったが、真実は違うと悠人は言う。

「研究所で開発されていたのは、たしかに新しいワクチンではあったと思う。しかし、それは人体に投与することで『永久（とわ）の命』を完成させるという目的で開発されていたものだ」

「永久の命？」

初めて聞くことだった。

「そう。君は人間の細胞分裂の回数が決まっていることを知っているか？」

「ううん、知らない――」

「全ての細胞がそうというわけではないが、細胞は分裂する回数が決まっていて、それ以上は分裂できないようになっている。そうすると細胞分裂の限界が来るわけだが、それがある程度人間の寿命に関係しているという考えもあったらしく、それを覆そうとした科学者がいたんだよ」

細胞分裂を行うにはＤＮＡを二つに分けることが必要だ。このＤＮＡに関しては複製を行うことで減ることはないが、染色体の末端にあるテロメアは細胞分裂を繰り返し行うことで、一部複製されることがなく、そのまま減り続けていく。そしてテロメアがなくなったときに細胞は分裂できなくなる、という理屈なのだ。

「はあ……」

あまりに科学的であり非現実的な話で、また頭がなかなかついてこない。

細胞分裂回数の限度だとか人間の寿命と関係しているだとかは、あまり工藤の興味が湧く話ではなかったが、『永遠人』がどのような存在なのかは分かった。

「そのワクチンを注入された人が『永遠人』なんだね？」
「そうだ。俺の身体にはそのワクチンが接種されている」
「あれ？　でも研究所は崩壊したんじゃ？　それにウイルスは人間の細胞を壊すものじゃなかったの？」
「実験途中に研究所が爆発に合い、機能を停止させたのは変わらない事実だし、たしかにウイルスは人体を破壊するものだ。しかし研究所がまだ機能していた時に、実験に参加していた俺は運よく適合したんだよ」
「適合――」
その言葉を聞いて、愕然とする。
政府が、いやなぜ世界がこの実験のことを公開しなかったのか。当時を生きた人たちには分からないかもしれないが、今の世界の状況は悲惨すぎる。住める場所は日に日に、目に見える形で狭まってきている。その状況を新薬開発が失敗した結果に起こったと何度も聞いて育ってきたのだ。未来を思っての薬の開発をしていたのだと仕方ないと思って、今の状況を理解してきたつもりだ。
しかし、真実は大きく違った。『永久の命』と聞いてもパッとイメージできるものではないし、それが未来の私たちのための研究、実験だとは思えない。理想、完璧を求める科学者たちの満足を満たすためではなかったのだろうか。そして研究所は崩壊し、その機能を停止させたとはいえ、目の前に科学者が求めた『完璧』が座っている。目の前の悠人を造るために世界はこのような状態になってしまった、ということなのか。ここで考えてもその真意は分からないが、このような有り様になった世界で生きている工藤は少なからず怒りを覚えた。
「適合した人物が何人いたのかは分からないが、適合後『永遠人』となった人間はそれぞれの国に処遇を任されることになり、俺は日本政府に殺されることなくウイルスの研究や新しいワクチンの精製を担当することになってここで暮らしている」
ぼんやりとした怒りが湧きあがってきていた工藤だが、悠人の言

葉であることに気付く。
「ってことは、あなたはその研究所が崩壊したときから生きているってわけ？」
研究所が爆発で壊れたのは二〇〇六年だ。そして今は間違いようもなく二二〇八年。およそ二〇〇年もの差がある。
「言っただろ、実験の目的は『永久の命』を造ることだって。『永遠人』として適合した俺は、限りなく死とは無縁の人間になったんだよ」
「……」
言葉が出なかった。
言葉の意味がなかなか理解できなかったということもあるが、悠人に対して感じていた疑問が一つ解けたような気がしたからだ。
「あなたは死なないってこと？」
「正確には違うらしいが、とりあえず死ににくい人間ってところかな」
「死ににくい？」
彼の言い回しには疑問を持つが、それを行動で示してくれた。
「さっきも言ったが、全ての細胞がそうというわけではないが、人間の細胞分裂には限度がある。その限度をとっぱらったのがこの研究の本質だ。つまり細胞分裂を無限に、そして必要な時に迅速に行えるということだ」
そう言いながら、悠人は自分の左手の指に台所から持ってきたであろう包丁の刃の先をいきなり刺しはじめた。
「ちょ、ちょっとなにを！？」
突然の行動に工藤は驚くが、悠人は少しだけ苦痛の表情を見せたが、それ以外は平気そうだ。
「よく見ておけ」
慌てて絆創膏がないかと鞄の中を探していた工藤に、悠人が言う。
視線を彼の指に戻すと、包丁の刃を離したところから血があふれ出てくるが少し時間が経つとすぐに血は止まり、それどころか皮膚

も元に戻っていっていた。
「……！？」
目の前で起こったことに今までで一番驚愕する。
普通の人間にはありえないことなのは見ただけでもはっきりと分かった。切り傷であれほど簡単に血が止まることはないだろうし、裂けた皮膚がすぐに繋がることもあり得ない。
「す、すごい……。それが『永遠人』の力なの？」
「あぁ。受けた傷をかたっぱしから細胞の分裂を行うことで治すんだよ」
説明を聞いただけでは全く理解できないだろうし、信じられることでもなかったが、目の前で見せられては信じざるをえない。
「実験を主導した科学者たちはワクチンが正確にこの行動を起こすことを願っていたらしいが、結局は拒絶反応が強すぎて多くの人間には適合しなかった。それどころか、今じゃワクチンは完全に人間と適合することはないだろう。大気中に散布されセルウイルスに変化したあとは進化するスピードがあまりにも速くて適合者を調べて改良することができなかったそうだ。そこで人類の性格基盤が侵されて困り始めた政府から適合した俺に、新しいワクチンの精製などのセルウイルス対応全般が任されたんだよ」
彼は『永遠人』になってから、世界がこのような状態になってしまった元凶に打ち勝つためにここで働いている。いや、生きているのだ。二〇〇年以上もの長い月日をたった一人で。
改めてそう思うと、初めて会ってから今日まで悠人に対して感じてきた――あまりにも多くのことを知りすぎている――ことにも納得がいく。二〇〇年という時間を生きて、この世界のために戦ってきたんだろう。
悠人に会えて、良かったと素直に思えた。それまでは何も変わらない日常を生きていたが、悠人のおかげで世界の本当のことを少しでも知れた気がする。彼と出会うきっかけになったテロ事件でさえも少しはありがたく思えてしまう自分に工藤は不謹慎だと思ってし

まった。

もちろん当初は悠人に対して恐怖感は感じていた。今ではそれも全くとは言わないが、ほとんど感じない。彼が工藤のことを少しでも受け容れているからだろうか。悠人が工藤のことをどう思っているかは分からないが、こうして話してくれているのだ。信用はしていなくても、少しずつでも信じてきてくれているのだろう。

第三章　二〇〇〇年という時間　？

4

ふと壁に掛けられている時計を見ると夜の一〇時を回っていた。
少し休憩をしようと悠人は言い、そのままリビングから出ていっている。トイレにでも行っているのかと工藤は思い、椅子から立ち上がる。勝手に部屋の中を物色するなど本当はしてはいけないのだろうが、どうしても好奇心を抑えきれなかった。もっともっと知りたいという気持ちが強くなってきていたのだ。
「おっきな本棚――」
リビングに通された時も思ったが、二つ並べられている本棚はとても大きい。ここは書斎だと言われても納得してしまいそうなくらいの容量が入りそうな本棚だ。
ガラス製の扉をそっと開けてみる。
そして棚にぎっしりと並べられている本の量を見てまた驚く。
「すごい数……」
悠人はワクチンの研究も任されていると言っていた。そのための資料か文献かがたくさん並べられているが、それよりも目を引くモノがあった。
「アルバム――？」
彼が研究のために活用しているだろう本や資料よりも、そのアルバムは多くのスペースを使って仕舞われている。ざっと数えただけでも五〇冊以上はあるだろう。中身までも勝手に見てしまうのはさすがに悪いだろうと良心が訴えるが、震える手はその内の一つの背表紙を掴んでいた。
手元まで持ってきて表紙を見ると「二一七七年一月～二一七九年一〇月」とだけ書かれていた。

「二一七七年……」
三〇年以上も前の年だ。
この年のアルバムを持っているということが、彼が信じられないくらいの長い年を生きているという証なのだろう。見た目は工藤とそんなに変わらないと見えるが、実際の年齢はいくつなのだろうか、とふと疑問に思った。
アルバムを手に取った勢いに任せてページを捲(めく)る。
捲ったページには見開き半分のページを占めるように写真が貼られている。写真には数人の青年が映っていた。みんなで仲良さそうに肩に手を回したりしている。その内の一人は間違いようもなく悠人だ。顔も背格好もさきほどまで工藤と一緒にいた悠人と変わらない。その悠人を囲うように周りにいる青年たちは悠人よりも少し大人びているように見える。タバコを咥えている男もいるのだから、二〇歳は越えているのだろう。
本当に楽しそうに映っている写真だなあ、と思いながら隣のページに目を移すと青年たちの名前だろうと思われるものが書かれていた。さらにはそれぞれの男の生年月日や正確、細かい癖などまでも書かれている。中には二一九三年享年と書かれている人もいた。
「なにこれ……」
今の時代に手書きで書かれていることにも驚いたが、書かれている内容の方に意識が集中する。
撮りためた写真を張っただけのただアルバムではないことは容易に分かる。昔を懐かしむアルバムにしては随分とその人のことを深く書いていることに気付いた。
「……」
アルバムの中身を見た工藤は言葉が出ない。それだけの衝撃があった。自然と動悸が激しくなる。アルバムには、懐かしむため以上の過去が記されている。
悠人の過去を勝手に見ることは彼に悪いと思いながらも、一冊を手に取った工藤はもう一冊だけ、と別のアルバムの背表紙を掴む。

手にしたアルバムは『二〇〇六年一二月～二〇〇七年一一月』と書かれている。アルバムのタイトルからも悠人が最初のころに作りだしたものだという事が分かる。

工藤はその一ページ目を捲る。そこには、

「……？」

いつかの朝刊の一面だろうか、新聞記事の切り抜きが貼られていた。

『夫婦殺害事件――狂気を起こした動機は、どこにある！？』と大々的な見出しが大きなフォントで記載されている。なぜこのような新聞記事が貼られているのか、と疑問に思う。しかし、その内容をじっくりと読むことはせずに、次々とページを捲っていく。

捲っていくページには、クローン問題についての記事や実験が行われていただろうロシアのパラナ研究所の写真などが貼られている。先ほどのアルバムと違って、人の写真よりも新聞記事が多く目につく。工藤がなぜだろう、と思っていると悠人が入っていった隣の部屋から物音が聞こえてきた。

「……！？」

ビクッと身体を震わせた工藤は、　これ以上見ることは悠人にも失礼だし、まずいと思いアルバムを本棚に戻す。そして悠人がリビングに戻ってくるまで、椅子に座り気分を落ち着かせることに必死だった。

第三章　二〇〇〇年という時間　？

「悪い。トバトに餌をやらなくちゃいけない時間だったから――」
そう言いながら人がリビングに戻ってきたのは、それから数分後だった。
「どうかしたか？」
「え！？　ううん、なんでもないよ！　大丈夫！！」
リビングに入ってくるなり、工藤の様子が少し違うことに気付いた悠人が問いかけてくるが、工藤はなんとか平静を保って返す。
「大丈夫ならいいんだが。俺の話についていけないとかだったら早めに言ってくれよ」
見当違いの心配をしている悠人だが、工藤も彼が気付いていなくてよかったと胸を撫で下ろした。
「ちゃんと餌やってるんだね」
「こんな森の中じゃ人の残飯がそこらに残っているわけじゃないし、公園に行ってパンを貰うなんてこともあの大きさじゃできないだろ。苦労はあるけど、あいつがいないとこの森を移動するだけでももっと苦労するからな」
なかなか愛情深い面もあるんだと感心してしまう。ついさっきも工藤の心配をしていたことを考えると、面倒見が良い性格なのかもしれない。
そう考えると少しおかしかった。
「それで――『永遠人』については話したぞ。次は何について知りたいんだ？」
工藤に笑われているのが気に食わなかったのか、悠人は強引に話を戻そうとする。
「えと……。あなたは狙われているって言っていたけど、地下鉄駅であったテロ事件と関係があるの？」
「……どうしてそう思う？」

「あのテロ事件の時、私も駅にいたの。そこで駅が崩れちゃって改札口の前で取り残されてたら、犯人の人が『永遠人』って言葉を言ってたし、あなたの名前を言ってた人もいたから。ずっと気になってて……」
「なるほど。そうじゃないかとは思っていたが、やはり君も現場にいたのか」
腕を組んで、少し考えるように悠人は返してくる。
「あれ？　気付いてなかったの？」
「事件の次の日、君と駅であったときに俺も疑問に思ったが、まさか聞いている人間がいたなんて思いもしなかったからな。最後の爆発が起きる前に、救助隊が間に合ったんじゃなかったのか？」
「う、うん。一応間に合ったんだけど――。犯人の男たちが、何人か取り残されてた人を見張ってて、そこから助けてくれるまで時間がかかって」
「そうだったのか……。もう少し時間を稼げなきゃいけなかったんだな」
ぶつぶつと言う悠人だが、工藤はそれには気も向けず、さらに質問を重ねる。
「やっぱりあの時狙われていたのはあなただったんだね？」
「そうだ」
「なんで狙われてるの？」
「俺の存在があいつらにとって迷惑だから――だろうさ」
「迷惑……！？」
存在が迷惑だから殺す対象になるというのは、あまりに突拍子もない話ではないだろうか。馬が合わない相手や気に入らない相手がいたとして、だから殺してしまおうとまでは思いもしない。それが、工藤が住む世界の良識だ。
しかし悠人はいたって真面目に言っていた。それは彼が住んでいる世界が工藤のそれとは違うことを示している。
「そう。俺は政府から命令されて、国内のセルウイルス対処や新し

いワクチンの研究などをしているが、それがあいつらにとっては迷惑なのさ」
「どういうこと？」
「ええとだな――。つまり、俺を殺そうと駅でテロ事件を起こしたあの男たちが、電車で話した軍需産業企業に雇われた傭兵たちなんだよ。今、世界の国々は概ね友好状態にある。国同士の戦争なんてもう数十年起きていない。紛争や宗教、政治問題でのいざこざは別だぞ。そこで俺が世界に蔓延しているセルウイルスに対抗できるワクチンを完成させたら、都市の外の森や動物に恐れる必要もなくなる。世界中が軍なんていらなくなり、警察や自警団のような自衛目的の部隊だけで済むようになるかもしれない、と危惧している奴らがいるらしいんだよ」
あきれたような口調で悠人は言うが、馬鹿げた話に思えた。
「無茶苦茶な考えじゃない？　国同士で争わないからって軍が必要ないってわけでもないでしょ」
「まあ、そうだろうな。それでも一度考え出すと人っての は、その考えが頭のどこかでちらつくものだ。そいつらが俺を殺そうとしているわけ。それが俺と地下鉄駅のテロ事件との関係の全てだ」
随分飛躍しすぎている話だと思うが、その危惧している人たちにとってはとても大事な話なのだろう。

第三章　二〇〇〇年という時間　？？

悠人が言うように世界の国が円滑な関係にあるのは誰もが知っている。二〇世紀には世界大戦が二度もあったらしいが、今では世界大戦どころか隣国同士――民族間や宗教間などの争い以外――の戦争はほとんどと言っていいくらい起こっていない。世界のいたるところで、『ＰＣＤＶ』に感染した森がその勢力を伸ばしているのだ。国同士で争っている場合ではない、ということで世界中が結束して、この惑星規模の非常事態に対応しようという動きがますます強くなってきている。

その世界情勢から『ＰＣＤＶ』に対抗できるワクチンが完成した以後も、世界の国は強力な友好関係を築き上げていくだろうと考え困っている人がいるということなのだろう。

やはり無理矢理な、といった印象を工藤は感じた。

「言い忘れていたが、そいつらがＨＭを使って俺の身辺を調べているのさ。初めて君と会った時、一人のおっさんが消えていなくなったのを憶えているか？」

「おっさん――？」

悠人に言われて、月曜日の朝に遅刻して学校に行った時、目の前で一人の男の人が急に消えたのを見たことを思い出す。

「あっ！　そういえばそんなことも――」

その時のことは、後から現れた悠人の威圧感にやられてしまったことと、放課後の地下鉄駅での事件のことがあまりにインパクトの強い出来事で消えた男の人など忘れていたのだ。

「その男がＨＭ、つまり立体映像人間だったんだよ」

「え！？　あの男の人がそうだったの！？」

「そうだ。あれが普通の人間だと思ったのか？」

「や、そうは思わなかったけど……」

あまりにも衝撃的だった。

今ではもう顔すら思い出すことはできないが、たしかに突然消えたことには最初こそ不思議に思っていた。その後に工藤の身に降り注いだ出来事のほうが強すぎたので、不思議に思ったことすら忘れていたが、それでもあの男がまだ世間に発表すらされていないＨＭだと悠人が言うのだから、また驚きは倍増である。

「あの男の人がＨＭだったとして、どうして突然消えたりしたの？」

「さあ、それは分からないな。消えたのは俺が近づいたからか――、何か別の理由があるのか。俺の周辺を漁っているのは分かるが、なぜあそこにいたのかも分からないし、そもそもどんな理屈で動いているのかも分からないからな」

ＨＭについては悠人もほとんどお手上げのようだった。

映像を空間に映し出すには、何よりもその装置が必要不可欠だ。さらにはどのようにして人工知能を搭載しているのかという問題もある。極小のチップとしてプログラムしていたとしても、立体映像には搭載するための機械を備え付けることもできないのだから。ビルの一室か屋上かに装置を隠して映し出しているのか、人工衛星からレーザー光線を用いて映像を映し出しているのか、と悠人は可能性を考えるが当たっていたとしてもどうする手立てもなかった。

「機械を壊したらいいんじゃないの？」

「そうしたら、間違いなく抹殺の対象になる。国家間の争いにもなりかねないからな。相手側にも『永遠人』がいるわけだし」

「そ、そういえば『永遠人』って何人もいるの？」

テロ事件の首謀者の一人だった男は悠人を追い詰めた時、お互いのことを『永遠人』だと言い合っていた。つまり悠人を殺そうとしているのは同じ『永遠人』の男なのだ。

「そうだな。たしかに俺と同じ存在の奴は何人かいる」

そう言いながら、悠人は着ている服の右袖を捲くり右肩の肩甲骨を見せてくる。そこには『Ｎｏ．１７』と書かれていた。

「何の数字――？」

「まぁ普通に考えて製造番号（シリアルナンバー）だろうな」

「シリアル……ナンバーって……」
悠人の肩には一七の数字がタトゥーのような形で書かれてあった。その数字が製造番号ならば、『永遠人』は最低でも一七人いることになる。
「俺が最後の『永遠人』なのかも分からないし、その内何人がすでに死んでいるのかも分からないからな。この数字にはあまり意味ないだろうって考えているけど」
悠人は研究所が機能停止した後、『永遠人』はそれぞれの国に処遇を任されたと言っていた。それは国によっては悪の存在だと見なされたなら殺されていた、ということなのだろう。
「『永遠人』も死ぬことがあるの？」
「あぁ、もちろんあるさ。さっきも言ったけど、『永遠人』は死ににくいというだけで死なないってことじゃないからな。細胞分裂によって身体の隅々を再生させることは可能だが、人の生体機能の中枢が死ぬとその限りでもない。つまり、脳か心臓が重大なダメージを受けると細胞分裂を促すことができないんだよ」
傷を受けた個所から細胞分裂を促すことで傷を修復することも、脳からの電気信号により細胞に働きかけることで行われる。それ以外は細胞自体が持つ細胞分裂の周期によって行われるだけだ。電気信号を身体の至るところまで送る脳が死ねば、もちろん『永遠人』としての細胞分裂を永遠に行えるという力も発揮できない、ということだ。
「あとは餓死でも『永遠人』は死ぬかもしれないな。人間には自身の身体で作ることのできない栄養素が生きるために必要だから、その栄養素が身体に摂取されないと生きていけないだろ。そのために食物を食べることが必要になるのだが、それを断たれたら、生体機能も著しく低下するだろう」
「そ、そっか……」
悠人の口から次々に聞かされる話の内容は、とてもすぐ信じられるものではなかった。それでも信じざるを得ないのは、工藤が地下

鉄駅でのテロ事件を体験しているからであり、『永遠人』としての悠人の力を目の当たりにしたからだ。
立ち上がりキッチンのほうへ向かう悠人の背中を見ると、
「もうこんな時間か。君は帰ったほうがいいな。これ以上、夜が更けるとになると夜行性の動物が暴れまわる」
「あ、うん……」
もっと悠人のことを知りたいと思う工藤だが、ショッピングモールでのカラスのこともあり、彼の言葉に従って帰ったほうがいいと観念する。

第三章　二〇〇〇年という時間　？？

5

再びトバトに乗り、相模川沿いにある高さ一〇メートルを越える鉄塀を越えて、旧森林研究所の建物に降り立つ。
悠人から聞いた話が頭の中でぐちゃぐちゃに回っている。もっと理解することも整理することも少し時間がかかるだろうと思いながら、悠人の手を取ってトバトの背中から飛び降りる。
「ここまでで大丈夫か？」
「うん。まだ終電でもないし、最悪お父さんに迎えにきてもらうから」
「そうか」
悠人の態度や様子、口調は明らかに柔らかくなっている。彼が私のことを少しは信頼してきているからだろうか、と工藤は疑問を何度も思ったが、今しかないだろうと、
「あ、あの――っ！」
森へ帰ろうと振り返ろうとした悠人に、声をかける。
「どうした？」
急に呼び止められた悠人は、不思議そうな顔をする。
その表情を見て、開きかけた口が中途半場に止まる。言わなければならないという気持ちと、言って悠人に何を言われるのかが恐いという気持ちが相反する。いくらか柔らかくなっているとはいえ、それまでの悠人の言動や態度がまだ脳裏に焼き付いている工藤は、躊躇をしてしまう。
「言いたいことがあるんじゃないのか？」
呼び止めておいて何も言わない工藤に、悠人はさらに不思議そうに聞く。

「わ、私――あなたに、謝らなくちゃいけないことがあって……」
「謝らなければならないこと？」
「そ、その……あなたの部屋の本棚にしまってあったアルバム、勝手に見ちゃったの！　ほんとにごめんなさい！！」
「―っ！？」
工藤の言ったことに、悠人は目を大きく見開き驚く。
「中身見たのか……？」
「う、うん」
小さく、しかしはっきりと聞いてくる悠人の表情はとても辛そうだ。
「そうか――。最初に言っておかなかった俺が悪いな。あまり人に見せたいものじゃないんだが……」
「ご、ごめんなさい……」
「今さらいいさ」
仕方がない、という感じで悠人は許してくれた。それでも工藤の良心は疼く。
「あの、一つ聞いていい？」
「なんだ？」
「どうして、あんなアルバムを作っているの？」
「……命よりも大切なものだから――ってことにしといてくれ」
「命……？」
「あぁ」
「どういうこと？」
「俺が何を感じ、どう思って今まで生きてきたか、君には分からないってことさ」
「……」
今までの雰囲気よりも悠人が重たい空気を出していることに気付く。その空気に呑まれて、何も返せない。
「俺は、親戚も友達も出会ったみんなが年を取っていくところをずっと見てきた。その辛さは君には……分からない」

沈痛な面持ちで言う悠人の言葉が、工藤の胸に強く突き刺さる。
何も返すことができなかった。あのアルバムに載っていたのは彼の思い出だけではなかったのだ。彼が過ごした二〇〇年の全てがあの中に詰まっている。
「わ、私……」
再び見据えてくる眼は、それまでの柔らかさが随分減っていた。その悠人の眼を見て、言葉が止まる。
「君が望んで知りたがっていたことは話した。これから君がどうするのかは自由だが、それには全て危険が付いて回る。それだけは憶えておくんだ」
「……」
「じゃあな」
悠人がトバトにまたがり、遠く森の空へ飛んでいくまで工藤はその場から動くことができなかった。
なんで見てしまったんだろう、と罪悪感だけが残ってしまった。

第四章　加害した者が受けた被害

第四章　加害した者が受けた被害

1

お昼休憩中の教室に工藤は一人自分の席に座っていた。
近くでは、席を合わせて持ってきた弁当を食べているクラスメートが楽しそうにしている。その様子をぼうっと見ている工藤だが、顔には元気がない。

『みんなが年を取っていくところをずっと見てきた辛さは、君には分からないさ』

昨日、そう言っていた悠人の言葉が強く工藤の頭に残っていた。
目を閉じるたびに、苦痛そうにしている悠人の顔が瞼の裏に浮かぶ。それはとても胸を締め付けるような表情だった。
（あの人がどれだけの辛さを味わってきたのかは……私には分からない……）
ひどいことをしたという罪悪感が工藤にのしかかる。アルバムという個人の思い出を勝手に見たこともそうだが、そのことで彼に辛い思いをしていたということを喋らせてしまった。悠人はあまり人に見せたくないものだと言っていたのだ。他人に話したいことではなかったはずだ。
「はぁ……」

ため息ばかりが口から出る。
（私の好奇心ってほんと強すぎるのよね……）
アルバムを見てしまったことも悠人について行こうと思ったことも、地下鉄駅のテロ事件の真相を知りたいと思ったことに起因しているように思う。それは工藤の『知りたい』という心の欲求そのものだ。自身の欲求を満たすために、悠人のことをさらに傷つけたのではないかとさえ工藤は不安に思うほどだった。
「もう一度謝ったほうがいいかな……」
悠人はそれほど怒っているようには見えなかった。しかし工藤には分からない部分で彼は傷ついているのかもしれない。
思いつめている工藤の様子を教室の窓際から高田と上田がひっそりと見ていることに彼女は気づいていない。それほど工藤はショックを受けているようだ。
高田に相談しようかとも工藤は思うが、彼女は思い悩んでいる工藤を心配している。これ以上心配させるわけにもいかない、と自分で頑張ろうと工藤は思ってしまう。

第四章　加害した者が受けた被害　？

2

そんな自分の机にじっと座っている工藤を見て、どうしようもないため息が高田の口からこぼれる。工藤が何に悩んでいるのかは分からない。どこまで突っ込んでいいのかも分からずに高田たちは工藤を見守ることしかできい。

「どうだった？」

隣で窓辺に肘を付いている上田が急かすように上尋ねてくる。ゆっくりと言葉を選びながら、上田に返す高田だが、その視線は椅子から立ち上がる工藤のほうに向けられていた。

「どうも何も――。元気がない感じっていうか……何か気にしてることがあるような感じだったけど」

「気にしてる？」

「うん。今日もあまり元気がなさそうなのははっきりしてたじゃん。昨日私たちと別れてから、何かあったとしか思えないんだよね」

「何かって？」

さらに尋ねてくる上田に、とりあえず昨日ショッピングモールで体験したことを上田に言う。それを聞いた上田にはどこか引っかかる部分があるようで顔をしかめる。

「その男のこと、工藤は前から知ってたんじゃないか？」

「え！？　たしかに何か話してたけど、そんな感じには見えなかったよ？」

「ん～。急にモールのほうへ引き返したんだよな？　それってその男に何か用が会ったんじゃないのか？」

「そうかも……」

高田にも思い当たる節はあった。

工藤は「忘れ物」と言って、引き返していた。しかし、彼女が何かを忘れ物をしたという様子はなかったし、ショッピングモールではお財布や手帳くらいしか鞄から出していない。それらもカフェを出るときにすぐに仕舞っている。工藤が言う忘れ物は何か別の、上田が言うような男に用事があったことなのだろうか。

「でも、幹があの男のこと知ってるようには見えなかったけど」

何かを考え込むようにしている上田だが、彼にも確信はなさそうだ。そもそも上田はその場にいたわけでもないのだから憶測でしか話すことができなかった。

「まぁ、ありがとう。悪いな、こういうこと頼める奴ってお前しかいなくてよ」

「私は別に構わないけど、今度何かおごってもらうからね！」

「了解っ」

それだけを言うと自分の席に戻る上田の様子を見て、もう一度ため息を吐く。

高田は上田から、工藤の様子がおかしいから遊びに誘って気分転換させてやってくれ、と頼まれていたのだ。それほど心配なら自分で誘えばいいだろうと思うが、普段から親しくしている高田とのほうが工藤も気分転換できるだろうと上田は言っていた。

（上田ってとことん心配するっていうか――気持ちが重いっていうか）

重たい足取りで次の移動教室での授業の準備を始める。ちらっと工藤の席の方を見ると彼女はまだ戻ってきていなかった。

第四章　加害した者が受けた被害　？

教室だと周囲のざわつきが大きく、それがうるさく感じていたので工藤はトイレに来ていた。個室に入り便座に座りながら、じっと前の扉を見ていた。

「さっきのニュース聞いた？」

「森のほうで火事が起こってるってニュース？」

すると女子学生が気になる話をしながらトイレに入ってきた。

「そうそれ！　なんか街の近くの森らしくて、こっちに燃え移るかもしんないんだってさ」

「え～。山火事とかってなかなか消えないんでしょ？　鉄塀越える可能性高いじゃん」

（山火事……？）

女子学生たちの話を聞いて工藤は不審に思う。都市部に近い森というのはどこなのだろう。東京から一番近い森は神奈川のほうか群馬のほうだろう。

「そうそう。そっちのほうの学校の友達がすごい騒ぎになってるってメールきてさー」

「大丈夫なの？　最近こういう危ないニュース多くない？　この前だって地下鉄でテロ事件あったし、昨日もウイルスに感染した鳥が街中に出たし」

「そういえば……」

工藤も不思議に思った。これまでも時折ウイルスに感染した動物のことや森で動物たちが暴れているというニュースは取り上げられたことがあるが、短期間にこれほど起こることはなかったはずだ。それは工藤が悠人と出会ってから頻繁に起こっている気がする。

つまり悠人がすべて関わっているのではないかと工藤は直感で思う。すぐに確認することはできないが、悠人が関係しているのなら山火事が起こっている場所にいるのだろう。そう考えると工藤はこ

こでただ授業を受けていることは出来なかった。
（……じっとしてられない……）
思い立つと工藤は勢いよく個室を飛び出した。
「！？　びっくりしたぁ……」
その音に驚く女子学生のほうを見向きもせずに教室へと戻る。すれ違う人の奇異の目も気にせずに廊下を走る。
「ど、どうしたの――幹？」
すごい勢いで教室に入ってきた工藤に対して高田が声をかけるが、工藤は自分の鞄を手に取りながら短く返す。
「午後の授業は休む」
「え！？　ちょ……幹っ？」
びっくりした顔をしている高田を放っておくように、教室を出る。
「休むってどういうこと――？」
工藤のただならぬ様子を見た高田が追いかけて訪ねてくるが、
「大事な用事があるの。先生には気分が悪いから早退しますって伝えといて」
「早退って……。何があったのよ、幹！？」
「ごめん。今は話せない――。早く行かないと……」
高田の制止を振り切るようにして、工藤は下駄箱へと向かう。その足取りはとても速く、高田は追いかけて止めることを諦めるしかなかった。
「幹……」
工藤が高田に何か隠し事をしていることは知っている。誰にでも知られたくないことや話したくないことはあるだろう。しかし、高田にはその隠し事が工藤を苦しませているように見えて仕方なかったのだ。だから上田に頼まれた時も、彼女のことを思って行動した。
もしかしたら高田以上に工藤のことを心配している上田も、その工藤の様子を下駄箱が見える階段の踊り場からちょうど見ていた。移動教室のために通りかかったのだが、そこで工藤が鞄を持って靴を履き替えるとこを目撃したのだ。

「……」
言葉にならない沈黙が心を抉る。彼女の視界はどこを向いているのだろうか、と上田は少し寂しくなった。
「どうかしたのか、上田？」
「や、なんでもない――」
隣を歩いている男子学生に急かされて、階段を上がる。手に持っている授業用の教材がいつもより重たく感じる。
学校を出て、地下鉄駅へと全力で走る。
途中で立ち止まることももどかしいほどに気持ちが高ぶっていた。考えるよりも先にどこにむかうべきなのかが頭に浮かんでくる。
「はぁはぁ……」
息も絶え絶えになるが、早く悠人のもとへと足が動く。
その力がどこからくるものなのか、工藤は曖昧にしか分かっていなかった。
（それでもいい！　私は……わたしは――っ）
胸の内にあるもやもやした感情とはっきりとしている感情が重なるが、それでも良いと力強く足が前に進む。

第四章　加害した者が受けた被害　？

3

深く生い茂る大森林には、昼間でも太陽の光が届くことはまずない。

空高くそびえる木々はその大きさや枝の広がり具合から見ても、一つの丘と言えるほどだ。その枝の一つ一つも人が軽々と歩けるほどに太い。その枝の上も歩き、木々を移動する人影がいた。

悠人である。

彼はこの森を住処として、ウイルスに感染した動植物の対処を日本政府から任されている。そのため悠人は、このようにして日々森を歩き動植物の動きを調べているのだ。

「ここも、だいぶ荒らされているな……」

今日悠人が訪れているのは、この地区の森の中でもかなり都市に近い場所である。都市に近い場所であるため、これ以上の森の侵食は止めなければならない。

木の枝から地上を見るとかつての街のなごりか、大きな木の幹や植物に絡まれた建物が見える。このように森が都市を侵食するのは木の根が伸びる地下や地上付近からである。そのために都市の周辺には高さ二〇メートルを越える鉄塀を建てて侵食を防ごうとしている。しかし、木の根が伸びる力は建物を穿（うが）つほどに強い。いずれはその鉄塀も越えて都市にその勢力を伸ばしてくるだろう。その繰り返しで今までも多くの都市を人類は失ってきたのだ。もう何十年後には東京という都市自体がなくなっているかもしれない。

「それだけは阻止しなければ……」

無意識にでる独り言は強い使命感があるからか、悠人は動物の気配に注意を払いながら、地上へ降りる。

降りた地上には、上から見えていたよりも多くの建物がまだその形を保っていた。形は保っているが、建物の外壁も中も木の枝が蔓のように絡まっていて、とても人が住める状態ではない。
（動物がいた痕跡はないが、可能性がないわけじゃないし――）
悠人は慎重に建物の壊れ開いたままのドアから中に入る。そのままの形を保っている建物は動物たちの格好の住処となっていることが多いのだ。この建物にも住みついている可能性があった。
「オフィスビルか……」
正面玄関から入ると壊れたエレベーターが目の前にあり、左手に各階に入っていた会社の名前が記されたインフォメーション板が緑に覆われていたが残っていた。
オフィスビルとなると各階にそれなりの広さがある部屋がいくつかあるのだろう。その内の一つ一つを動物たちが住みついていないか確認しなければならない。時間がかかる作業だが野放しにしておけば、都市を囲む鉄塀が近いため被害が及ばないとも限らない。
上階から一つずつ室内を見てつぶしていく。今の時代では六階建てとそれほど大きくない建物のすみずみまで調べるが、どこにも動物などが住みついている様子はなかった。
「外の木々は荒らされた痕跡があった。しかし……」
しらみつぶしに建物内の部屋を全て回ったが、どの部屋にも動物がいたという確かな情報は得られなかった。
（巣があるとしたらここだと思ったんだが）
手ごたえがないままかつてのオフィスビルから立ち去るが、悠人の頭には疑問が残る。森が都市を侵食していくのは多くが地下や地上付近からだ。それほど高くもないこの建物は全体を植物に覆われて入るが、まだ中に入れるほどで済んでいる。ここは都市部に近い森の侵食が激しい場所でもある。それなのに、まだこれほどの侵食で済んでいるのは不可思議だった。
（普通これだけ蔓に呑まれていたら、建物の内部もひどいもんなんだが、人が歩きまわるには十分すぎる広さがまだあった。というこ

とは――）

つまり、生物がここにいたということになる。生物が生活するためのスペースとして残された空間だとしか思えない。

（あるいは自衛隊なんかが、ここを活動拠点にしていたのか？　機材がもうないのは、すでに撤退したか別のところに移動したか……）

様々な可能性を考えるが、現時点で分かるはずもなかった。仕方なくこのオフィスビルの解明はあきらめ、別の地区を調べに移動する。

毎日広大に広がる大森林の中を移動し、それぞれの地区のウイルスに感染した動植物の対応やそれらの動きを調べている悠人だが、都市部に近い地区を回っているときは普段より細心の注意を払っていた。それでも今日訪れるまで先ほどのオフィスビルの存在には気付かなかった。その自分の不注意さを少し憎む。

憎んでばかりもいられないのですぐに次の地区に移動をするが、この見落としが後々響くことになるとは悠人も思いもしなかっただろう。

第四章　加害した者が受けた被害　？

次に悠人が訪れたのは、広がる大森林の中でぽっかりと開けた場所だ。

開けた場所というが、それは五〇メートルを軽く越す木々が林立していないということだけで、そこにも『ＰＣＤＶ』に感染した植物が多く生えていた。なぜこの場所に木が伸びないのかを調査し始めてすでに数カ月になっているのだが、まだ成果は出ていない場所だった。そして時間があれば悠人が必ず来るようにしている場所だ。

悠人と同じ背丈はあるだろう雑草が生い茂っている中をかき分けるようにして進んでいく。ここの土地に、悠人は都市を守るためのヒントがあるのではないかと考えているのだ。

（……焦げた鉄の匂い……？）

不意に人工的な匂いがしたことに悠人は気付く。

ここは人が立ち寄らない大森林だ。人工的なものは森に呑み来られたかつての街の名残のものしかない。その大森林に、街の名残のものとは違う――比較的新しい匂いがした。

「……誰かいるのか？」

さきほどのオフィスビルを活用していた奴らかもしれない。自衛隊などの活動が今日行われているという報告は受けていない。今日は都市部での任務ではないため、相棒のオペレーターはいない。

索敵機器を持ってきていないため肉眼で注意深く周囲を探るが、人の気配は感じられない。自分の思い過ごしか、と悠人は考え、再度雑草の調査に移ろうとするが、そこに強烈な殺気を向けられた。

「っ！？」

目を凝らすようにして、再び周囲の大木に注意を向ける。すると、先ほどまでは感じなかった人の気配を複数も感じた。

（気配を消していたのか……）

「生きていたのだな。あの爆発でよもや生きのびるとは思わなかっ

たが――」
「……ルシオ――？」
大木の陰から現れたのは黒い装束を纏った大柄の男だった。地下鉄駅でのテロ事件の首謀者である。
「どのようにして助かった？　あれほどの爆発だ。全身が吹っ飛ぶと思ったのだが」
「たまたま運が良かっただけさ。詳しいことまで教える必要ないだろ」
「運が良かった――だと！？　そんな理由で三〇年もお前を取り逃がしてきたのだとは思えないがな」
悠人をじろりと眺めながら、言うルシオの表情はとても憎そうにしていた。
「相変わらず俺が嫌いなようだな」
「当り前だろう？　お前はこちらの邪魔であることは変わりないのだ。世界の状況は緊迫している。我々人類が手を打つことが遅すぎたくらいだ。それでも人類は対抗策を講じようとしている。閉塞的活動をしているお前は知らないのだろうな」
「何をだ？」
「それこそ教える必要ないだろう？」
憎い表情のままニヤッと笑う。その顔が悠人の神経を逆なでしてくる。
「気になるなら、自分で調べろってこと……か」
「そうだ。一つ教えてやるとロシアに行けば何かわかるかもな」
「ロシア？」
ルシオが言うロシアというのは、『永久の命』計画が行われていたパラナ研究所のことだろう。あそこは実験の凍結以後閉鎖されて、誰も立ち入ることができないはずだ。パラナという地区自体が『死んだ土地』だと言われている。獰猛な動物たちが蹂躙している土地であり、人が立ち寄ることすらできないほどだ。
「そうだ。ここで生き残ることができれば――だがな」

「！？」
言うやいなや、木の陰から一斉にショットガンが撃たれる。逃げる方向までも捉えようとする散弾銃による多角攻撃だった。
「……！？」
（囲まれていたか）
咄嗟の判断で飛んで空中へと逃げる。それすらも計算されたようにルシオが追撃を繰り出す。重い拳が顔面めがけて飛んでくるが、腕を交差させてそれを防ぐ。しかし、その衝撃に押されて後ろへ吹っ飛ばされる。
「ちっ――」
そのまま大木の幹にぶつかり、息がとまるほどの衝撃が身体を襲う。
「がっは……」
「良い技術だと思わないか？　筋細胞や筋繊維を破壊するほど力を振り絞っても、その場ですぐに再生されるのだからな。筋肉に電気を流すことでリミッターを度外視した力を発揮できるのは我らの特権だと思わないか？」
ずるずると大木から滑り落ちていくが、さらに迫るルシオに首をつかまれる。そのまま身体を大木の幹に押し込まれていく。メキメキと幹がひしゃげる音が鳴り、剥がれた木片が地面へと落ちていく。
「ぐ……」
ルシオのあまりの力の強さに、苦しそうな悠人の声が漏れる。
「いい声で啼くじゃあないか。ここは街じゃないのだぞ？　もっと本気を出せるだろう？」
耳元で囁いてくるルシオの声色が癇に障る。振り払おうとルシオの手首を掴むが、万力で首をつかまれているように息ができず力が入らない。
「く……そ……」
「ここで死んでくれないか？　世界にお前は必要ないのだよ。このような世界になってしまっても人は新しい秩序を作り、この世界で

生きている。お前はその秩序を壊しかねない」
世界は『ＰＣＤＶ』が蔓延しているという環境を受け入れ、今を生きている。ルシオにしてみれば、それが当たり前の世界ということなのだろう。
力を緩めたルシオが、悠人の腹にひざ蹴りを放つ。
「ぐっ！？」
鈍い音とともに、悠人の全身がさらに木の幹に埋まる。その状態の悠人にさらにルシオが突きや蹴りを繰り出してくる。避けることもままならず、その全てを受ける悠人の身体が徐々に壊れていく。
「がぁあああ！！」
ボキッと骨が簡単に砕けていく感触が全身を包む。聞き慣れた音ではあるが、断続的に響くと激痛と不快感が襲ってくる。
「む、簡単に折れるな……」
「はぁはぁ……何がしたいんだ、おまえは――っ？」
「簡単に殺してはつまらんのでな。私がこの三〇年間踊らされ続けたお前は嬲り殺したいではないか。ということで、簡単に死ぬなよ」
首根っこを掴んだルシオが地面に悠人をたたきつける。なすすべもなく吹き飛ばされる悠人は強い衝撃を伴って地面に衝突する。全身の骨を折られているので、まともに受け身も取ることができず地面を転がるようにして衝撃を軽減することしかできない。
「ここは誰もいない広大な森だ。我々を妨害するものもない。遠慮なく力を発揮させてもらおうか」
そう言うとルシオは近くにいた部下に命じて、装甲車両に繋がれた武器を持ち出す。
「な、なんだ？」
折れた骨が『永遠人』の力で再生されるのを待ちながら、身を低くしている悠人に冷たい声が刺さる。
「火炎放射器だよ。森ごと全身を焼いてあげよう」
「……！？　まずっ――」
容赦なく引き鉄を引いた銃口から、強烈な熱気を捲き散らかしな

がら火炎が放射される。ゴォオオオオッ！！という音を響かせながら放たれた火炎は、悠人が避けたために直撃することはなかったが、近くの大木や雑草を飲み込んでいった。
「ちっ！」
火炎は避けることが出来たが、周囲は炎の海になってしまった。これでは身動きを取ることが出来ない上に、敵からは格好の的になってしまう。ルシオもそれを狙っていたかのように、複数の男が大木の枝に陣取り狙い撃ちをしてくる。
火炎放射器よりも殺傷能力のはるかに高い銃器だ。万が一心臓や脳に当たれば、悠人でも即死である。周囲を囲んでいる炎の中に飛び込んで銃撃は回避するが、そこにルシオが突っ込んできた。
「なっ――！？」
「さすがに炎は皮膚を焼くくらいで即死性はないか。しかし、浅い考えの男だな」
空中では回避することもままならず、横からの回し蹴りをもろに受ける。また吹き飛ばされ受け身を取ることも出来ず大木に直撃する。
「ぐ……！？　くそ……っ」
「お前は肉弾戦も弱いのか？　逃げることしか脳のない奴だな。しかし、この広がった炎を放っておくことは出来まい。都市の方へ広がるかもしれんぞ？」
「てめえ……」
「おや、言葉が荒れてきたな。やっと本性をさらけ出してくれるのか？　単調なお前は見飽きたのだ」
挑発を誘う言葉に悠人は乗ってしまう。
帯にさしてある銃を引き抜き、銃口をルシオに向けるが、それよりも早くルシオが迫ってくる。
「遅い！」
またしても容赦のない一撃が悠人の顔面を捉える。顔面がめり込むと思うほどの拳の威力に押されて、吹き飛ばされる。

「がぁあああ！！」
吹き飛ばされた勢いで再び大木の太い幹に直撃し、その衝撃で幹が数メートルも窪む。口の中に、苦い血の味が広がる。顔だけでなく背中にも激痛が走るが、固まっていると格好の的になる。血のかたまりを吐きだし、軋(きし)む身体を無理矢理動かして幹から這い出る。
その間もルシオは余裕な表情を見せている。
「私に砕かれた骨がまだ再生しきれていないのか？　地下鉄駅で会った時よりも動きが鈍いぞ？」
「く、くそ――っ」
「いくら凄んでも迫力不足だな。第一にお前が使っている銃弾はゴム弾だろう？　人を殺さぬためか知らんが、いくら強化されているゴム弾だからと言って私を倒すことは出来んぞ？」
（気付かれていた！？）
悠人が使っている銃弾は『ＰＣＤＶ』に感染した動物たちを鎮静させる麻酔弾か、このゴム弾かの二つである。ゴム弾は殺傷能力がないわけではないが、貫通弾よりも低いのだ。
「威力どころか射程距離も普通の銃弾には劣る代物だ。鎮圧用の武器で私を倒そうと考えるなどアマちゃんもいいところだな。私の神経を逆なでしたいのか？　馬鹿にされている気分にしかならないのだが」
「はぁはぁ……馬鹿にしているつもりはないさ。これが俺の身上なだけだ」
「それをアマちゃんだと言っているのだ。貴様も私と同じ時間を生きてきて分かったはずだ。殺さないという信念は立派だと思うが、それでこの世界を生きていけるとつけ上がるなよ」
悠人をゆっくりと甚振っているという状況を楽しんでいるかのような表情だったルシオだが、貫通弾を使わないという悠人の信念を聞くとその顔から明らかなイラつきが見え始める。
「私が言うまで、手出しするな。やはり悠人は私が殺ろう」
それまでは複数いる部下たちにも悠人に対して射撃を行わせてい

たルシオだが、改めて命令を下す。それは自分が悠人を殺す、という強い意志だ。悠人とルシオの間には、それほどの確執があるのだろう。三〇年という途方もない時間を、悠人を追いかけ続けているルシオには、悠人があまりにも憎い存在なのだ。

「……？」

しかし地下鉄駅で対峙した時も、ルシオは部下を用いて悠人を追い詰めていた。目的のためなら手段を選ばないルシオが部下に手出しをさせないというのは、悠人にとっては不気味だった。

（今さら、一対一をするのか――？）

ルシオに他の意図があるのか、これも自分を追い詰めるための作戦なのか分からない悠人は、先に仕掛けることを躊躇う。何度も突っ込んで返り撃ちに遭っていることも、悠人の勢いを削いでいる。

第四章　加害した者が受けた被害　？

4

「はぁはぁ……」

工藤が辿りついた場所は、昨夜悠人に連れてこられた旧森林研究所だ。

都市部に近い森が山火事に遭っているというニュースを聞いたときは、真っ先に悠人が関係しているのだと思った。悠人にはきつい言葉を言われたが、彼が関わっていることには首を突っ込みたくなってしまう。そうすることで世界のことが知れるのだから。

知ることには危険が伴うと悠人は言っていたが、それでも知りたいと思うのだ。この気持ちを止めることができなかった。

閉まっているかもと思った門だが、手で押すと意外に簡単に開く。

山火事が起きていると知ったときは、そこに悠人がいると直感で思い、ここまで行動したが、鉄塀を越えて森まで行く手段を考えていなかった。昨日悠人に連れてこられたから、とりあえずここを目指したというだけだ。それに森に行って何がしたいかということも工藤は自分では分かっていなかった。

（私は……何がしたいんだろう……）

森に行くことで何がしたいのか。それが工藤自身には分からない。悠人のことをもっと知ることで世界の本当のことを知ることが出来る。それは悠人が森にいるだろうと思う直感から来るものであり、森に行く動機にしかならない。そこで何がしたいのかは別だ。

その迷いがあるから、門を開けても中に踏み出す一歩がなかなか踏めない。悠人がいる森に行っても彼を助けることができるとは思えない。悠人には『永遠人』としての力があるし、彼は工藤のことを足手まといとしか思わないだろう。

それでも良いと思えた。
進まなければ何も変わりはしないし、何も分かりはしない。工藤は自分が暮らしている世界の本当のことを知りたいと願ったのだ。そして、それには悠人が必要不可欠なのだ。ならば悠人のところへ行くだけだ。行って何が出来るでもないが、知ることはできる。悠人がいる世界を、工藤が暮らしている世界の本当の姿を。
その工藤の想いに反応するかのように、目の前を強い風が吹く。
「……っ！？」
突風に目を細めると、暗い影が工藤の前にゆるやかに降り立つ。次いで「クゥ」という昨日聞いた鳴き声が聞こえてきた。目を開くと工藤の前にいたのは、
「トバト！？」
開けた門の向こう側に、悠人が飼い慣らした大きな鳩がいた。
工藤の前に降り立った鳩は、彼女がその背中に乗ることを待つように、身をかがめる。森まで連れて行ってくれるみたいだ。工藤も躊躇なくその背中に手を掛ける。
「あなたのご主人さまのもとへ連れて行って！」
呼応するように一声大きく鳴いた鳩は、翼を羽ばたかせ西の空へ向けて飛び立つ。

第四章　加害した者が受けた被害　？

五時間目の授業が終わった後、上田は高田と一緒に自分たちのクラスへと歩いていた。その足取りはあまり軽くない。
「部活に出ないってことだよな――」
「早退したんだから、そうでしょ」
落ち込んだように吐く上田に、隣を歩いている高田は平静に返す。
「高田は――気になんないのか？」
そんな様子の高田を見て上田が尋ねてくるが、
「私だって気になるわよ。でも、幹は言おうとしてないじゃん。幹が自分から打ち明けてくれることが私は一番だと思ってるから、あんたみたいに過剰にはなんないわよ」
それは強がりだ。
高田も工藤が心配であることには変わりない。期末試験が終わって数日が経ったころから、工藤の様子は明らかにおかしい。もっと言えば、高田と一緒に地下鉄駅のテロ事件に遭ってからだ。たしかに高田もその次の日は気持ちが滅入ったが、過度なストレス障害になるなどのことはなかった。高田と工藤の性格の違いなどはあるだろうが、工藤にとっては高田以上に辛い体験だったのだろうか。
（考えてもわかるもんじゃない。私とはぐれたあの時に、幹にきっと何かあったんだ）
工藤と高田は地下鉄駅の天井が崩れてから、瓦礫が積み重なった山に阻まれてはぐれてからお互いに救出された。地下街に近かった高田のほうが先に救出されたのだが、ニュースではテロ事件と扱われて、犯人と思われる人物の死体も発見されている。その犯人たちと工藤は接触していたのかもしれない。
それと上田に話した時に彼が疑問に感じていた黒い装束を着た少年との関係も、高田には分からない。あの少年と工藤がいつ知り合ったのかはもちろん、あまり男子と話さない工藤なので、知り合い

だということに高田はさらに疑問を持った。
「俺が……心配しすぎなだけ……か――」
高田に言われたことが心を強く抉ったのだろうか。上田は小さく呟いた後、黙り込む。
前も同じことを高田に言われていたが、やはり上田は変わらずに工藤を心配している。上田にしてみれば、気になる存在である工藤のことは心配するのが普通という意識があるのかもしれない。しかし友達あるいは部活仲間という間柄でしかないため、本人に直接言うことを躊躇っているのだろう。
「ごめん――。強く言いすぎたかも……」
「……」
「私も幹のことは心配しているわよ。あんたに、頼まれたように気分転換の遊びにも連れて行ったし。それでも幹の中でまだ何かあるのよ。私たちが知らない、何かが――」
「何か……」
高田の言う『何か』が、上田の胸に残る。
それは水面に波紋を広げていく石のように、上田の心に変化をもたらす。

第四章　加害した者が受けた被害　？

5

大木や生い茂っている雑草に広がった炎を止めることはできない。このままでは火の勢いは増すばかりだ。都市部にまで炎が及ぶ可能性もある。

（雨でも降らなければすぐに鎮火は無理か――。この火事を見て、自衛隊でも動いてくれいてればいいが……）

燃えていない大木の幹に隠れることで、敵の動きを探る。ルシオたちにやられた傷はだいぶ治ってきているが、それでも痛みは残っている。『永遠人』の力で傷や怪我は治るといっても、痛覚まではどうしようもないのだ。

「どうした、悠人！！　隠れているだけじゃ私は倒せないぞ？」

隠れた幹の向こう側からルシオの声が届く。狂気に酔ったような声であるが、それでも冷静さを欠いているわけではなさそうだ。悠人が飛び出してくるのを待っているのである。

「このまま森が燃えていくのをただ見ているだけなのか！？　お前が出てこないのなら、都市まで燃やしてしまうぞ？」

さらに挑発を誘う言葉を投げかけてくる。

（どうする……ルシオならやりかねないな……）

かといって真正面に出ることはルシオの罠であることは間違いがない。どう行動するか悩む悠人だが、それほど考えている時間もない。

「出てこないようだな。ならば、仕方ない。このまま都市まで燃やしつくしてやろう」

「止めろっ！！」

部下を連れて、都市を囲む鉄塀へ移動をしようとするルシオに殴

りかかる。
「―っ！？」
「街は燃やさせない！　ここでお前を止める！！」
「ようやく出てきたか……。臆病風は治らないままか？」
不敵に笑い、なおも悠人を挑発するルシオ。その顔は、この闘いを楽しんでいるように見える。悠人はルシオの挑発に乗ることはしないが、その表情に幻惑されて、身体が一瞬固まってしまう。その隙をルシオは見逃さない。悠人の鳩尾（みぞおち）を狙った蹴りが飛んでくる。
「がっ――！？」
右腕を振りあげていたため胸を防ぐことも出来ず、鳩尾にもろに蹴りを受けてしまう。肺の酸素を全て吐きだしてしまうほどの衝撃が悠人を襲う。勢いをつけて殴りかかろうとしていたため蹴りを受けた反動を受けて、また吹き飛ばされる。しかし衝撃を殺すために地面を転がりながらも、手をついて反転し体勢を整える。ショットガンの射撃による追撃が追いかけてくるが、それも回避するように大きく飛び、大木の枝に乗る。
「くそ……」
「真正面から突っ込むことしか脳がないのか？　多対一の戦いには慣れているはずだろう？」
余裕の表情を崩さないルシオは、大木の枝まで回避した悠人を無理に追うことはしない。悠人のほうから打って出てくるのを待っているのだ。
ルシオの言う通り、悠人は今まで個人で行動を行ってきた。相手にするモノ――人間にせよ動物にせよ――のほうが、数が多いということが当たり前だったのだ。その状況に慣れているはずの悠人が劣勢に立たされているのは、追い詰められているからに他ならない。火炎放射器の放射により広がった炎の勢いは止まらず、さらに森に広がっている。
森に広がった炎を鎮火させることよりも、まずはルシオたちを止めることを悠人は優先する。都市部にまで炎を放たれるわけにはい

かないからだ。そう決めた悠人は、大木の枝から弾丸のようにルシオに突っ込む。
（やはり、飛び出してくるか）
予想通り向かってくる悠人に、ルシオはカウンターを見舞う。突っ込んでくる悠人の速度に合わせるだけのルシオのカウンターは、正確に悠人の顔面を捉える。しかし、悠人の拳もルシオの胸を突いていた。
「がぁああ！！」
「ぐ―っ！？」
タイミングをぴったりと合ったカウンターを受けた悠人は吹き飛ばされ、悠人の拳を受けたルシオは地面が数十センチも沈むほどの衝撃を食らう。そして二人がぶつかった余波が周囲の空気をビリビリと揺らす。
二人の距離はまた広がる。
カウンターを仕掛けておきながら、悠人の拳をかわすことができなかったルシオは表情を変える。悠人の攻撃を初めて身体に受けたのだ。
「くそ……っ」
数メートル離れている所で、息を整えている悠人をルシオは見やる。地面に屈んでいる悠人も同じように視線を返す。悠人は次の行動を取るまでの間合いを計るが、それよりも早くルシオが手に持ち直したショットガンを撃ってくる。
「っ……！？」
「逃がさん！！」
射程範囲から逃れようとする悠人をルシオは追撃する。同じ『永遠人』であるが、一歩の大きさの違いにより悠人はすぐに追い付かれてしまう。再び射程距離に入った悠人に対して、ルシオは限界まで引鉄を引く。
「ヴ……っ」
撃たれたショットガンの散弾が悠人の左肩に命中する。

左の肩口に銃弾を受けた悠人は痛みに顔を歪めながら、銃弾を受けた傷を右手で押さえる。散弾はライフルなどに比べて貫通力が弱い。体内に残った銃弾を指で無理矢理抜こうとしている。そこにショットガンから部下の一人が持っていたライフルに持ち替えたルシオが近づいてくる。

「片方の出血がひどいな。バランス良くしてやろう」

「ぐぅうう！」

そう言ったルシオは、悠人の右腕にライフルに装着された銃剣を突き刺す。その剣は地面深くまで突き刺さり、悠人の身体を縫いつける。

「取り押さえろ」

さらにうつ伏せに倒れた悠人の背中にルシオの部下が乗っかってくる。ルシオは、悠人の方へ改めて向き直り、

「やっと捕まえたぞ」

剣が突き刺さったままでは、『永遠人』の力で右腕を再生することができない。そして左腕は先ほど受けた銃弾の傷がまだ残っている。

その悠人を見て、ルシオは勝利を確信する。

「ここまで散々逃げ回ってくれたな、悠人。しかし、これで私の念願が成就する。殺れ！」

短く部下に命令するルシオ。その声はあまりに非情だった。それは悠人を殺すために、悠人を押さえるために背中に乗っている部下をも射殺するということだ。

地面に倒れた悠人に、冷徹な命令を受けたルシオの部下たちが顔色を変えることもなく、一斉射撃を行おうとしてくる。完璧に統率された射撃に起き上がれない悠人には為す術がない。頭や心臓が撃ち抜かれたら、それで死んでしまう。『死ぬ』という恐怖感が久しぶりに悠人を襲う。

（くそ――っ）

しかし悠人の身体に銃弾が直撃することはない。その直前に悠人

の眼前に大きな鳥が飛来してきたのだ。突如現れた体長四メートルを越えているだろうという大きな鳥に気圧された部下たちは、発砲できない。

「トバト――っ！？」

飛来してきた鳥は悠人が飼っている伝書鳩のトバトだった。そして、その背中には工藤が乗っていた。

第四章　加害した者が受けた被害　？

「きみは……！？　ど、どうして――」
「あなたは……」
戸惑いの声を上げる悠人だが、目もくれずに工藤は目の前に立つ大柄の男を一直線に見る。
「おや、地下鉄駅で会った以来かな？」
突然現れたトバトと工藤にもルシオは驚く様子もなく、淡々と言葉を返す。
「やっぱりあなたがこの火事を」
「そうだが、何か問題でも？　そこの悠人を殺すためには仕方なくてね。それに森が燃えることで君に被害が及ぶわけでもないだろう。むしろ街を脅かす存在を排除しているのだ。喜ばれて当然の行為だと私は思うのだが……」
「そんなことを聞いてるんじゃない！！」
ルシオの思いやりを存分に込めているのだ、というような言葉に工藤は頭が切れそうになる。
「強気だな――。悠人がそばにいるからか？　奴がどんな人間かも知りもしないで」
「！？　どういうこと――？」
「な……！？　やめろ、ルシオ！！」
ルシオに聞き返す工藤を見て、悠人が声を再び荒げる。その様子には工藤が見てきた悠人にはなかった必死さが出ている。そんな悠人を見て、工藤の中に疑いが生まれる。そしてルシオは二人のそんな様子を見て、さらに楽しむかのようにニヤニヤと顔を歪めている。
「悠人――貴様は黙っていてもらおうか」
ルシオの命令を受けて部下の一人が、さらに開こうとしていた悠人の口を封じる。これで邪魔者はいなくなった、とばかりにルシオは工藤のほうへ向きなおり、話し始める。

「君は悠人から聞いたときに疑問を感じなかったのか？」
「……疑問？」
「そう。『永遠人』――ここでは『永久の命』計画と言おうか。国連がひたむきに隠しているこの計画は二〇〇六年一〇月のロシア、パラナ研究所の崩壊によって完全に凍結している。それは真実だ。しかし当時、国連が公表した事実は研究していたウイルスがばらまかれ今のような世界になってしまった、というものだ。どのような実験あるいは研究が行われていたのかは世界に知らされていない」
悠人に説明されたときも思ったごとだが、歴史の授業でも何度もテストで出てきた二〇〇六年の全世界を震撼させた事件は、政府がそう発表しただけだと学んでいる。それが真実だと思いながら。
「さて、その研究所で行われていたことは悠人から聞いているな。完璧を求める科学者が人間の命に興味を持ってしまったことから行われた実験だが、それは明らかな人体実験だ。新しい薬品を人体に投与し病原体を破壊することができるかどうか、というレベルの人体実験ではないぞ。人間の身体を完全にいじるというものだ。二〇世紀の終わりから二一世紀にかけて、クローン問題やＥＳ細胞、ｉＰＳ細胞の研究など生命の倫理問題に敏感だった人間たちだ。この実験が公になるとどのような反応が起こるかは想像がつくだろう？
命を気安く扱うな、ということだな」
ルシオは、この状況を楽しむように工藤に話をしている。その工藤の表情一つ一つが彼の興奮をさらに加速させるかのように。
「実験が公になることを恐れた研究者たちは極秘裏に研究を進めていくわけだが、研究の協力者は？　被験者はどのようにして集める？」
「や、やめろっ！！」
右腕に銃剣が突き刺さったまま、苦痛に顔を歪め倒れた悠人が声を荒げる。
しかし、ルシオは聞き入れず話を続ける。工藤も何かに取りつかれたように、身動きができずルシオの話すことを聞くことしかでき

なかった。
「……」
ルシオが言う通り、公にされていない実験に被験者として参加する人はまずいないだろう。どのような内容なのかも分からないのだ。参加すると決めた時点で知らされても、その内容が人体実験では参加を取りやめる人ばかりだろう。さらに、成功するかどうかも分からない人体実験なのだ。失敗した場合の結果がわからない実験など、誰が好き好んで被験者になるものか。
改めて思えば、それは疑問だった。その実験から『永遠人』が生まれていることは事実なのだ。ということは、悠人は実験にどのようにして参加したのだろうか。
「そこで研究者たちが目をつけたのが、とある連中だ」
「とある……？」
ルシオの勿体(もったい)ぶった話し方に、つい反応してしまう。
「犯罪者だよ――」
「は……ん……ざい！？」
その言葉が工藤の頭を強く揺さぶる。
ルシオが言ったことを頭が理解できない、と必死に抵抗しようとする拒絶反応だ。
「そうだ。もっと言えば死刑宣告され、執行待ちの犯罪者だな」
「例外もあるようだがな」と言い、ルシオは視線を一度悠人に移すが、すぐに工藤へと戻す。
「世界には死刑を認めている国が数多くある。それらの国から執行待ちの犯罪者を集めたんだよ。実験の成功のため数多くの人種、さらには年代の人間を集め、より多くデータを取れるようにな」
ルシオが言うことが正しいのならば、そのルシオ自身もそして悠人も罪を犯した者ということになる。
「つまり私も悠人も元は犯罪者さ。悠人の顔の傷を疑問に思わなかったのか？　奴のその傷こそが、自身が罪を犯した者だと示しているというのに。私は刑務所であと幾ばくかの日にちを生きるだけだ

った所をロシアに連れて行かれ、実験に強制的に参加された。何人ほどが連れて行かれたのかは分からないが、研究所が崩壊するまでそれは続いたそうだ」

引き続き研究所で行われた実験のことを言っているルシオだったが、工藤の頭には話半分にしか入ってこない。

倒れている悠人の顔がさらに苦痛に歪んでいる。

それは身体の痛みだけによるものではないだろう。昨日工藤に話をしたときに言わなかったのは、彼が隠したがっていることだからではないだろうか。それをルシオに言われたというのが、さらに悔しいのだろう。

「なん……で……」

こぼれ出る言葉は悠人に届いているのか、彼は顔を少し背ける。

悠人が言わなかったことが、顔を背けたことが、工藤に不信感を持たせる。

第四章　加害した者が受けた被害　？

「悠人がそのことをあなたに言えるわけがない」
「え！？」
悠人に対しての不信感が募り出した工藤にルシオが言う。
「あなたは我々のことを全く理解していない」
「理解？」
「私もそこにいる悠人もロシア、パラナ研究所で行われた実験の被験者であることに変わらない。しかし、私もそいつも被害者でもある」
実験にはルシオも悠人も意思関係なく強制的に参加させられた。それだけでも被害者と言えるということなのだろうか。
「実験に参加させられた人は、みんな犯罪者なんじゃないの？」
「そうだ。しかし実験に参加した時点で、みな一度死んだことになっている。その後は別の氏名、別の経歴を与えられている。生き残った実験の被験者がどうなったかは、悠人から聞いているだろ？」
悠人は生き残り『永遠人』になった被験者が、研究所の機能が停止したその後は、それぞれの国に処分が任されたと言っていた。そして悠人は日本政府高官の命令により、日本全土に広がりつつあった『ＰＣＤＶ』に感染した動植物の対処を任されたと聞いている。
「『ＰＣＤＶ』の対処……？」
「それは、悠人が日本の政府から与えられた任務だろう。『永遠人』全員が、そこの悠人のように待遇が良かったと思わないことだな。まぁ、悠人の待遇が良いものかどうかも定かではないが……。私やそこの悠人も含めて、『永遠人』にさせられた連中は誰も好んでこの身体になりたかったわけではない。喜々として罪を犯していた者もいるだろうが、そうせざるを得なかった者もいるだろう。好き勝手に身体をいじくられ、その果てがこの様だ。さらに政府からは頭ごなしにこき使われる」

「……」
ルシオの表情が先ほどと変わっていることに気付く。それは悠人が話していた時と同じ沈痛な面持ちだ。そのことに工藤は戸惑う。あれほど敵意や殺意を剥き出しにしていた男が、ここまで違う表情を見せているのだ。
「誰が、このようなことを望んだ？　悠人は知らんが、私は望んでいなかった。生き続けることが償い？　それは正論かもしれんな。しかし、『永遠人』は死にづらく、半永久的に生き続ける。私もすでに二〇〇年という時間を生きてきた。その間に様々なことがあったさ。その辛さは君には分からないだろう」
「……！？」
ルシオが悠人と同じ言葉を口にしたことに、工藤は目を丸くする。それほど『永遠人』になった者にとって、二〇〇年という時間が過酷だったのだろうか。
「二〇〇年という時間がどれほどのものか想像もできないだろう？　その時間を『永遠人』は自らの過去を隠し、いいように扱われ生きてきたのだ」
少し語気を荒げるようにして言うルシオに、工藤は気圧される。彼の言うとおり二〇〇年という途方もない時間や、その間に経験したことの辛さは工藤には分からない。それでも、その時間が『永遠人』にとって耐えがたいものであったことは分かった。
「我々の存在を知る者は、元が犯罪者であることも認識している。犯罪者相手に彼らが良識のある態度を取るとは限らない。私もだが――恐らく悠人も二〇〇年生きてきた中で、人間としての扱いをされなかったこともあるはずだ。死にづらいという『永遠人』としての力も、彼ら常人にしてみれば、森を蹂躙しているバケモノ（・・・・）と同じということなのだろう」
「……バケモノ――」
ルシオが、そう表現したことに敏感になる。
「そうだ！　腕や足を切り落としても、また再生してくる。爆発を

受けても身体は五体満足。高層ビルの屋上からダイブしても身体が粉砕することはない。この力の、どこがまともだと言うのだ！？
お前たち多くの人間が、この力を知れば忌み嫌うだろう。だから、我々は存在を知られるわけにはいかず、表舞台で生きることも出来ない！！　本来ならば、すでにこの世にはなかった命だ。それを勝手に二〇〇年も生きながされて、陽のあたる場所で暮らすこともできず、疲れを知らない機械のように、また恐怖の対象として見られている」
段々と声を張るようにして話すルシオの表情が苦悶に満ちている。それは同じような表情を見せた悠人よりもはるかに深い――深い苦痛の表情だ。
「そのように扱われる恐怖があるために我々『永遠人』はみな、実験のこともかつて犯罪者であったことも秘匿するようにしてきたのだ。その真実全てを知りえて、君はまだ我々をまともな人間だと見なすことができるのか！？」
工藤も、悠人から『永遠人』の話を聞いたときは、先に未知のものに対する理解を優先していた。それは彼女の知りたいという強い好奇心も要因としてあるが、全く知らない者に対する恐怖をなくそうとする心理作用が少なからずあったことに変わりはない。知らないということが、恐怖になることはどのような事柄に対してもあることだ。
何より悠人のことをまだ何も知らなかった時は、工藤も彼の威圧感に圧倒され、恐怖を感じていた。
（……恐れられるかもしれない――って、怖かったから話すことができなかった……）
「分かっただろう。悠人が君に秘密にして話したことも無理はない。悠人が君に『永遠人』について話したことも異例なのだよ。我々は自らの存在を語るべきではないと、身をもって知ってきたのでね」
「……」
悠人が話すことができなかった『永久の命』計画について聞いた

工藤は、あまりのショックに茫然とし、その場に蹲る。それを確認したルシオは、また悠人に向き直る。
「工藤幹は当分あのままだろう。あのバケモノはお前たちで対処しろ。殺してかまわん」
「―っ！？」
「はっ！！」
ルシオに命令を受けた部下たちは、ルシオと工藤が話している間も悠人を助けようと大森林の中を飛び回っていたトバトに向けて、発砲を始める。けたたましい銃声が再び森の中に木霊し、驚いたトバトは銃撃を避けるように大木のてっぺんよりさらに上へと逃げていく。
「さて――途中邪魔が入ったが仕切り直しといこうか、悠人」
ルシオが向き合った悠人は、トバトへの発砲を止めさせようと抵抗をしていたが突き刺さったままの銃剣が、腕の肉をさらに引きちぎっていっていた。
「利き腕の上腕を完全に刃が突き刺さっているのだぞ。抵抗などしないほうがよかろう？　力も入らない。ましてや腕を動かすだけで激痛がくるはずだ」
それでも悠人は抵抗を止めない。うつ伏せに倒され、背中に乗っている男をどかそうと、腕を貫き地面に突き刺さっている刃を抜こうと両腕に力を入れて起き上がろうとする。
「ぐっ――！？」
しかし右腕は銃剣が突き刺さり、左腕には銃弾を受けた傷が響いていて思った以上に力が出ない。『永遠人』の力を利用した限界を越えた筋力の使用が出来れば、背中に乗っている男など簡単にどかして立ち上がることも出来るが、今の悠人にはそれだけの力を振り絞ることも出来なかった。
「無様だな。傷の再生はまだ行われないのか？　刃が突き刺さったままの右腕は無理でも、左腕は細胞分裂を行えるだろう？　それとも再生速度が遅いのか？」

「きさま……」
「これ以上は抵抗出来ない――か。もう良いだろう。こちらも追いかけまわすことには疲れた。ここでお前を撃ち殺そう」
悠人に対して、ルシオは拳銃の銃口を向ける。
身動きがとれない悠人は為す術がない。銃口を悠人の頭に向けているルシオを睨むが、それで相手がひるむわけでもない。悠人を助けに来た形になっている工藤は、ショックを受けたままでまだ目が覚める様子がない。トバトもルシオの部下たちに追われて、この場にはいない。
悠人は、このまま殺されるしかなかった。
「地下鉄駅でも同じことを言ったが――この三〇年間、お前を追いかけ続けてやっと私も自身の任務を終わらせることができる。実に長かったよ、お前との追いかけっこは――」
スライドを引いている拳銃の引鉄に指が掛かる。そして悠人の脳天に向けて、容赦なく撃たれる。その瞬間、悠人は反射的に目を閉じる。

森の中に、銃声が轟く。
響いた銃声におびえた小鳥たちが、大木の枝から激しく鳴きながら慌ただしく飛び立つ。それにつられて吹いた風が、大木の枝を揺らす。そして地面を強く揺らす衝撃が起こった。

第四章　加害した者が受けた被害　？？

しかし、悠人の意識はまだあった。
「……！？」
目を開けると目の前に立っていたルシオがいなくなっている。どこに行ったのだろうかと視線を動かすと、周囲に大きな動物が何匹もいることに気付いた。
「な……っ！？　ニホンザル！？」
周囲にいた動物は猿だった。
しかし、その姿はとても大きい。『ＰＣＤＶ』に感染しているのだろうが、体長は三メートルを越しているだろう。その猿が数えただけでも六匹はいる。
（どうして猿たちが――！？）
さらに視線を動かすとルシオが、大きな猿の一匹に対して拳銃を撃っている。さきほどの銃声も猿に向けたものだったのだろうか。それは分からないが、猿たち金切り声を上げながら見境なく暴れはじめる。
猿たちは所構わずルシオやその部下たち、工藤にまでも飛びかかってくる。
「ちっ！」
ルシオは『永遠人』の力で為せる限界を無視した筋力使用で一〇メートル近い跳躍をし、大木の枝に飛び避ける。しかし部下たちは動きの速い猿たちから逃げることが出来ず、あっという間にやられていく。『ＰＣＤＶ』に感染した猿のあまりに強い力に、ルシオの部下の中には腕がちぎられた者もいた。その部下の悲鳴が周囲に響きわたる。悠人の身体を押さえつけていた部下も猿になぎ倒される。うつ伏せに押さえつけられていた悠人は、背中に乗っていた部下がいなくなったことで、やっと身体を起き上がらせる。
「ちょ……、きゃっ――！！」

さらに猿たちは、無防備の工藤にも襲いかかる。訓練を受けているだろう屈強なルシオの部下でも、いとも容易く腕がひきちぎられてしまうのだ。女の子である工藤ではひとたまりもないだろう。
（まずい――っ）
工藤の悲鳴を聞いた悠人は、腕に突き刺さった銃剣を左手で一気に引き抜く。
「ぐっ！！」
激しい痛みを感じ、引き抜いた傷口から血があふれ出るが気にしている場合ではない。左手で右腕の傷口を押さえたまま立ち上がり、工藤のもとへ走る。
「このやろうっ！！」
そして、工藤に襲いかかろうとしていた猿に蹴りを放つ。悠人の強烈な回し蹴りが猿の頭を的確に捉えて、そのまま体長三メートルを超す猿を吹き飛ばす。
「大丈夫か！？」
「う、うん――」
工藤に襲いかかろうとしていた猿は蹴り飛ばしたが、まだ周囲には数匹の猿がいる。上を見上げると大木の枝にも猿が見えた。その猿はルシオにまさに飛びかかろうとしている。
（ここは危険すぎる……）
「トバトっ！！」
大きな声で、空まで逃げるようにして飛んで行ったトバトを呼び戻す。
「ちょっとじっとしていてくれ」
「えっ？　ちょ……！？」
驚く工藤を無視して、その身体を抱える。そして悠人のそばに降り立ったトバトに、飛び乗る。
「頼むトバト、ここから離れるぞ！」
悠人の指示を聞いて、トバトは大きく翼を羽ばたかせ一気に飛び立つ。その様子を大木の枝から見ていたルシオが怒りの眼で見てい

た。

第四章　加害した者が受けた被害　？？

6

暴れていた猿たちから離れたトバトは、この地域で一際目立つ――大木よりさらに大きな――巨木の枝に降りる。なんとか切り抜けられたというような状況だったが、まだ生きているという感覚を工藤は感じていた。トバトから降りた悠人は盛んに燃えている東の森を見ている。その腕からは大量の血の跡があった。

「大丈夫？」

「あぁ。傷自体は治ってきている。」

心配してくる工藤に軽く返す悠人だが、浮かない表情だ。腕に銃剣が突き刺さった傷は見れば、たしかに塞がりつつあった。

「どうかしたの……？」

「いや、来てくれて助かった。ありがとう」

「あ、うん――」

突然お礼を言われて工藤は驚く。悠人の口からそのような言葉が素直に出てくるとは思わなかったのだ。

「どうして君が、ここに？」

工藤が現れた時に、答えが聞けなかった質問を悠人は繰り返す。

「学校で、ここで火災が発生してるってのを聞いて、もしかしたらあなたが関係してるのかなって思って」

「……そうか。ニュースにでもなっているのか」

「うん。何があったの？」

大森林で火災が起こるということは稀なことで、ニュースで大々的に取り上げられることもある。人が立ち寄ることもないため発生理由が落雷によるものくらいしかなく、今日のように天候が悪くもないのに火災が発生することはまずないのだ。

「俺を地下鉄駅で襲ってきたやつらに、どうやら俺がここに住んでることがばれたたらしい」
「えっ！？」
「それで、また殺しに来たんだよ。君がトバトと来てくれてなんとか助かったが……」
「そ、そっか……」
悠人は気になることを言った。
彼の住んでいる場所がばれたのは何故なのだろう、と工藤は疑問に思ったが、今はそれどころではない。
「あの猿たちは、どうして暴れ出したんだろう？」
「おそらく、あそこの森一帯が猿たちの群れのナワバリだったんだろう。森が燃えているのを見て、ナワバリを荒らされたと思って暴れたんじゃないかと思う」
ニホンザルは現在でもとても気性の荒い動物として有名だ。かつてはニホンザルによる農作物の被害が多くあり、餌付けなどで対応されていたのだが、大森林の広がりとともにニホンザルたちの分布は大きく広がり、また完全に野生化していったのだ。
「基本的にニホンザルは数十頭の群れで行動している。あの巨体の群れに襲われるのだけは避けないと……」
そう言いながら、巨木の枝から遠くまでどこか安全に隠れる場所はないかと探している悠人に、工藤はルシオの話を聞き、気になっていたことを恐る恐る尋ねる。
「ね、ねぇ――。あの男の人が言っていたことはほんとなの？」
突然の工藤の質問に、悠人は身体をビクつかせる。
「……あぁ――」
絞りだした声はとても小さいものだった。それでも工藤の耳には届く。
「ってことは……あなたは犯罪者なの？」
「そう……いうことになる……」
「な、何をした……の……？」

苦しそうに言う悠人の言葉が頭を強く揺さぶる。それまで悠人が犯罪者だとは思いもしなかった。確かに冷酷な眼や話し方には威圧感を感じていたが、それでもそのような人には思えなかった。

第四章　加害した者が受けた被害　？？

「……人を……殺めたんだ……」
「っ！？」
悠人の言葉を聞いて、言葉にならない声が漏れる。
「人を……！？」
俯く悠人の表情は見えない。
悠人が工藤に言わなかったことには、彼なりの思いやりがあったのだろう。知りたいこと全てを教えると言い様々な世界のことを教えてくれたが、自身の過去については何も話していなかったことを思い出す。それは工藤に疑心を与えるからか、分からないが悠人には話すことができなかったのだろう。
「……話してなくて、すまない……」
「ううん。話せなかったんだよね？」
悠人の気持ちにはなんとなく気付く。犯罪者として疎まれることを恐く感じたのだろう。過去にそういう経験があるのかもしれない。だから工藤にも『永遠人』になった人間の経歴を話すことが出来なかったのだ。その気持ちに気付き、工藤は努めて優しく声をかける。
「いいよ。あなたが過去にどんな罪を犯した人でも、私が知っているあなたはそんな人じゃないって信じてるから」
「工藤……」
笑いながら「ぶっきらぼうなとこもあるけどね」と付け加える工藤は、まっすぐな瞳で悠人を見据える。
「たしかに『永遠人』になった人が犯罪者だったっていうのはびっくりした。あなたが過去に犯した罪のことは知らないけど、それはもう二〇〇年も前のことでしょ？　生き続けることが償いっていう考えも分かるよ。そのせいであなたがどれほどの辛い経験をしてきたのかは分からないけど、今のあなたは犯罪者じゃないんでしょ？
地球のために新しいワクチンの研究もしてるくらいなんだから。

それだけで私には、あなたが本当に良い人なんだって思えるよ。私のことを助けてくれたこともあるしね」
「……」
強い視線で見つめられた悠人は、視線を逸らすことも声を上げることもできない。
「それに、いつまでも『永遠人』ってのに囚われる必要もないんじゃないかな？　あなたは世界を救うために戦っている一人の人間だって思えばいいと、私は思うの。『永久の命』計画だっけ？　その実験の産物である『永遠人』が自分なんだって思うから、あの男の人が言ってたみたいにバケモノ扱いされるんじゃない？　そう思わずに、自分も私たちと変わらない――この世界に住んでいる一人の人間だって思えば、きっと心は救われるよ」
『永遠人』という存在は公表されれば多くの人の脅威の対象になるだろうことは、全ての『永遠人』が恐れていることだ。悠人もルシオもそれは変わらない。それぞれの過去に似たような経験があるから、二人とも自身の事を隠しているのだ。
しかし、それは自身も恐怖の対象になりかねない『永遠人』として認識してしまっているからだ。『永遠人』と工藤のような人間の差は、言ってしまえば細胞分裂が無限に行えるかどうかでしかない。それが『命の長さ』に繋がるため、人は羨望と恐怖の対象にしてしまうのだろう。工藤が言っていることは、それを意識しなければ『永遠人』も人間と同じということなのだ。
（難しいことを簡単に言ってくれるな。でも、心が救われる――か……）
「……本当に変わったやつだな、お前は……」
工藤の優しさが身に沁みる。
「褒め言葉だって思っとくよ」
ニッと笑う顔は、悠人が随分と長らく見ていなかった表情だった。
（人ってこんなに生き生きと笑うんだったな――）
「褒めてはいないけどな――」

「あっ、ひどい！」
　こうして笑いあいながら冗談を言うことも、とても久しぶりだと思う。それほど人と触れ合うことを拒絶していたのだろうか。自分にそのような自覚がなかったのだと悠人は気付く。
「それで、どうするの？」
　それまでの和やかな雰囲気を改めるように工藤が悠人に尋ねる。
「猿たちが暴れたことでルシオたちから逃げることは出来たが、おそらくまだ俺を狙っているだろう。この森の何処かにいることは間違いない。また殺しに来るだろうな」
「戦うの？」
「……今までは隙をみては逃げることを繰り返してきたが、ここがばれちゃ逃げても意味がないからな。戦うしかないだろう」
「で、でも勝てるの？」
「勝つ必要はないさ。あいつらの戦力を削げばいい。それに人は殺したくないからな――」
　その一言に、工藤はやはり悠人の人柄を見る。
　悠人のためを思って、彼が過去に人を殺したという告白を深く掘り下げなかったが、工藤には悠人が人を殺したということがなかなか信じられなかった。
「戦力を削ぐって――どうすれば……」
「それは簡単だ。奴らが持っている銃器を使いものにならなくすればいい。どれほどの装備で来たのかはわからないが、ガス爆発でも火炎放射でも死なない身体だ。銃弾は頭か心臓を撃ち抜かれなければ問題はない」
「撃ち抜かれなければ問題ないって――。どれだけ弾が速いのかもあなただって分かるでしょ」
「君こそ、さっきまで何を見てたんだ？　銃弾程度避けることは難しくない。『永遠人』はその能力を活かして、身体の筋力増強を行っている。普段人間は、筋肉の過剰使用など身体のあらゆる部分を脳が抑制しているが、それは身体を守るためだ。『永遠人』は、細

胞分裂による即座の身体再生が行える。身体の過剰使用に耐えられるんだよ。そこで、身体に極小の電子チップを埋め込んでいる。そのチップが脳波を遮断し、限界を越えた筋力を使用できるんだ。それを利用したらある程度速く動くことは可能だ」

悠人の説明を受けて、工藤はやっと気付く。

『ＰＣＤＶ』に感染したカラスに襲われた時に高層ビルの屋上から突然現れたことも、『ＰＣＤＶ』に感染した猿を蹴り飛ばしたことも常人には出来ない芸当だ。『永遠人』の能力を利用した筋力増強で行ったと言う。

「ただ『永遠人』であるルシオは脅威だ。『永遠人』の力は細胞分裂を自在に行うことができるというだけで、そのほかに付加される力はない。同じ『永遠人』で単純に力の優劣はつかないが、人種の差は出る。もともと持っている腕力や身体的な差だけはどうにもできない」

それならば欧米人との体格差など問題ではないような気もするのだが、悠人によれば「向こうも同じ技術を使っているから、元の数値が重要になるそうだ。

「欧米人には身体的に敵わないってこと？」

「俺の場合そういうことになるな」

実際に悠人はルシオに首を掴まれた際、抵抗しようにも力が及ばなかった。身体面では個人差が顕著に出るのが『永遠人』たちの性質ということなのだろう。

「じゃあ、どうするの？」

「やつらの武器を無効化することもルシオに対抗することも、何も俺一人で対応する必要はないさ。ホームなのはあくまでも俺だからな」

そう言う悠人は、何か策があるかのように目を不気味に輝かせている。

そして、その視線の先には遠くの森で、まだ燃え盛っている炎が捉えられていた。

第四章　加害した者が受けた被害　？？

7

いきなり現れた猿たちにより、ルシオたちにも少なからず被害が出た。
「損害は――？」
「はっ。え～、負傷者七名――その内、四名は身体をひきちぎられるなど、今後の戦闘行動は不可能と思われる重傷です。また装甲車両はなぎ倒され、精密機器などに損傷が出ています。無線などは使用可能ですが、生命センサーなど索敵機器は機能しません」
被害報告を聞いて、ルシオは一息吐く。
またしても悠人を追い詰めたところで、逃げられたのだ。猿が暴れる、ということは必ず予想出来たということではないが、考えられないことでもなかった。それなりの装備を用いているためＰＣＤＶに感染した動物に対しても対応できると踏んでいたが、
「使えなくなった武器や機械は捨てろ。こうなれば、歩いて目標を探すしかない。ＨＭから確認された奴の家もこの付近にあるだろう。まずはそこから探す」
「はっ！」
（まぁ、いいさ。アクシデントがあった方が、緊張感を楽しめるというものだ――）
それでもルシオは、圧倒的な余裕を感じている。
それは悠人など容易に踏み躙ることができると考えているからか。それまでの戦いでもルシオと悠人の力の差は見せ付けたつもりだ。真っ向から立ち向かうことしかしない悠人には負けないという自信がルシオにはある。
負傷した部下たちはその場に置いて、ルシオはめぼしをつけてい

る悠人の家に向かう。悠人がＰＣＤＶに感染していただろう鳥に乗って、この場を離れたところを目撃している。どこに逃げたのかは分からないが最終的には家に戻るだろう、とルシオは確信している。

そのルシオたちから一時的に離れた悠人と工藤は再びトバトに乗り、昨日も訪れた悠人の家のそばまで来ていた。

「本当にここにいるの？」

心配そうに工藤は、悠人に尋ねる。

「あぁ、間違いない。俺がルシオだったら、ここで俺が帰ってくるのを待ち伏せしているだろう。これだけ広大な森林だ。あてもなく探すなんてことはしないさ」

「ここに俺が住んでいることがばれたらしい」と悠人は言っていたが、本当にルシオたちは知っているのだろうかと工藤は疑問に思う。それでも確信があるように悠人は答える。

「とにかく――ルシオは俺を殺そうと躍起になっている。工藤は決して前に出るなよ」

「う、うん」

強く忠告されて、工藤は悠人の後ろにトバトと一緒に隠れる。悠人に言われなくても、戦闘の矢面に出るということはしない。先ほどの猿たちが暴れたところを見ただけでも足がすくんだのだ。

（工藤たちを庇いながら、どれだけ戦えるか……）

それまでは猪突猛進のごとくルシオに向かっていっていた悠人だが、今回は無暗に突っ込むことはしない。一般人である工藤がそばにいるとなると戦い方を変えなければならない。悠人一人でもルシオたちには敵う要素もなく、やられていっていたのだ。自然と悠人は緊張する。

「大丈夫――？」

その背中を見て、心配した工藤が声をかける。

「あぁ、これは武者ぶるいだ」

しかし、工藤には強がりに聞こえる。
悠人が、今までこの世界でどれだけの経験をしてきたのかは知らない。だが、そのほとんどが彼は一人だったのだと思う。もしかしたら悠人は、誰かを守りながら戦う、ということをしたことがないのではないだろうか。工藤にはそう思えた。
それでも地下鉄駅のテロ事件の時は逃げだした悠人が、今回は投げ出すことはしない。それは工藤を巻き込んでしまったからか。そして大木の陰から、家のほうへと歩き出す。
悠人の予想通り、ルシオたちは悠人の家で待ち構えていた。
「やっとご帰宅か？」
またしても不気味な笑みを浮かべているルシオだが、悠人は表情を崩さない。
「お前がここにいることは分かっていた。なぜ俺が住んでいる場所が分かったのかは見当もつかなかったが――」
「なんだ、気付いていなかったのか？　思慮深いお前なら、とっくに気付いていたと思っていたが」
「何をだ？」
ルシオの言っていることが理解できなくて、悠人は問い返す。その悠人を見て、ルシオは我慢できないという感じで下品な笑いをしている。
「あはっは――っ。失礼、本当に気付いていないのだな。悠人、お前の後ろにいる人物が教えてくれたのだよ」
「――！？」
振りかえった先には、工藤がトバトの身体に隠れるようにして、こちらの様子を窺っている。人物ということは、工藤が悠人の住んでいる場所をルシオたちに教えたことになる。疑問に思っていると、ルシオが自ら答えを教えてくる。
「工藤幹に対しては、我々の思い通りだったのだよ」
ルシオの言うことに対して、悠人は眉をひそめる。
「どういうことだ？」

「この三〇年間ずっと世界各地を飛び、お前を追いかけてきた。お前が日本政府からセルウイルスの対処を任されているという情報は入手できたが、お前がどこに住んでいるかはずっと分からないままだった。そこで我々が考えたのが、お前がＨＭと呼んでいるホログラフィックヒューマンを使った計画だ」
ルシオの話に工藤と悠人は自然と耳を傾けてしまう。
「我々が手を下すのではなく、悠人――お前がその住処を自ら明かすように仕向けたのだよ。ＨＭを使い、悠人に興味を持ちそうな奴を探し出し、その人物の近くでわざわざお前を追いこむテロ事件を起こし、その人物と悠人が接触するように仕向けた」
「……！？」
「その人物が『永遠人』に興味を示すようにキーワードを与えてやり、こちらの思惑通りその人物は真相を知りたいがために悠人に問い続けた。折れたお前はその人物に全てを教えてやると言い、自らの家に連れていったな？　我々が監視していることも知らずに」
工藤の顔には驚愕の表情が浮かんでいる。それはルシオの言葉が信じられないからだ。
「き、貴様……」
（わ、私のせい……）
悠人の家がばれたのも悠人が殺されそうになっているのも、工藤は自分がテロ事件以後『永遠人』や世界の真実を知りたいと思ったことだと言われ、さらにショックが隠せない。
「どうだ？　お前たち二人とも私の計画通りに動いてくれたよ。ただここに工藤幹がやってくるとは思いもしなかったがな……」
そんな工藤の様子を見て、悠人はルシオに対してさらに牙を剥く。
「怒ることはあっても、それを自らの責だと思う必要はないだろう。我々がそうなるように仕向けたのだ。工藤幹は時折、強烈な寒気を感じていなかったか？」
「あ……」
思い出した。ショッピングモールや地下鉄駅で工藤は、悠人と初

めて会ったときとは違う身の毛がよだつ寒気を感じている。
「覚えがあるようだな。それこそが我々が君を監視していた証だよ。ばれるのではないかという不安も我々にはあったが、ＨＭの見る映像を通して君を監視していたのだ」
　何の寒気だったのだろうか、とその時は疑問に思っていたが、その後にテロ事件に巻き込まれたりして、その後に悠人のこと同様頭の中から消えていたのだ。ルシオに言われるまで思い出すことはなかったが、思い出してからそれまで感じていたショックよりもルシオに対する怒りがふつふつと湧き上がる。
「私の生活を監視していたってこと――？」
「そういうことになるな」
　平然と答えるルシオに飛びかかりそうになる。それを悠人は片手で制するが、視線はルシオを射抜くように鋭く冷たい。
「やはり、人として最低だな……」
「おや、言っただろう？　この世界においては割り切ることが必要だ。生活を監視するのは違法行為だが、任務達成のためだよ。それに私という存在自体が違法なのだ。これ以上法を犯すことを気にすると思ったか！」
「開き直りやがって――」
　自らの存在を罪だと意識したルシオは、行う行為が善悪に関わらず違法だと言ってのけた。そう意識することは自らの中に核を形成するだろう。自らが行う行為によって、たとえどのような――人を殺す、など――結果がもたらされようとも、それによって自らが揺らぐことがないのだ。
「そうでもしないと、この身体で生きていけないのだ！！　殺れ――っ！！！」
　ルシオの号令により様々な場所に隠れて控えていた部下たちが、ショットガンを撃つ。しかし一回の跳躍で五メートルほども飛びあがった悠人には当たらない。それを予測していたルシオが悠人の着地時を狙って、勢いよく飛び出すが、

「―っ！？」
そこにまたしてもＰＣＤＶに感染した猿たちが現れる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2828v/

16年の君が、200年の俺と出会った世界

2011年10月10日03時24分発行